
弓使いの辿る道

baenre

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

弓使いの辿る道

【Zコード】

Z0401X

【作者名】

baenre

【あらすじ】

弓を愛し、弓を引くことだけを目的にVRMMOを始めた彼は、気づけば7年もの間引きこもってゲームに精を出す毎日を送っていた。ある日を境に数万人のプレイヤーがゲームの世界に投げ出されるも、意外に落ち着いた廢人たちとともに淡々と弓を引く毎日をする主人公。弓を偏愛する彼と廢人プレイヤーたちの冒険の物語。

プロローグ（前書き）

週一くらいで更新しようとおもいます。文章や設定に関する感想は大歓迎です。誤字・脱字等の指摘もして貰えるとありがたいです。

プロローグ

ネットゲーム『maybe world online』の中で変わり者の廃人プレイヤーとしてそれなりに認められてるその男は、しかし大方のネット廃人がそうであるように現実での生活は酷いものだった。

元々彼の生家はそこそこ大きな剣道の道場であり、彼自身は弓道を好んでいたものの同じ武芸者として両親との仲はよかつた。中学時代には全国大会にも出場し、ベスト16にまで進んだ彼がなぜネット廃人に成り下がってしまったのかというと、高校一年の夏に交通事故によって下半身不随になってしまったからだつた。スポーツ推薦によって入つた高校で非常に居心地が悪くなつた彼は、自室に引きこもつて当時から流行していたVRMMOに熱中しだし、現実世界で弓が引けない分仮想現実の世界では一流の弓士として活躍していた。両親はさんざん彼を説得しようとしたものの、弓道だけが生きがいだった彼にとって、いまさら『弓がひけない現実世界で暮らすなど真っ平ごめんだ』た。彼が引きこもつてから3年目に両親も交通事故で亡くなり、彼に同情的な兄に道場の運営を任せて、いつそう仮想現実に熱中するようになつた。

そんなわけで引きこもつてから7年が経ち、彼は兄に養つてもらいながら仮想の世界で『弓』を引いていた。

『maybe world online』、通称MWOは近世ヨーロッパ風の世界と江戸時代の日本を足して2で割つたような混沌とした世界であり、剣と魔法を初めとして様々な武器が使われている。剣はもちろん、槍や槌、スリングや斧など、多種多様な武器があつた。

彼自身は、当然のように弓を愛用していた。弓という武器は扱いづらい上に魔法のような華やかさもなく、熟練度の上げにくさから愛好するプレイヤーは少なかつたが、それでも彼は弓を使い続けた。彼にとってレベル上げの効率やPvPの強さなどはそれほど重要ではなく、重要なのは和弓が引けるというただ一点だけだったのだ。

射程が短く、一矢の威力も低いが速射性に優れる洋弓と違つて、和弓は威力と射程には優れていたが、速射性は非常に伸びづらい。和弓 スキルの熟練度とステータスを上げれば速射性がある程度まで高めることはできるのだが、彼は多くの矢を射すことよりも正確で威力のある一矢を射ることを好んだ。だからレベルも上がりにくくスキル熟練度の上昇も緩やかなものだつたが、しかし7年もの間引きこもりとして一日中ゲームにログインしていた彼は、レベルはカンストし、和弓 スキルはトップクラスの熟練度を獲得していた。

その出来事が起つたのは、ある夏の昼下がりだった。

世間一般の学生や社会人がこぞつて夏休みを満喫していたその日は、およそ3万人前後のプレイヤーがMWOにログインしていた。彼がいつものようにMWOにログインし、掲示板で臨時パーティを募集してボスモンスター討伐クエストに参加した帰り道、とつぜん視界が白い光で埋め尽くされたかと思うと 次の瞬間にには今まで見たこともないようなリアルな世界が広がっていた。

「あれ、メニュー画面が開けない……おかしいな、システム上ログインしている以上はメニュー画面が開けないと言つのはありえないん

だけど

即席パーティのうち、比較的若いエルフの男が焦ったように咳いた。

「運営のイベント、にしては急だし手が込んでるな。とりあえず、
氣味が悪いからさつさと街に戻つてしまおう」

ハーフ・オーガの男性プレイヤーが、先程までのボイス・チャットとは打つて変わった低い声でそんなことを言つた。

「あれ、ナオミさんもガトーさんも、声変わつてません?」

彼、プレイヤーネーム『ディーン』は声を発した一人に尋ね
そして、ぎょっとした顔であわてて自身の咽を触り、あー、あー、
と声を出し始める。

他のプレイヤーたちも自身の声が変わつてることに気付いたのか、あわてて発声を初め、混乱した表情で隣の者となにやら話しあじめる。直前まではキャラクター作成時に設定した機械的な声だったのだが、今彼らが出している声は明らかに生身の人間の声だ。

「何が起きてるのかは分からんが、ガトーさんが言つたとおり氣味が悪い。走れば15分もかかるはずだから、街まで戻ろう。運當に問い合わせるのは街に戻つてからでいい」

ゲオルグというプレイヤーネームの竜人がどことなく不安そうに辺りを見回しながらパーティの面々を急かす。確かに、彼らが今何んでいる夕暮れ時の森は先程までは打つて変わってリアルで、その分不気味さが増していた。

「そうですね、何が起きてるのかメインメニューも開けませんし、街に戻つて情報を確認しましょ」

「ディーンがそいつ言つと、他の面々も一様に頷いて走り出した。ディーンだけは腰につけた 無限巾着 から使い魔を召喚するための音叉を取り出し、指で弾く。

澄んだ音が森に響くとともに、森の奥から墨で染めたように真っ黒な、巨大な馬が飛び出してきた。馬はディーンの前で脚を折り、ディーンがその背に騎乗すると彼の意を受けて走り出す。

レベルが150を超えて、レンジャー のジョブにつけば 使い魔 を使役することができる。使い魔は基本的に高速で陸上を移動するタイプのものと、ゆっくりと空を飛ぶタイプのものに分かれるが、ディーンが使役する ナイトメア は前者のタイプだ。使い魔には騎乗して戦闘に臨むこともでき、これはステータスや固有スキルにおいて中途半端なレンジャーが唯一他のジョブに誇れる点である。使い魔に騎乗すれば他のジョブには真似できない圧倒的なスピードで移動することができるし、モンスターから逃げることも容易になる。

ディーンが使用している上級ジョブ レンジャー は、剣と弓の2つを使いこなす、ソロでのプレイに向いたジョブだ。彼は最初弓に特化した アーチャー を選択するつもりだったが、流鏑馬というのを一度でいいからやってみたいと思っていた彼にとって、その願望を実現できる レンジャー のジョブはあまりにも魅力的だった。弓に関する固有スキルの数や命中率を左右するDEX（器用さ）の成長値はアーチャーに劣るもの、ステータスはVIT（生命力）やDEF（防御力）を捨てることでどうにか補えたし、そもそも長

距離狙撃だけを重視する彼にとってスキルの寡多はそれほど重要でなかつた。

ディーンの使い魔である ナイトメア はかなりレアな種族であり、移動速度はそこそこで、トップクラスの持久力と地上から数セント浮いていることによる乗り心地のよさが人気の使い魔だ。外見の不気味さがネックだが、性能はトップクラスだ。

街に向かつて走る皆は、一様に不安げな顔をしていた。メニュー画面が開けないことやいつの間にか声が変わっていること、周りの風景が妙にリアルなこと 皆の頭の中には共通してあるひとつのが仮説が浮かんでいたが、彼らはその仮説を信じる気にはなれなかつた。この科学の発展した22世紀に、ゲームの世界にトリップなどありえない、と。どうせ、いたずら好きな運営が仕掛けたたちの悪い冗談なのだ 不安を紛らわすかのように、皆はそんなことを言い合つて運営を批判していた。

彼、ディーンはといえば、周囲を警戒しつつ黙々と遠くを眺めていた。熟練の射手であり 千里眼 スキルを持つ彼は、周囲に敵影がないか確認しながら8kmほど先にある街の門の様子に目を凝らし、なにか変わったことがないかと探つてているのだった。

5分ほど使い魔を走らせ、森を抜けると、肉眼ではつきりと街の門の様子が確認できた。

この近くにある街 城塞都市マツマエ は、現在海を渡つた向こうにある魔界からの侵攻を防ぐための、もっとも重要な拠点である。弧状の島国である エド帝国 に住む冒険者のうち、最高峰のレベルを持つ者たちが集まつて、侵攻してくる魔物を日々撃滅している。

そんなマツマエの街の門では、明らかに高レベルと思われるプレ

イヤーたちがおよそ50人ほど集まつて、ときおり寄つてくる魔物を屠りながらなにやら話し合つてゐるようだつた。ディニンがそのことをパーティの皆に伝えると、パーティの面々は情報を入手できるかも知れないと呴つて、少し急ぎだした。

城門前で集まつてゐるプレイヤーたちに近づくと、彼らもディニンたちに気付いたようだつた。ディニンたちのパーティのリーダ格だった、ハーフ・オーガのガトーが野太い声で近づいてきたドワーフの男に尋ねる。

「一体全体、何が起つてゐるんだ？ 運営から告知とかはあつたか？」

「いや、こゝちもそのことで混乱しててな。城門のNPCが急にいつもどパターんの違うセリフ言い出したし、A.I.が進化したのか受け答えも妙に高度だし、相当奇妙な事態だぜ、こりや。とりあえずできるだけかたまつてたほうがいいだろうつて、お前さんがたみたいに狩りから帰つてくるプレイヤーを待つてゐるんだ」

両者は知り合つてからランクな態度で情報を交換する。

「街には入れるみたいだが、今はやめといたほうがいいだろう。メインメニューも開けないし、運営から告知もないから、何かどんな事態が起こつてるのかもしれないぜ」

ドワーフの男は、そう呴つて人ごみの中へと戻つていった。

その会話を聞いたパーティメンバーは不安な面持ちで石造りの大門を見つめ、隣同士でなにやら話している。

ディーンはこの事態が運営のいたずらなどではなく、何かとんでもないことが起こっているのかもしれない、と考え始めていた。メニュー画面が開けないということはログアウトもできないということであり、いくら茶目っ氣に富んだ運営でもログアウト不可の状況を作り出せば訴えられてもおかしくないのだ。何が起こっているにせよ、とりあえずは知り合いを見つけて異変に備えなければいけない。

彼がその顔をパーティの面々に伝えると、彼らはいつそ不安げな面持ちになつたが、ディーンの意見自体には賛同した。臨時パーティを解散し、彼らがそれぞれの知り合いを探そうとし始めたとき、プレイヤーたちの集団の中から、大きな声が聞こえた。

「えー、私はギルド シュラーゲン に所属する吟遊詩人のパーティと申します。とりあえず、私どものほうで現在起きている事態についていろいろと検証してみたので、聞いてください」

吟遊詩人のアビリティ 大声 を使用しているのか、その声は異様に大きく、それでいて耳に心地良かつた。

「現在確認されている異常は、さつきまでと比べて異様なまでに周囲がリアルであること、NPCの受け答えが現在技術では不可能なほどに高度になっていること、メニューが開けずログアウトもできること、それにもかかわらず スキル は使用可能である」と、そして 「我々が生理的な衝動を感じることです」

集まつてパートレムの話を聞いているプレイヤーたちは、最後の一言を聞いて衝撃を受けた。本来、MWOをはじめとするVRMM

〇では尿意や便意、食欲・性欲などの「生理的欲求」は感じないよう法律で定められている。それにもかかわらず生理的な欲求を感じるとはどういったことか、とパートレムに向かつて大声で詰問するものもいた。

「『静肅に、ご静肅に！』私自身も信じられない思いですが、どうやらこれは本当のことのようです！この異常な事態に巻き込まれたことで気づいていない方もいるのでしょうか、今私は確かに尿意を感じています。皆さんの中にも、そういう方はいるのでは？」

パートレムが大声でそういうと、何人かのプレイヤーが自分も尿意を催していることを自白した。彼ら自身信じられなかつたようだが、仲間がいるとわかつて自分がおかしくなつたわけではないと悟り、ほつとため息をついていた。

「私がいま話したいいくつかの変異から導き出せる結論はひとつ端的に言えば、我々は今、『maybe world online』の世界にいるのです」

パートレムが厳かにそう宣言すると、一瞬だけ場が静まり返りそして次の瞬間、プレイヤーたちの怒声が響き渡った。

「『静肅に、ご静肅に！』信じたくない気持ちはわかりますが、少なくともこの考え方以外にこの事態を説明できる説はないのです！それに、たとえ私の考えが間違つていようとも、すくなくとも我々がログアウト不可の状況で、生理的な欲求を感じながら生きていかなければならぬのは変わりません！」

プレイヤーたちの怒号を遮つて、パートレムが怒鳴り返す。

「ひとまず、街に入つて宿と食事を確保するべきです！ 今晩10時ご、マジマ工中央街のギルドホールにてプレイヤーの集会を開催しようと思ひます！ 私たちは今から街に入つて宿を取るので、皆さんもぜひお好きなようにしてください！」

そう叫んで、パートレムとギルド シュラーゲン の面々は門を通りて街の中へと入つていった。

プレイヤーたちが混乱していることわめきあつてゐる中、ディーンは人ごみをかきわけ、街へ入るうと試みる。門の兵士にいつもどおりアイテム 通行許可証 を見せ、マジマ工の街の中へと入つていった。

(ゲームの世界にトリップ? 馬鹿らしい話だけど、今の状況ではあながち馬鹿にできない説だな……)

武家屋敷と洋館が雑然と立ち並んだマシマトの町並みを歩きながら、ティーンは現在の状況について考えていた。

ここが異世界だろうがなんだろうが、彼としては弓が引ければそれでいい。一番困るのは、死んで弓が引けなくなることと、一度とこのゲームにログインできなくなることだ。この世界のリアリティが増したというのなら、むしろよりリアルに弓を引けるようになつたということであつて、喜ぶべき状況かもしれない、などと思考する。

彼は物思いにふけりつつ、知っている中でもっとも快適な宿を目指す。HP回復や生産スキルの使用のために宿屋を利用することはよくあつたので、ほとんどの上級プレイヤーが宿屋の場所なんてろくな記憶していない中、彼は居心地のいい宿屋の場所を知っているのだ。

知り合いで連絡を取ろうかとも思つたが、どの道こんな大混乱の中で他人とつるんでも動きがとりづらくなるだけだろうと考え、ひとまずは宿と食事の確保を優先した。それに、メインメニューが開けない現状では、念話は使えないのだ。

「すいません、とりあえず一週間ほど宿泊したいのですが……」

和風の宿に着いて、彼は受付のNPCに話しかけた。従来ならば

NPCの頭上にアイコンが表示されており、それを操作することで会話せずとも宿泊の手続きは取れたのだが、アイコンが表示されない現在直接話しかけるしか方法はなかつたのだ。

「素泊まりなら一週間なら金貨3枚だよ。朝食付きで金貨3枚と銀貨5枚、夕食もつくと金貨4枚だ」

「じゃあ、朝食と夕食つきでお願いします」

彼は旅館のおかみに金貨4枚を渡し、部屋に案内してもらう。お金やアイテムを重量を無視して無限に収納できる 無限巾着 は使えるようなので、お金に余裕はあるのだ。これまで食事の必要がなかつたから素泊まりで済ませていたが、パートレム氏の話だと食欲もあるようなので、食事も頼むことにした。

それにして、以前はNPCがこんな人間くさい対応をするなんて事例はなかつたはずだ、と彼は思った。大半のNPCはAIの程度が低く、数パターンのセリフしか言えないのが常だったのに、この女将はパターンになかつたセリフを言つてのけた。一体何が起こつているのだろう、と彼はそこはかとない不安を感じ、寒さも相俟つて体を震わせた。

案内された部屋は小奇麗な和室で、堀炬燵の上にみかんが置いてあつた。部屋の中は適度に温まつていて、居心地がいい。以前は感じられなかつた畳のにおいを嗅いで、やはりパートレム氏の説は本当なのかもしけない、とふと思つ。

トイレ（女将は雪隠と呼んでいた）は旅館の庭に魔法を使った水洗式のそれが眺えてあるそうで、彼は以前は使わなかつたソレに少し興味がわいた。わざわざトイレに魔法を使うのかと思ったが、女将の話ではそうでもしないと病氣やにおいがどんでもないことにな

る、とのことだ。そんなものかと納得し、夕食までは1時間あるもうなので『』とゆがけを取り出して手入れを始める。

Jのゲームでは装備品は定期的に 手入れ をしないとどんどん性能が落ちていく。以前はメインメニューから 手入れ の「コマンド」を使って武器の手入れを行っていたが、メインメニューが使用できない現在、こうやって直接手入れをするしかない。コマンド入力による 手入れ では体が勝手に動いて装備を手入れしていたので、コマンド入力ができずとも体で覚えた動きは簡単に再現できた。

彼が使っている『』とゆがけは、どちらもかなりレアな装備品だ。弓はマツマエの防衛クエストで戦功により特別報酬として手に入れたもの、ゆがけはマツマエ近郊に出現する時間沸きり oss の素材で作られたもので、どちらも射程と命中精度を高めるローンが刻まれている。これは知り合いの 刻印術士 に刻んでもらったローンで、一流の生産職に依頼するときの常として莫大な金額をふんだくられた。が、彼は満足している。代金に見合つだけの性能はあったし、そもそも彼女は多忙なので依頼を受けてもらえること事態が稀少なのだ。古い付き合いなので優先して依頼をこなしてくれるが、甘えすぎるのもよくないのである。人付き合いのコツは、あまり親しくなり過ぎないで淡白な関係を維持することだと彼は考えていた。

MWOではキャラクターのジョブとして 戰闘職 と 生産職 の2つを設定することができる。レベルが上がると上級職にジョブ チェンジできる戦闘職とは違い、生産職は熟練度をあげてもジョブ チェンジすることはできないが、生産職の熟練度のあげにくさは折り紙つきで、彼がゲームを始める前から 刻印術士 一筋に打ち込んでいるというその知り合いもいまだ 刻印術士 の熟練度をマスターするにはいたらない。MWOの熟練度設定はかなりの廃人仕様なのだ。少なくとも、彼が7年間MWOをプレイしている中で何ら

かのスキルの熟練度をマスターしたという話は聞いたことがない。

ディーンの生産職は 矢師 だ。文字通り、弓矢に使う矢を生産するだけの職である。NPC売りの和弓用の矢は性能が低いし、他の 矢師 はもっぱら洋弓用の矢しか作っていないので、自分で使う矢は自分で用意することにしているのだ。

弓の手入れを終え、無限巾着 から木材を取り出して矢の製作を始める。しばらく作業を続けてから、以前は時間が経てば消滅していた削りくずが消滅しないことに気付き、あわててゴミ箱へと捨てる。削りくずが消えないなら宿で大量の矢を製作する事はできないので、早いところ住宅を買わなければいけないかもしれない、と彼は思った。家というのは決して安い値段では買えないが、街の防衛クラストに参加したり、近場の時間沸きbossの討伐パーティにもぐりこめばすぐにでもお金は貯まるだろう。

矢を1本だけ作つて削りくずを片付けたすぐ後に、女将が夕食ができたのでお越しください、と声をかけてきた。案内されるまま夕食場へと向かい、高級感漂う座敷へと座る。座つてからしばらくして、膳が運ばれてきた。いただきますと小声で呟いて箸を取る。焼き魚をはじめとして海産物が多く、白米や酒も美味だった。彼としてはまだここがMWの世界だと認める気にはならないが、少なくともこんな美食が楽しめるならこういつ状況も悪くはないかもしれない、とふと思う。

養ってくれる兄や面倒を見てくれる兄嫁には悪いが、現実世界での唯一の楽しみといえばMWだったのだ。たとえ現実世界に戻れなくなりとも、MWを楽しめるならばそれでいい。ここでは弓も引けるし、7年の廃人生活によつて手に入れた技量と能力を駆使

すれば富も名声も思うがままだろう。他の何人かの廃人もきっと同じことを考えているんだろうな、と思いつつも、彼はわくわくする気持ちを抑えきれなかつた。

彼の力が他のプレイヤー達から一歩抜きん出でている、というわけではない。狙撃や釣りに関しては他のプレイヤーの追随を許さないほどの技量を持つていると自負しているが、他のプレイヤーの追随を許さないというよりはむしろ、他のプレイヤーがそんなことは興味を持つていいというほうが正確なのだ。彼のスタイルではソロでの経験値効率が非常に悪いし、HPもDEFもほとんど上げていないので魔法職並みの紙装甲だ。パーティプレイでも経験値は与ダメージに左右されるので、ソロよりは効率はいいもののやはりレベルアップのペースはかなり遅い。通常のプレイヤーなら2~3年でレベルカンストできるこのゲームにおいて、一日中ログインする生活を送つていながらレベルカンストに4年もかかつたのがその証拠だ。

夕食を十分に堪能し終えると、彼は部屋に帰つて出かける準備をはじめた。時計を確認すると現在の時刻は午後9時をちょっとすぎたところだったので、歩いていけば少し早いけどギルドホールには着くだろう、と考えたのだ。初めから街の中にいたプレイヤーも来るかも知れないし、それなら知り合いも何人か見つけられるだろうと思つて早めに行くことにした。

夜のマツマエは寒い。防御性は低いものの防寒の効果があるコートを羽織つて、和洋の建物が混在した独特的の町並みをギルドホールに向かつて歩く。すると、その道中で偶然にも知り合いに声をかけられ、驚きながら振り返つた。

「やあディーン、君もギルドホールに？」

彼に声をかけてきたのは、彼の古い知り合いで一流の 刻印術士として有名なリリヤだ。アバターはハイエルフの女性で、外部の外見設定ツールで作りこまれた北欧風美少女（本人談）の可愛らしい外見でも有名な職人だ。陶器のような、色白ながらもそれでいて青白さがない肌と、淡いプラチナブロンドの髪が一部の人間にはかなり人気がある。言葉遣いや会話からも本人の性別は長いこと分からなかつたのだが、今の声を聞くに女の子だったのだろう。ネカマと呼ばれる人種が多いMWJにおいて、女性の廃人というのは珍しい。それも、飛びつきりのマゾ職だといわれている生産系の廃人などはほとんどみかけないので、彼は非常に驚いていた。

「ああ、僕もとりあえずはあそこに行こうと思つてるけど……やつぱりタフだね、君は」

こんな状況になつても明るい顔をしている彼女に、ディニンは呆れたかのようにそういった。彼だつて人のことはいえた義理ではないが、少なくともリアルで学生をやつてているなら現実世界にもしがらみは多いだろうに、と思ったのだ。彼のように高校を中退した�一トには現実への未練などありっこないが、女子大生というののもつと華やかで充実したものであるべきだと彼は考えていた。

「そうかい？ ゲームの中に集団で転移するなんて、まるで一昔前に流行つた小説みたいで心が躍るじゃないか。そもそも、中学に入つてからずっとネットゲ漬けなんだ、現実から逃避したい理由だってあるに決まってるさ」

「まあ、僕だつていわれてみればそうかもしれないけど。そういうば、スキルは使えるみたいだけもう試した？」

彼にとつて現実世界の話題はあまり好ましいものではなかつたので、強引に話題を変える。

「うん、生産スキルなら問題なく使えたよ。システムアシストはな
いけど、ルーンの一覧表を見ながら金属板に刻んでみたら問題なく
作動したから、むしろ自由度が広がったんじゃないかな？ 当面は
前みたいに滑らかな動きができるようにならないといけないけど、
それができるようになれば今度は新しいルーンの組み合わせを作つ
たり、今までルーンを書けなかつたものにもルーンを書けるかもし
れない」

刻印術士 というのは、既存の装備品や一部のアイテムにルー
ンを書き込むことで様々な恩恵を附加する生産職だ。生産職にして
は珍しく材料費がいらないので、熟練度を上げればボロ儲けできる
のだとリリヤは言つていた。熟練度の上がりづらさと作業の地味さ
から人気がない職業なので、リリヤのように高い熟練度のプレイヤ
ーは数が少なく、それでいてデメリットなしに装備を強化できるの
でマツマエのような廃人の街では引っ張りだこだ。

彼らは一体全体何が起こつてゐるのだろうかと話し込みながら、マ
ツマエ中央街のギルドホールへと向かう。

プレイヤー用の銀行と掲示板、それとモンスターの素材の換金所
が設置されているギルドホールは、大手ギルドの集会やプレイヤー
同士での待ち合わせなどにも使われていた。移動門 と呼ばれる、
大都市同士をつなぐワープ装置が設置してあることもあって、だい
たい200人は収容できるのではないか、というほどに広い場所だ。

「まだ30分前なのにかなり混んでるなあ……」

「そうだね、いくら夏休みでもログインしていたのはせいぜい2万人。このチャンネルのマツマエ近郊に限れば500人もいないはずなのに、もうギルドホールからは人が溢れてる。後ろからもプレイヤーが押しかけてることを考えると、明らかに異常だ」

ギルドホールが見える通りに出たディーンがギルドホールの様子を確認すると、ホールからは既に人が溢れている様子だった。思わず呟いた一言に対し、リリヤも同じことを思ったようだった。

「お集まりいただいた皆さん、よく聞いてください！ 我々の予想以上に集まつた人数が多いようなので、集会は街の門の外で行います！ 繰り返します、集会は門の外で行います！」

ギルドホール周辺について5分ほど経つと、ギルドホールの中からパートレム氏が出てきてそう叫んだ。

彼らは顔を見合わせ、おとなしく門の外に出ることにした。ギルドホール周辺に集まつた100人超のプレイヤーはいっせいに門を目指し、途中ですれ違うプレイヤーもその群衆に加わり、門に着くころには集団は500人はいるのではないか、というほどに膨れ上がっていた。シュラーゲンが門のNPCを説得したらしく（以前はそんな仕様はなかつたが）、プレイヤーはチェックなしに外に出ることことができた。

外に出て、シュラーゲンの面々が用意している木製の演台の傍に彼らは並んで立つた。他の知り合いを探そうともしたのだが、現実世界の通勤ラッシュを髪髪とさせる人の波に押し流され、はぐれないようにするので精一杯だったのだ。彼としてはいくら現実世

界に未練がないとはいって、少しでも知っている人間と一緒に居るほうが心強い。

ほとんどのプレイヤーが外に出でしづらいすると、パートレム氏が舞台上に上がってきた。手にはなにやら紙の束を持っている。

「「」静肅に、「」静肅に！ お集まりいただいたプレイヤーの皆さん、はじめまして。私はギルド シュラーゲン のサブマスター、パートレムと申します」

パートレム氏がそう叫ぶと、プレイヤーたちの喧騒はだいぶ収まつた。それでもざわめきやひそひそ声は絶えないが、パートレム氏の大声は問題なく聞こえる。

「」の奇妙な事態がおきてから、既に6時間が経ちました！ この事態が運営によるイベントではなく、なんらかの事故であるというのは既に自明であります！」

ざわめきもだんだんと収まっていき、プレイヤーたちは固唾を呑んでパートレム氏の言葉に聞き入る。

「現在判明しているのは「」が現実世界と同じようにリアルな世界であり、我々も現実世界と同じように尿意を催したり、食欲がわいたり、痛みや快樂を感じるということです！ 我々のうちにはまだ食事を取っていない方もいるでしょうが、いずれそういった方々も空腹を感じて食事をする必要に迫られるでしょう！ 要するに、今現在私たちプレイヤーは、」の世界に生きてるのです！」

芝居がかつた口調でパートレム氏が叫ぶ。プレイヤーたちは不安げな顔でパートレム氏を見つめるばかりだ。

「何が起こっているのかは知りませんし、恐らく知っているプレイヤーはないでしょう。ですが、私たちが今この世界に生きていて、食べたり飲んだりする必要があるということだけは確かです！つまり、現在の状況を要約すると　私たちは、MWОの世界にやつてきたんだと考えるのが正解なのです！」

彼にとつては、ある程度予期していたことなのでそれほど衝撃的な内容でもなかつた。彼が隣のリリヤを見ると、彼女は肩をすくめて言った。

「リアルなんてどうでもいい人間に言わせれば、楽しいゲームがヨリリアルになつたってことでいいこと尽くめじやないか。少なくとも、いつもでは金持ちでいられるんだから」

「まあ、ログアウトできてもMWО漬けだから別にいいんだけどね。とりあえず、手持ちのいらない素材を全部換金して来るかな」

周囲のプレイヤーたちは絶望したかのようにがっくりと膝を突くもの、ヒステリックに運営を罵るもの、お祭り気分で楽しそうな顔をしているものなど様々だ。廢人が多いマツマエだからこそ明るい顔のプレイヤーも多いのだろうが、初心者の多いキヨートや中級者の街であるエドはもつと悲惨な顔をしたプレイヤーが多いのだろうか、などと考える。

「先程、我々の仲間がモンスターの討伐に行つてきました！　わかつた事を報告いたしますと、どうやらモンスターとのバトルは從来どおり行えるようです！　ただし、メニュー画面から使用していたスキルは初動を自分でトレースすると使えるようになつており、モンスターも倒しただけでは素材は手に入らず、解体する必要がある

ようです！ 今のところ死んだらどうなるかは分かっていませんが、今後狩りを行う場合は従来よりマージンを取ったほうがいいでしょう

「う

パートレム氏続ける。

「皆さんもある程度は貯金があるでしょうが、しかしあつかはそれも底をつくでしまうし、防衛クエストが発生するかも知れないということを考えると、戦闘には慣れておいたほうがいいでしょう！ そういうわけで、これで私ども シュラーゲン からの報告を終わりたいと思います」

そういうて、パートレムは舞台を降りた。

「戦闘に慣れておく、っていうのは悪い考え方じゃないな。死んだら怖いから、知り合いを何人か探して一緒に狩りをしようと思う」

門を抜け、街へ戻つてからディーンはリリヤに話しかけた。

「そうだね、僕も久々に狩りにでも行くかな……知り合いを見つけて声をかけておくから、明後日の朝9時に工房に来てくれる？」

生産系のプレイヤー、それも売れっ子の 刻印術士 ともなれば顔は広い。メンバー集めは彼女に任せて、彼は帰つて寝ることにした。明後日の狩りのために矢も余分に用意しておきたいし、今日は色々なことがありすぎて疲れたのだ。

「わかった。じゃあ、また明日口」

「またね」

彼はそう言って、旅館の前でリリヤと別れる。彼女の淡いプラチナブロンドの髪から漂う、なんとも言えない匂いを楽しめなくなるのは残念だったが、夜のマツマエは寒いのでさっさと旅館に入り、旅館の中にあるとこ温泉に入った。

異世界の温泉は中々に気持ちよく、露天風呂から眺める三日月は最高だった。外は寒かったが、だからこそ少し熱めの露天風呂はたまらなかつた。風呂上りに鏡で見た、エルフのアバターは中々にイケメンで身長も高く、いつそもとの世界に戻りたくないな、などと思つてしまつた。

結局その日は部屋に帰つてしいてあつた布団にもぐりこみ、歯も磨かずに寝てしまつたのだった。

2話（前書き）

設定語りがなくてすいません。次の話からは設定語りも減るとおもこ
ます。

この世界に来てから3日目の朝、彼はリリヤの工房へと向かっていた。

昨日はもっぱら情報収集に専念し、いくつかの重要な情報を集めてきたが、今日はこの世界に来てから初めての実戦の日だ。リリヤの集めたパーティメンバーはまだ知られていないが、普段からマナーのなってないプレイヤー相手には商売をしないという彼女なら、信頼できるメンバーを集めてくれているだろう。

昨日集めた情報の中でもっとも重要なかつ衝撃的だったのは、この世界でも 大侵攻 と呼ばれる現象が存在する、ということだった。MWOにおいて 大侵攻 とは要するに大規模戦闘クエストのきっかけとなる一種のイベントフラグで、1～3ヶ月の周期でランダムに発生していた。このフラグが発生すると、街の外に発生したモンスターが大挙して街を攻めてきて、6時間ほど連続でプレイヤーが街を防衛する、通称 防衛クエスト が発生する。防衛クエストでは街の中にモンスターの進入を許すと武器屋や防具屋が使えなくなったり、ギルドホールが破壊されてモンスターの素材が換金できなくなったりとリスクが大きいので、プレイヤーたちは必死に街の防壁の外でモンスターを屠り続けるのだ。もちろん、普段よりは若干弱めのモンスターが恐ろしい速度で沸き続けるので、廃人たちにとつてはとても美味しいイベントだと認識されている。彼もまた、防衛クエスト ではさんざん経験値を稼いでいた。敵軍の指揮官や 防衛クエスト でしか沸かない魔術師系・僧侶系のモンスターを倒すと、莫大な経験値がもらえるのだ。狙撃に特化した彼は、安全な物見矢倉から狙撃で経験値を稼ぐのが常だった。

彼がリリヤの工房に着き、ドアベルを鳴らすとしばらくしてドア

が開いた。ドアを開けたリリヤ曰く、彼以外のプレイヤーはもう来ているらしい。どうやら、時間ぎりぎりに来たのがまずかったようだ。

「どうも、遅れてすみません」

地下の工房に入った瞬間、6人のプレイヤーが一斉に視線を向けてきたので、丁寧に挨拶をする。初対面での挨拶が大事、というのはVRMMOでは常識だった。

「じゃあ、メンバーはそろつたことだし、改めて自己紹介をおねがい」

リリヤがそう言つと、リリヤを除く6人のプレイヤーはそれぞれ自己紹介をした。

「はじめまして、剣客 のアキヤマです。種族は人間、ステはSTR - AGI型です」

着流し姿の、20代後半くらいの大柄な若者だ。剣客 は全ジヨブ中屈指の 刀 スキルの伸びを誇り、ステータスの伸びやスキルの種類がいまいちなかわりに、圧倒的な剣技を誇る、クセの強いダメージディーラーだ。

「どうも、テンプルナイト のモンジャです。人間種族で、HPとDEFメインに振つてます」

中肉中背の、白銀の騎士甲冑に身を固めた若い男だ。テンプルナイト は壁職のうちでもっとも過酷な職として知られているが、固有スキル リジョネーション を使いこなせれば頼もしい壁役と

なる。

「アストロマンサー のグスタフです。ハイエルフで、INT極振りです」

線の細い、見た目十代後半くらいのプレイヤーだ。アストロマンサーは少々変わったタイプの魔術職で、従来の一般的な魔法スキルが伸びにくい代わりに、ジョブ固有の魔法である 占星術 を扱える。占星術は詠唱がトップクラスに長く、また消費MPも馬鹿みたいに多いが、その分威力は高く攻撃範囲も広い。

「ダークプリースト のアンドウです。人間です。こっちのズキとは古い付き合いです」

小柄だががつしりとした体格の、20代前半ほどの男がそう言った。ダークプリーストは通常の回復魔法に「敵からHPを吸い取る」という特性を付与できる、攻撃と回復を同時に使える職業だ。

「ダークナイト のスズキです。ノスフェラトウで、VIT・DEF型です。アンドウともどもよろしくおねがいします」

長身で黒い甲冑に身を包んだ男が自己紹介した。兜のおかげで声がくぐもってわかりづらいが、どうも女性の声に聞こえる。ダークナイトはテンプルナイトと同じく壁職の一つで、範囲攻撃で敵のターゲットを取ることに秀でている。敵からHPを吸い取る固有スキルをもっているので、VIT重視の育成をするプレイヤーが多い。

「ルーンフェンサー のミーナです。種族はエルフ、ステ振りはAGI・STR型です。よろしくおねがいします」

何度かリリヤと一緒にいるのを見たことのある女性プレイヤーが挨拶をした。小柄だが眼光鋭く、白の軍服を着てサーベルを佩いている。ルーンフェンサーは素早さ重視の魔法剣士で、剣技スキルと魔法スキルの両方に成長補正があるが、ステータスは低い。

「レンジャーのディーンです。種族はエルフ、得物は長弓」です。よろしくおねがいします

彼が最後に自己紹介をした。得物は長弓、といった瞬間に集まつたプレイヤーたちはものめずらしげな目をしたが、特に追求したりはしなかった。MW〇ではネタに走ったキャラクター やどうでもいいようなことにこだわったプレイスタイルのプレイヤーも多数存在するので、マイナーな武器を担いでるくらいではそれほどめだたないのだ。

「一応、ここにいるみんなはそれなりに強くて信用が置けるから、安心してくれていいよ。じゃあ、今日はマツマエ平原で一日狩りをしようと思う。門の近くに弁当を売ってるNPCがいるって聞いたから、お食い飯はそこで買おう

リリヤがそう言つと、集まつたプレイヤー達は皆頷いた。

「正直戦力を用意しすぎたかなとも思つたけど、死んだらどうなるかはまだわかつてないんだし、今日はマツマエ平原以北にはいかないようにしてようと思う。で、狩りでのロールとしては、壁役がモンジヤさんとスズキさん、ダメージディーラーがアキヤマさんとミーナ、補助と囮まれたときの殲滅がグスタフさん、釣りと索敵がディーン君で回復がアンドウさん。それでいいかな?」

リリヤが確認し、集まつた面々は同意した。ディーンも特に異論はないので頷いておく。

「じゃあ、出発しようか。各自スキルの使い方はわかつてると？」

最終確認を済ませ、一行はリリヤを先頭に工房から出た。ミーナがリリヤの横を歩き、男性プレイヤーはその後ろをぞろぞろと付いていく。こんな大人數で移動すれば目立つかも知れないとディーンは思っていたが、同じことを考えたプレイヤーは多いらしく、ほかのプレイヤーパーティが門を目指して歩いているのをそれなりに見かけた。

「そういえば、皆さんはもう 色街 の噂聞きました？」

ネトゲ廃人らしく装備やスキル、ステータス育成について語り合ひながら歩いていたとき、突然グスタフがそんなことを言った。

「 色街 ？ 確か、存在するけど入れない施設だったんじゃないの？」

先頭を歩いていたリリヤが、興味津々といった様子で振り返って聞きただした。ディーンは、またリリヤの悪い癖が出たか、と心中でため息をつく。彼がリリヤのことをネカマだと思っていた理由のひとつは、リリヤが性的な話に人一倍興味を示すからだった。女性といえば兄の嫁くらいしか接点がない彼にとって、下ネタが好きな女性というのはどうにも想像しがたい生物だつたのだ。

「友人が昨日見てきたんですけどね、どうやらプレイヤーも利用可能になつていいようです。ついに童貞を卒業できた、って喜んでましたよ」

ハイエルフの美少年アバターが童貞云々などと発言するのは、特殊な性癖を持つ人なら興奮することこの上なしだった。それはともかく、ネトゲ廃人というのはそのほとんどが童貞である。当然、彼らの食いつきは凄まじかつた。

「マジか！ ちょっと行ってくる！」

ダークプリーストのアンドウがそう叫んで駆け出そうとする。が、相方のスズキに股間を蹴り上げられ、うめき声を上げてその場にうずくまつた。男性プレイヤーは氣の毒そうな目で彼を見つめ、リリヤは面白がるような目を、ミーナは絶対零度の目をアンドウに向かえた。

「へえ、面白そつ。女の子でも入れると思つ、ミーナ？」

「常識的に考えて無理でしょ、リリヤ。少し頭冷やそつか？」

無邪気に笑つてそんなことを訊くリリヤに、呆れた表情でミーナが返す。

「冗談だつて。まったく、そんなんだからいつまでたつても彼氏の一人もできないんだよ？」

クスクスと笑うリリヤに、真っ赤になつて詰め寄るミーナ。他の面々は、美少女が顔を近づけている様を見て、これはけしからんぞと思い、じつと2人を凝視していた。

ミーナをからかいながら愉快そうに笑うリリヤ、色街についての情報交換で盛り上がる男性プレイヤーとそれを冷たい目で見るスズ

キ 非現実的な事態に巻き込まれているにもかかわらず、彼らは明るかつた。

やがて門に着き、門番に手続きを取つて門の外へとれる。途中で買った弁当は各自 無限巾着 に収納し、それぞれが自分の得物を手に取つていた。魔法職の面々は唇を湿らせ、ふところから呪文集を取り出して暗記できているかチェックする。呪文集は呪文を覚えることに自動で詠唱が記される便利なアイテムだが、これを手にとつている状態では呪文は発動しないのだ。魔法を発動させるには、呪文集をしまつて呪文を唱えなければいけない。

門の外はプレイヤーで溢れていた。これがほかの街ならこうはいかなかつただろうが、しかしマツマエは廃人の街だ。ニートとフリーターがプレイ人口の八割を占めるというわざされるマツマエには、ゲームの世界に来たことを怖がるような人間はほとんどいなかつた。

「やっぱり混んでるかー。ディーン、どっちのほうが空いてる?」

リリヤがディーンに問いかけてくる。彼は 千里眼 を発動させ、半径5kmほどを見回し、どこが空いているのかを見極めようとした。以前まで、フィールドはいくつかのエリアに区切られ、エリアの境界には光の壁が設置されていてその向こうに干渉することはできなかつた。だが、今では光の壁は存在せず、その向こう側を見渡すこともできるよつになつていて。

「西部の丘の方は人がいないみたいだ」

「おけー、じゃあそつちへ行こう。先導お願い」

「了解」

ナイトメアを召喚し、騎乗して周囲を警戒しながらパーティを先導する。レンジャーは戦闘能力こそ高くないものの、固有スキルの「気配察知」によって斥候としての能力には優れている。ソロでプレイすることも多かったディーンの「気配察知」スキルはそれなりに高く、半径1km以内なら目を向けなくても敵がどこにいるのかを把握できた。

ゆつくつと馬を進めさせ、千里眼で「気配察知」の範囲外の敵を探る。

15分ほど歩いていると、ようやくプレイヤーたちの姿を見ないようになり、モンスターを遠くに視認できた。

「しかし、前と比べて沸きが以上に少ないな。何が起きてるんだ?」

ディーンのすぐ後ろを歩いていたミーナが、ふと漏らした。

「ヒリアとエリアを区切る壁もないし、やはり以前とは仕様が違うのか。まあ、安全性が高いという点では悪いことではないが、しかし沸きが少ないのでゲームとしては不満を感じるな」

ぶつぶつと独り言を言つミーナと、それを聞いて考え込む一行。

「とりあえず、青鬼が遠くにいるみたいだ。釣つとく?」

ああでもないこつでもないと議論を始めた一行に、ディーンは尋ねた。700mほど先でうつろしている青鬼は、この一行なら楽に倒せるモンスターだ。いきなり襲い掛かってきても撃退できるだろうが、彼ははじめての狩りなら安全性を重視すべきだと考えてい

た。

「おお、やつですか。僕は大丈夫ですけど、皆さんはどうです？」

ハイエルフの美少年アバターが、杖を握りなおしてそう言った。補助魔法を使えるので、それを使うつもりだ。少なくとも、アストロマンサーの占星術は詠唱に4～5分はかかるので、たかが1体の雑魚モンスターに使うことはない。

一行は口々に賛同したので、ディニンはナイトメアから降り、背負っていた弓を構える。

弓を使う上で、レンジャーとアーチャーはチャージと速射の2つの固有スキルから1つを選ぶことを強制される。チャージは長弓向きのスキルで、弓を構えてじっと力をためることで、力をためた分だけ射程と威力を伸ばすスキルだ。ためられる時間は最大で1分、スキルの再使用には3分が必要になる。速射は短弓向きのスキルで、スキルレベルに応じて一度に複数本の矢を放てるようになるスキルだ。

ディニンは当然チャージを選択している。8尺5寸の大弓を構えた彼は、チャージを発動させ、青鬼を狙い始める。

一行はいい意味での緊張感に包まれ、ディニンの射を見守る。MWOにおいてスキルレベルを一定以上まで上げれば現実世界の達人など足元にも及ばないほどに美しい武芸を習得できるのは有名な話だが、その例に漏れずディニンが弓を射る姿も凛として惹きつけられるものがあった。

当のディニンはといえば、心の中で歓喜に打ち震えていた。

以前はいかにリアルに迫っていても所詮は仮想現実、現実で引く弓に比べれば機械的でまったく味わいがなかつたのだが、今彼は、現実で弓を引いたときと同じ感覚を味わっていた。木でできた弓がしなり、握りからは弓の息遣いが感じられる。

かつてないほど高揚感に包まれながら、デイニンは青鬼に狙いをつけ、剣尻形の甲矢を射た。

放たれた矢は音速を超えて青鬼に迫り、その腹を射抜いた。すると、青鬼は衝撃で後ろに倒れる。

起き上がつた青鬼は怒りに吼え、腹から飛び出した矢を引っ込み、一気に抜く。デイニンが、そんな行動はAIには登録されてなかつたはずだと首をかしげたその瞬間、青鬼の腹から勢いよく血しぶきが飛び出した。

「なるほどなるほど、これはリアルだ」

青鬼が矢を引き抜き、怒り狂つてこちらに突撃してくるさまを見て、デイニンが笑いながらつぶやいた。かつてないほどリアルに弓を引けた彼は、その高揚感からグロテスクな血しぶきを見ても平然と笑っている。

「嘘、どうやら今の仕様だと斬つたら血が出るみたいだ。気分を悪くしないように」「元

デイニンが乙矢を番えながら皆に警告した。すると、何がおかしいのかリリヤがクスクスと笑う。

「どうしたの、リリヤ？」

「いや、アレだよアレ。斬つたら血が出るつて言つたら、転生イベの『殺す覚悟』を思い出しちゃって」

リリヤが笑いながらそう言つと、武器を構え、呪文を唱え始めた一行は一様に皆噴出した。ティーンもまた、愉快すぎる思い出を思い出し、頬が緩む。

「漆黒の断罪者＝ギルガメッシュ・スマラギ・ローゼンバーグ……」

黒い甲冑に身を包み、大剣を鞘から抜いたスズキがぼそりとつぶやく。すると、皆こじらえきれなくなつてげらげらと笑い始めた。

「カノツサ機関、魔眼の使徒」

ミーナがつぶやき、皆はさらに大爆笑する。

一行が血を流しながら迫り来る青鬼を前にゲラゲラと笑つているのは、上級職にランクアップする際に登場するNPC、「漆黒の断罪者＝ギルガメッシュ・スマラギ・フォン・ド・ローゼンバーグ」の痛々しい言動を思い出してのことだ。

運営が遊び心だけで作った「漆黒の断罪者＝ギルガメッシュ・スマラギ・フォン・ド・ローゼンバーグ」は、夕日を浴びると虹色に光る銀髪に金と銀のオッドアイ、背中には黒と白の2枚の羽を生やし、カノツサ機関のエージェントを名乗るNPCだ。その数々の迷言から、某掲示板では凄まじい人気を誇るNPCである。

「殺す覚悟」とは、漆黒の断罪者＝ギルガメッシュ・スマラギ・フォン・ド・ローゼンバーグがプレイヤーたちに向かつて一方的に説教をするという謎イベントの最中に使われた、彼の代名詞ともいえる言葉だ。

げらげらと腹を抱えて爆笑するプレイヤーたちに、憤怒に駆られた青鬼が突進する。もはや 千里眼 を使用しなくても十分に視認できる距離であり、さすがに一行も笑うのを控えて迎撃の準備をした。

ディーンはもう一矢を射て、後方へと引き下がる。接近されれば自分は一撃死するだろうし、さすがに死ぬのはごめんだった。以前と同じ仕様なら死んでも神殿で生き返るのだが、今は死んだらそのまま生き返れない可能性もあるのだ。

ディーンが引き下がると、テンプルナイト のモンジャと ダークナイト のスズキが鬼の眼前へ進み出る。

3mを超える巨躯の青鬼が、右手に持った棍棒を振り下ろす。風を切つて真上から振り下ろされた棍棒はしかし、スズキの掲げた大剣によつて止められる。両者の腕力は一瞬だけ拮抗し、すぐにスズキが青鬼の棍棒を弾き飛ばした。盾を用いない壁職が好んで用いるパリィ スキルだ。

棍棒をはじかれた青鬼は、体勢を立て直すと再びスズキに向かつて棍棒を振り下ろす。が、今度は テンプルナイト のモンジャが籠手はめた両腕を十字にして棍棒を受け止めた。

棍棒を受け止めたモンジャはダメージを受け、痛みに顔をしかめる。しかし テンプルナイト の固有スキルである リジェネーション によって、たちまち傷は癒えた。

着流し姿の 剣客 アキヤマが長刀の柄に手をかけて進み出したのを見て、魔法職の面々は今回は出番がなさそだと肩をすくめ、杖

をおろした。

アキヤマが進み出でてきたのを横目で確認したモンジャは、受け止めていた棍棒を押し返し、バツクステップですばやく離脱する。

青鬼は今度こそ生意気な人間をたたき殺そつと、棍棒を振り上げそして、絶命した。目にも留まらぬ速さで抜かれた長刀が、青鬼の首を飛ばしたのだ。

首から血を噴き出して、青鬼の巨体が倒れる。アキヤマはそれを見ながら平然と血振りを済ませ、長刀を鞘に納めた。

パーティの面々は血だまりに倒れる青鬼を見ても特に顔色を変えず、これでは素材の剥ぎ取りが面倒くさいなあ、などと懸念を語っていた。

「しかしアキヤマさんすい」につすね。居合い スキルびのくらいでですか？」

アストロマンサー のグスタフが、杖で青鬼の死体をつつきながら言つた。

「剣術 スキルが261、居合いは185だよ。しかし、前までとはどうにも斬った感触が違うわ。手ごたえがあつてちょうどいい感じ」

アキヤマが答えた。斬った感触を確かめるかのように、楽しそうな微笑を浮かべながら手を握つたり開いたりしている。

「しかし、本当にリアルだな。血は本物らしいし、骨も見える

首の断面をしげしげと眺めて、ミーナが言った。

小柄な女の子がしげしげと怪物の死体を眺めているさまはどこか狂気を感じさせるが、一行は特に何も思わなかつた。VRシステムが一般化され、18歳以下お断りなホラー系のコンテンツでは、五感をフルに使つたVRシステムによって心臓麻痺で死亡する利用者が大勢出ている。現代の若者はそのほとんどが怖いもの見たさにVRのホラーコンテンツにチャレンジした経験があるので、VRMMOのユーザーはグロには耐性があるのだ。いまさら死体の一つや二つで騒ぐ人間はいないだろう、と皆は思つていたのだった。

3話（前書き）

ポイントが予想以上に増えてビビりました。お気に入り登録してくれた人に悪いんで更新のペースを速めることにします。

一日の狩りを終えた一行は、意氣揚々と街へと帰る途中だつた。モンスターの素材の剥ぎ取りに関しては水の魔法で血を洗い流してから狩猟用のナイフで行うのが効率がいい、という結論が出た。慣れない作業には皆戸惑つたが、今日一日狩りと剥ぎ取りを続けたことでそれなりに手際はよくなつていた。

ディニンは馬上でうつとりと弓を抱きかかえ、肌触りのいい弓の表面を撫でて弓を細めていた。

この世界は実に素晴らしい。本物の弓を引くことなど何にあきらめていた彼だが、思いがけずこうして弓を引くことができ、ここ数年でもつとも幸福な気持ちだつた。弦を鳴らしてうつとりと音に聞き入り、弓を撫で回す。現実でもよく弓を撫でて気を紛らわすことはあつたが、弓が引けるという実感をかみ締めながら弓を撫で回すのとはまったくベクトルの違う行為だな、と彼は頭の片隅で考えた。

一行はそんな彼にドン引きしている わけもなく、普通におしゃべりを楽しんでいた。

何せ彼らは皆廃人。マツマエの街にはパンツ一丁で街を走り回るガチムチな筋肉ダルマや、男の老ドワーフにゴスロリドレスをして楽しむような連中だつているのだ。それに比べれば美青年エルフが弓を撫でてうつとりしているくらい、どうつてことはなかつた。

「しかし、本当にこれはMWOの世界なんですかねえ」

アストロマンサー のグスタフが、しみじみとつぶやいた。

「ん? こりがリアルじゃ まことにとでもあるんですか?」

『』を撫で回していたディーンは隣を歩いていたグスタフのつぶやきに耳を止め、訊いた。

「いえ、個人的には大歓迎なんですが。ここは衛生環境もいいし、最初から金持ちはから生活もあつちよりはよほどいい。底辺高校のクズ学生でしたから、エリートでいられるこの世界は非常に居心地がよさそうですね」

でも、と彼は続けた。

「ずいぶん昔に流行った小説とかでは、ゲームの世界にトリップしたら自治組織が云々、っていうのが定番じゃないですか？僕はそれが嫌なんですよね」

「ん、治安がよくなるなら別にいいんじゃない？」

「確かに治安はよくなるのかもしだせんが。でも、忘れてません？　公式設定だと、ここはトウキヨウ幕府の治める街で、れっきとした藩主もいる封建制度の敷かれた街なんですよ。そこに日本人を、しかも力を持った日本人を放り込んだらどうなるか、わかりますよね？」

グスタフがつらつらと推測を語るうちに、一行は彼の話に聞き入っていた。

「公武合体運動が成功して、和洋折衷を方針に発展した明治時代に魔法の要素を足したもの、というのがこのゲームの舞台設定でした。冒険者は政府直属の開拓者といつ位置づけで、魔物に占拠されたエゾ島を取り戻すのがMWのグランド・クエストだったはずです。

そんな世界で、僕たちプレイヤーがマツマトを占拠して民主制を敷いたら、トウキョウ幕府との戦争になることは間違ひありませんね。建国したばかりの国ですから、内乱で土地を奪われたなどとあつては大いに面目を失うはず。幕府は躍起になつて戦争を仕掛けてくるでしょう」

ハイエルフの美少年が語る未来予想図に、皆はつばを飲んで聞き入つていた。

「確かに、我々プレイヤーのポテンシャルをもつてすればトウキョウ幕府との戦いには勝てるかもしません。しかし、幕府を倒してしまえば、歐米列強が進軍してくることは間違ひありません。ですから、プレイヤーが自治組織を起こすのはかなり危険です」

「君、本当に底辺高校生？ 実はエリートなんじゃない？」

リリヤが真顔で尋ねた。

「いえ、正真正銘底辺校ですよ。それはともかく、それでも自治組織を起こそうとする動きは起るはずです。もちろん、僕と同じことを考えてそういう人たちをこらめるプレイヤーもいるでしょうが。皆さんには、街の路地裏は見ました？」

グスタフが、急に問いかけてきた。皆は突然の問いかけに戸惑い、互いに顔を見合わせた。比較的落ち着いて聞いていたディニンが代表して答える。

「いや、見てないけど」

「一回見てみると世界が変わりますよ。老若男女の死体がそこのじ

ゆうに転がつてましたし、歴史の教科書にしか載つてないよつた『飢えた孤児たち』がわんさかいました。街の決まりで孤児は路地裏から出てはいけないそうで、疫病の蔓延した路地裏はがりがりに痩せた子供で溢れてましたよ。あれを見て改革を志さない日本人はないでしょうね』

本当にひどい有様でした、とため息をつくグスタッフ。

「まあ、そんなわけで僕は憂鬱になつてゐるのです。孤児たちのいる路地裏に立ち入ることは許されていないそうですから、僧侶系ジヨブのプレイヤーが彼らを癒すことは難しいでしょう。といつかそもそも、マツマエは食料が足りてないらしいので彼らの腹を満たすのは難しいでしょうね。根本的に街の仕組みを変えないと孤児を救うことはできないでしょうが、さつき言つたようにそれも不可能に近いです。どうじょうもないですね」

嘆息するグスタッフと、救いのない話に黙り込む一同。重苦しい沈黙が場を支配した。

皆一様に難しい顔をして街へと歩き続ける。グスタッフの言つたことを真剣に考えるものもいれば、それが自分の生活にどうこう影響を及ぼすかを考える者もいた。

ディニンは後者だ。彼は弓が引けて生活が保障され、旨いものが食べられればそれで言つことはない。彼にとつては赤の他人がどうなろうが、そんなことより弓の弦の具合のほうが重要だ。しかし、もしもプレイヤーたちが自治組織を起こし戦争を始めるよつなることがあれば面倒くさいことになると彼は考えていた。

彼には知識はない。高校を中退したため、日本史の知識など忘却のかなただ。ペリーが来航したのは江戸時代だったか明治時代だったか、そんなことすら忘れている。弓に関する知識ならどんな人間

にも負けないと自負しているが、そんなことはこの問題において役に立たない。

彼には思考力がない。偏差値は低くとも頭の回転が速いグスタフとは違い、彼の思考は鈍重でキレがない。一流の弓士の常として集中力は尋常ではないが、しかし思考力はない。

だから、彼は自分にできることはなにもないと結論を出し弓を撫で始めた。

ディニンが弓を撫で回し始めたのを見て、一行は苦笑する。

「まあ、一国の政治について考えるなんてネトゲ廃人にあるまじき行為ですよね」

空気を悪くしたことを気にしたグスタフが、場を和ませようとそんなことを言つ。

「そうかもね。少なくとも、屑大学生が悩んだくらいでどうにかなる問題じゃない」

リリヤがそう言って苦笑すると、一行は皆苦笑いした。廃人の街の中でもさらに廃人度の高い一行は、いずれも一ートかフリーター、底辺学生なのだった。「boss狩るから仕事辞めてね」という発言には「もう辞めますから」と答えるのが、マツマエのプレイヤーたちである。

一転して和やかな空気で談笑しながら、一行は街へと向かう。既に日は暮れていて、グスタフが杖の先に灯した魔法の明かりによつ

て一行は歩いていた。マツマエの街には電気はないので夜の闇の中では見えないが、ディーンの千里眼スキルは暗視もできる仕様になっている。ほかのプレイヤーたちはそのほとんどが日暮れ前に帰つたが、一行はディーンのスキルのおかげで日が暮れても狩りを続けることができたのだ。

門に到着すると、門番が申し訳程度のかがり火を焚いていた。そんなに小さい火なら焚く意味ないだろ、と一行は心の中で突っ込む。門を抜けたところで一行は解散し、明日の同じ時間に狩りをすることを約束してから各自は帰途に着いた。

ディーンとミーナはリリヤの家で一緒に夕食をとらないかと誘われたので、夜のマツマエを・3人で歩く。月明かりを頼りに和洋の建物が混在した街を歩いていると、3人は不思議と心が落ち着いた。現実世界の日本では、どんな田舎でもこれほど暗くはない。これでもかというくらい街灯が設置されている22世紀の日本では、今の3人が体験しているような夜の暗闇はとっくに絶滅して久しいのだ。3人は今まで味わったこともない漆黒の闇と銀色に輝く月に言葉ではあらわせない美しさを感じていた。

ディーンの右隣を歩くリリヤは全くの無警戒だが、ミーナは若干彼のことを警戒している様子だった。女性プレイヤーというのはえしてそういうものだ、とディーンは思っているので、特に腹を立ててるようなことはない。

「しかし、マツマエは寒いね。昼はそうでもなかつたけど夜は冷える。海が近いからかな」

ひゅう、と一陣の風が吹きリリヤが体を震わせて言った。

「海が近いと冷えるのか。知らなかつた」

ディニンは感心したかのように呟き、空氣の匂いを嗅ぐ。そう言われれば潮の匂いがするような気もした。

10分ほど歩くと3人はリリヤの家についた。リリヤの家はこじんまりとした洋館で、3人が門の前に着くと老執事が内側から門を開け恭しく礼をした。

MWOでは課金によって個人でNPCを作り、家に配置することができます。この老執事はリリヤがこだわりをもつて設定したNPCで、外装のデザインは知り合いのデザイナーの卵にやらせたのだとディニンは聞いたことがあった。細い体躯と灰色の髪、右目のみノクルが渋いその執事は3人をリビングへと通し紅茶を振舞つた。

「晚餐はすぐに支度します。どうか今しばらくお待ちください」

丁寧にお辞儀をして老執事は去つていった。ディニンは出された紅茶を啜り、一口サイズのクッキーを味わつた。渋めに入れられた紅茶とメープル風味のクッキーは中々に美味で、上品な陶器製のティーセットが3人の皿を楽しませた。

「ほんと、こっちに来てからは至れり尽くされたりだよ。家事は一切する必要がないし、出てくる料理は全部美味しいし、もう一生ここにいたいね」

上品な所作で紅茶を啜り、リリヤが言つた。その様はまるで一枚の絵画のようで、ディニンは一瞬だけ見惚れてしまった。

「そうね、私もどつちかつて言つと帰りたくないかも……大学は留

年の危機だったしなあ

部屋の隅にある暖炉に椅子を向け暖まっていたミーナがぽつりと洩らした。瞬間の凜とした姿はどこへやら、暖炉に手をかざして背中を丸める姿はまるでネコのようだとトイニーは思った。

「ミーナ、語学はほんとだめだからねー」

リリヤがクスクスと笑う。笑われたミーナは少しだけ赤くなり、言い訳をした。

「英語なんて仮想敵国の言語じゃない。なんでやらなきゃいけないのよ」

「いや、その理屈はおかしい」

わけのわからない理屈にトイニーは思わず突っ込んだ。リリヤとミーナが彼に向かって振り向き、すぐにリリヤがニヤリとする。よぐべ突っ込んだといわんばかりの笑顔だ。

「どんなに馬鹿なアメリカ人でも英語は話せるんだから、成績が悪い言い訳にはならないよ?」

リリヤが追撃をかけ、論破されたミーナはつなり声を上げて頭を抱える。その様があかしくて、トイニーはくすりと笑いを洩らした。

「これからが晚餐でござります。本日の献立は、帆立貝、仔牛の頬肉の煮込み、ブランジエ風ジャガイモ、ブルーベリーパイ、冷やし力

「マンベール、1853年もののシャトー・ラトワールとなつてあります」

老執事がちらりと目配せすると、厨房から10人ほどのメイドが出てきて手馴れた手つきで晚餐の用意をはじめた。

晚餐の準備が済むとメイドたちは下がり、老執事も部屋を退出した。

テーブルマナーについては3人とも素人だが、幸い部屋には3人しかいないのでマナーなどは気にせずに和やかに談笑しながら晚餐を楽しんだ。先程のやり取りでミーナの警戒心も幾分かは薄まつたらしく、ディニンの冗談に愉快そうに笑っていた。笑うとできるえくぼが昼間の堅苦しいイメージとギャップを感じさせ、なんとも可愛らしい」とディニンは思った。

ナイフとフォークを力チャカチャと鳴らし贅沢な料理を味わう。いずれの料理も彼らが現実世界では食べたこともないような美食で、一口食べるごとに彼らは目に見えて機嫌がよくなつていった。昼間は堅い口調だったミーナも少し女子らしい砕けた口調に変わつていたが、ディニンが考えるにそれは口当たりのいいワインが犯人だつた。ミーナはアルコールになれないようでどんどん杯を空にし、そのたびに浴びるようにワインを飲んでいた。ぶどうの芳醇な香りを楽しむためにゆっくりと口の中で転がして味わう二人とは真逆の飲み方だ。ディニンは、明日の狩りにはミーナは参加できないかもしぬないと考え始めていた。

「どうする、泊まつていく？」

夕食を食べ終わり十分に歓談してから、リリヤは問いかけた。

「いや、遠慮しておくよ」

酔いつぶれてソファで寝ているミーナを横目で見て、ディーンは答えた。淡白な付き合いを好む彼は、今日はどうも親しくすぎたなど反省していた。楽しくなかつたといつことではないのだが、親しくなりすぎるとき友情は続かないものだと彼は知っていた。特に男女の友情などはとても脆いものだから、慎重に距離を調節しなければと彼は思っている。

「じゃあ、また明日」

「うん、また明日」

挨拶をして老執事に見送られて洋館を出る。

ディーンのアバターはいつもアルコールには強いらしく、かなり飲んだにもかかわらずほとんど酔いはなかった。それでも少し気分は高揚しているので、彼はマツマエ郊外にある弓道場へ向かうことにした。

どんな武器でも大きな街には専門の訓練施設が設置しており、和弓のための弓道場もマツマエには存在する。武器の訓練施設はいずれも空間拡張の魔法がかかっており外見からは想像できないほど広かつた。もともとマツマエのような廃人の街では訓練施設を利用するプレイヤーはほとんどないので、弓道場はいつもがら空きだ。

VRMMOでは従来のMMOに比べてマップの広さが尋常ではないが、しかし廃人と呼ばれる人種は例え利用しない施設であつても

正確に場所がわかるほど街の地理を熟知している。NPCの使い走りをするクエストはマツマ工でもそれなりの数があったし、そういったクエストは手軽な上に報酬が結構いい。ディニンもまた街の地理は隅々まで熟知していた。

やがてディニンが弓道場の入り口にたどり着き、中に入ると全く予想していなかつたこと、弓道場には先客がいた。

「よつティニン。やあやあ来ると思つていたよ」

手にした洋弓から手を離し挨拶をしてきたのは、レンジャーでダークエルフのドリストだ。ディニンと同じレンジャーではあるが、この男は偃月刀の一刀流にこだわりを持っているらしく弓を使つティニンとは全く違うプレイスタイルのプレイヤーだった。

「ドリスト！ なんでまたこんなところに？」

ティニンは驚いて問いかける。同じレンジャーであるという親近感からか、ディニンはドリストとはそれなりに仲がよかつた。それだけに、こんな夜更けに彼が弓道場にいるのが不審だったのだ。

「いやなに、メインメニューが開けなくなつてからずっと知り合いで余くなくてね。ギルドのメンバーは皆ログインしてなかつたし、ここで待つてればそのうちお前が来ると思つてたんだ」

ぱりぱりと頬をかいてドリストは言った。

「よかつたら、明日から一緒に狩りにいかないか？ 金貨に余裕はあるんだが、腕が落ちるのが心配でな」

ドリストは腰の剣帯に挿した2本の偃月刀を力チャ力チャと鳴らし、好戦的な笑みを浮かべた。相変わらずこの友人は戦闘狂のようだと嘆息しつつ、ティーンはうなづいた。

「いいよ。明日はリリヤと彼女の知り合いたちと狩りに行くから、君も付いてくるといいと思う。彼女とは知り合いだろ?」

「ああ、常連さ

偃月刀というのはそもそも中盤で手に入る武器であり、通常はドリストのような廃人が使う武器ではない。が、ドリストは偃月刀に対する並々ならぬ執着から莫大な時間と金をかけて偃月刀を強化しまくり、マツマエ近郊でも十分に通用するレベルまで攻撃力を高めていた。偃月刀の刀身にはリリヤによってみつちりとルーンを刻み込まれており、強化に使われた金属や魔力結晶の色もあいまって神秘的な美しさがある。

「それじゃあ、明日の9時にリリヤの工房に集合だから、忘れないよ」

「了解。なんにせよ、知り合いで会えて良かったよ。ひとりだとどうにも心細くていけない」

嬉しそうな顔をしてそう言つたドリストとともにティーンは宿へと帰る。ドリストの宿はティーンの宿のすぐ近くらしいので、連れ立つて帰ることにしたのだ。

気付けば月は雲に隠れ、代わりに雲の合間から満天の星空が顔を出していた。現実では見ることのできないような綺麗な星空にうつとりとため息をついて、2人はしみじみとした気持ちで宿へと帰つ

ていった。

第四話

巨躯の大鬼が振り下ろした大剣が青くぎらついた偃月刀に受け流され、華奢なダークエルフの操るもう一本の偃月刀が鬼の首を切り裂く。頸動脈を切り裂かれた鬼は首から血を噴出しながら、怒りに咆哮した。

怒りに吼えた鬼が再び大剣を振り下ろす。が、ドリストは紙一重で大剣を避け、両の手の偃月刀で斬撃の乱舞を繰り出す。瞬く間に鬼は全身を切り裂かれ、おびただしい量の血を流して倒れ伏した。

ディニンが視線を左にやると、アキヤマが巧みに長刀を操り、鋭い太刀筋が鬼の首を飛ばしたところだった。返す刀でアキヤマは接近してきた鬼の腕を切り飛ばし、そこから更に刀を翻して鬼を屠つた。

遠方から駆けてくる鬼の数を少しでも減らそうと、ディニンは矢を射る。チャージによつて通常よりも速く飛んだ矢は、駆けてくる3匹の鬼のうち一匹の喉を貫き、斃した。

倒しても倒しても湧き続ける鬼たちを前にして、3人は初めは歓喜していた。アキヤマとドリストは戦い続けられれば戦い続けるほど新しい技巧を身につけつつあると実感できることに、ディニンは全力で狙える的が湧き続けることにそれぞれ原始的な歓びを感じていたのだ。しかし、1時間あまりも戦い続けている彼らは、戦うのがいい加減面倒くさくなつてきていた。

「ディニンは再び弓を引き絞り、今度は チャージ を使わずに矢を射る。左手に握った弓の感触、右手のゆがけ越しに伝わる弦、矢が放たれるたびに弦が鳴らす味わい深い音。それら全てがディニンを歓喜させ、狂喜させていた。

アキヤマとドリストは、既に2人とも返り血で全身が真っ赤に染まっている。モンスターの血にまみれながら楽しそうに笑う2人は、剣を振るうたびに自分の技量が上がっていくのを感じていた。以前のようなスキル熟練度が上昇する感覚ではなく、敵を屠るたびに自分の剣筋が冴え渡り、より滑らかで無駄のない動きが身についていく感覺。2人はその感覺にどうしようもない快樂を覚えながら、しかし冷静に剣を振るっていた。

和弓スキル 影縫い を発動させ、ディニンは接近してきた鬼の影を射抜いて足止めした。全身を金縛りに襲われた鬼は怒号を上げるが、しかしドリストの偃月刀によつて喉を十文字に切り裂かれ、絶命した。

もう1匹の鬼は仲間を射殺した卑怯な狙撃手を誅殺せんと棍棒を振り上げディニンに突進するが、横から襲ってきた白刃に棍棒を握る手の親指を落とされ、棍棒を取り落とした。鬼の指を切り落としたアキヤマは一旦鬼と距離を取り、挑発するかのように刀の切つ先をゆらゆらと揺らす。それを見て憤怒した大鬼は左手で棍棒を拾い、アキヤマに突撃するが 素早く繰り出されたスキル 三連突きによつて絶命し、巨体が音を立てて地に倒れた。

遠方からは新たに6体の鬼が駆けてくる。3人はいい加減に面倒くさくなつてきたが、しかし迎撃する準備を始める。ディニンは、

なにがいけなくてこの面倒くさい事態に陥ってしまったのかと、一日を振り返り始めた。

その日、ディーンは非常に不快な目覚めを迎えた。目覚める予定の時間よりも大分前に、人々の喧騒によつて目が覚めてしまったからだ。

あまりにも外が煩いので布団から起き上がって窓を開けると、そこで彼は信じられないものを目にした。

窓の下では、色とりどりの装備に身を包んだ人間達がやかましく騒ぎ、叫び、パニックを起こしていた。

ディーンは 千里眼 を発動させ、もう少し詳しく様子を探。すると、彼はショックで目が覚めるくらい驚いた。公道でパニックに陥っているのは、なんとプレイヤー達だったのだ。一見して高級品とわかる戦闘用の装備に身を固めた彼らが慌しく道を行き交い、お互に蒼白な顔で情報交換をしている。時折誰かが金切り声を上げたり泣き出したりする様を見て、彼は本当に驚いた。

中には楽しそうな顔で鼻歌を歌いながら歩いているものや俯いてなにやら考え方をしている様子のものもいたが、いずれにせよディーンはなにかとんでもない事態が起つたのだろうと感じ取った。

何が起きているのかを知りたい気持ちもあつたが、彼はひとまず顔を洗つて朝食をとることにした。彼は寝巻きから戦闘用の軽装備に着替えて、食堂に行こうとする。が、部屋を出た瞬間、1人のプレイヤーが慌しく階段を駆け上がりてくるのを視界に捉えた。

「おじアンタ、もう聞いたか！？」

「さつきから一体全体何の騒ぎなんだ？」

息を切らして尋ねてきた男に質問をする。気分を切り替えようと部屋を出た瞬間に他人に話しかけられ、彼は少し苛立つていた。

「さつき野良パーティ組んで早朝狩りに行つてきた連中が戻つてきてよ、北の砦の近くでプレイヤーの死体が見つかったんだ！ 死体も運ばれてきて、こりゃプレイヤーに間違いないってことで騒ぎになつてるんだよ」

「なんだつて？ 本当なのか、それは？」

半ば予期していたことではあったが、ディーンは反射的に聞き返す。

「嘘だと思つんなら門の前の広場を見てくるといい。死んだ連中のギルメンがまだ回りに回たはずだ」

「……そうか、ありがとう」

「なに、いひつてことよ。お前さんも狩りに行く時は気をつけよう、暇するにやられたら死ぬつてことなんだからな」

男が慌しく自分の部屋に駆け込んだあと、ディニンは朝食を取るために食堂へと降りていった。

少なくとも予想できなかつたことではない、と彼は考える。モンスターが血を流して死ぬ様を見てきて、自分達がこうなる可能性がないはずがない、と彼は思つていたのだ。ディニンにしてみれば昨日のグスタフの話のほうがよほど衝撃的だつたし、そもそもよっぽど下手を打たなければ死なないはずだと彼は考へている。だから、驚くことはあつてもそれほど衝撃を受けるわけではなかつた。

途中で出会つた女将に食堂に案内され、座敷に座つて朝餉を食す。大根の味噌汁をすすり、塩鮭を箸でほぐしてご飯に乗せ、口いっぱいにはお張る。鮭の塩味と白米は大変相性がよく、ご飯を一膳おかわりしてしまつた。マツタケの茶碗蒸しもたいへん美味で、上手い食事を取り終えたディニンはニュースを聞いてから高まつていた気分が少し落ち着くのを感じた。

部屋に戻つて時計を確認すると、現在時刻は八時三十分である。今から出発すれば約束した時間の前にリリヤの家に着くだろうと考へて、彼はコートを羽織つて宿を出た。

喧騒は幾分か収まつており、泣いたり叫んだりしているプレイヤーはディニンの見る限り見つからなかつた。しかしディニンがそれで違うプレイヤーたちはどこか忙しなく、焦つているかのように見える。

背中に背負つた弓の感触を好ましく思いながらディニンが歩いていると、彼の前方から1人の紳士が駆け足でやつてきた。時代がかつたスースに山高帽をかぶり、手にはステッキを持っている。立派な髭を蓄えているその壯年の紳士の風貌から、ディニンは成熟した

知性を感じた。一見NPCのようにも見えるが、しかし紳士の握っているステッキには、刻印術士の手がけたものとわかるルーンが刻まれていた。

プレイヤーにはあまり見ないタイプの外見をしているその紳士の顔をまじまじと眺めていたディニンは、少しいらだつている様子の紳士に睨まれた。

「なにかね。用もないのに人の顔を眺めるのはやめてくれたまえ」

「あついえ、どうもすみません」

ディニンが詫びると、紳士は鼻を鳴らしてそのまま歩き去った。

今のは失礼だつたなど反省しつつ、背負つた弓の感触を楽しみながらリリヤの家へと向う。横柄な言い方に腹が立たなかつたわけではないが、少なくとも悪いのは完全に自分だつたのだ。言い方がどうであれ、それに腹を立てるのは筋違いだろつと彼は考えた。

8尺5寸の大弓を背負つた彼はいつもならすれ違うプレイヤーにちらりと目を向けられることが多いのだが、今日ばかりはそんなこともなく、彼はそのことを嬉しく思つた。目立ちたいがためにネタ装備に走るプレイヤーを否定するわけではないが、彼としては目立つために大弓を担いでるかのように思われるの嫌なのだ。

リリヤの家に着くと、昨晩と同じように執事が門を開け彼を中心へと通した。地下の工房に降り、リリヤに声をかけた。

「おはよう、リリヤ。外が騒がしいけど、もう聞いた？」

「聞いたよ。だから、今日の狩りは中止することにした。グスタフ君は色々と活動を始めたみたいだし、他の皆も本格的に知り合いを探し始めたからね」

「なるほど」

ディニンは、ギルドに所属せず、野良パーティやソロを中心に活動していたので特に知り合いを探そうとは思わなかつたが、やはりこういった状況に置かれれば皆さびしくなるのかもしれないと思つた。

せっかくの異世界なのに『道場で』を引くのももつたいかな、と彼は考えた。かといって現状では一緒に狩りに行く仲間もおらず、ソロでは死ぬ危険性が高い。はてさてどうしたものかと彼が考え込むと、彼の背後から大柄なプレイヤーが入ってきた。

「リリヤさん、やっぱり今日は中止ですかね？」

部屋に入つてくるなりリリヤに問いかけたのは、先日リリヤたちと一緒に狩りをした 剣客 のアキヤマである。

「さすがにこの状況じゃあね」

肩をすくめて言ったリリヤに、気落ちした様子でアキヤマが返す。

「そつか、残念だなあ……」

そんなアキヤマの様子を見て、ディニンは彼に声をかけた。

「アキヤマさん、それなら僕と一緒に一狩りどうです?」

「おお、それはいいですね。でも、2人だけだと少し不安が残りますか？」

ディニンの提案にアキヤマは嬉しそうな顔をして賛同し、それから不安げな顔で疑問をぶつける。彼もまた戦闘狂の氣があるが、さすがに死ぬ危険がある以上それなりに慎重にはなるらしい、とディニンは思った。

「1人、回避盾に心当たりがあります。彼もそろそろここに来るでしょうから少しだけ待ちましょう。リリヤ、大丈夫？」

ドリストのことと思い浮かべながら、ディニンはリリヤに聞いた。リリヤは机の上で作業をしながら首肯したので、近くの壁に寄りかかってドリストを待つことにする。

「なるほど、回避盾の方ですか。どんな人なんですか？」

「二刀流のレンジャーで、結構なバトルマニアですね」

ディニンが答えると、アキヤマはそれは気が合ひそうな方です、と呟いて薄く笑った。やはりこの人もバトルマニアなのかとディニンが心中でため息をついたとき、工房に1人のダークエルフが入ってきた。ダークエルフはリリヤを見つけると2言3言の短い会話をしてから、ディニンたちのほうへと向き直る。

「狩りは中止なのか？ 残念だな」

「いや、君さえよければこっちのアキヤマさんと一緒に狩りに行こうと思つてたんだけど、どう？」

がつかりした様子で話しかけてきたドリストに、ティーンは誘いかけた。

「マジか！ 行くわ！」

一瞬で元気を回復したドリストに、ティーンは微苦笑する。この友人の素直なところは好ましいが、こうじう無邪気なところはダークエルフのアバターには似合わないと彼は常々思っている。

「剣客 のアキヤマです。STR・AGI型です」

アキヤマが右手を差し出して自己紹介をすると、ドリストも右手を握り返して自己紹介をした。

「レンジャー のドリストです。AGI特化です」

2人はがつちりと握手して、互いに相通じるものを感じてニヤリと笑いあう。

「それじゃあ狩りに行こうか。じゃあね、リリヤ

「ん」

リリヤは机の上に置いた羊皮紙になにやらルーンを書き込んでいた様子だった。邪魔をするのも気が引けたので、早速打ち解けて武器の話に興じている2人と連れ立つて、ティーンはリリヤの家を辞去了した。

「しかし、まさか『テスゲーム』を実際に体験できるなんて夢みたいだ

よな。ゲーム世界にトリップなんて前世紀の発想だつたけど、こんなにわくわくするんだな」

ドリストが楽しそうな顔で言つた。アキヤマが確かに、と賛同する。『ティニンも黙つて頷いた。

さすがに皆落ち着き始めたのか、街を走り回るプレイヤーの数はかなり減つていた。その代わり、『ティニンたちが歩いていると道の端や広場などでプレイヤーが集まり、何かを話している現場を何度か見かけた。彼らはいずれもお互いに顔見知りらしく、漏れ聞こえてきた会話を聞く限り同じギルドのプレイヤーのようだ、と『ティニンは結論した。

「ギルド、か……」

道端で話し合つ集団を見て、ドリストがぼそりと呟いた。失つてしまつたものを思い出して寂しさを感じているのだろう、と『ティニンは推測した。ドリストは、ギルド内では頼りになる前衛として皆からも慕われ、随分と楽しそうにしていたものだ。彼にとつて、所属していたギルドを失つたというのはかなりの苦痛だつたろう、と『ティニンは同情した。

「そういうえば、ギルドホームはどうなつてるんだろう。まだ使えるのか？」

アキヤマが誰にともなく、そう聞いた。

ギルドホームとは、文字通りギルドで購入できる家のことだ。家とはいってもマジマジ工に立ち並ぶ長屋や武家屋敷、洋館のような「家」ではなく、ギルドホール中にあるホーム入り口から出入りできる空間のことだ。ギルドに一定の金額を支払うことと、支払った金

額に応じたグレードの空間が提供される。

「ホームはまだ使えるぞ、この事態が起きてから真っ先に確かめたから。最近はホームを持つてるギルドはあそこを寝床にすることが多いみたいだ」

アキヤマの問いにドリストが答えた。

「つづのところはアイテム保管庫や金庫の中身はそのままだったし、床においてたアイテムも消えてなかつた。なかなかに広かつたから、整理すればすぐにでもつかえるようになる感じだつたな」

寂しげな表情でドリストは言った。

「ギルドホールで確認した限りでは、この世界だとギルドの加入手続きはギルドホールの受付でやつてるらしいね。ちなみに、うちのギルドの名簿を確認したら俺ひとりだけだつた。ログインしてなかつた奴らは初めからいなかつたことになつてゐみたいだつたよ」

ディーンとアキヤマはどちらもギルド参加経験が無いので、あいまいな顔で頷いた。

ドリストの語るギルドについての情報に耳を傾けながら、3人はマツマエの外へ出る門へと向かう。途中ですれ違うプレイヤーは、やはり血相を変えて走り回つているものがほとんどだつた。それをみた3人は、この程度で慌てるなんて修行が足りないな、と彼らを鼻で笑つ。

門の警護をしている兵士に 通行許可証 を見せ、3人は街の外

へと出た。

マツマ平原はもつぱら薄い色の芝生に覆われた、なだらかな平原である。丘や川も存在するが、特筆すべきことは何もない。弱い風が芝生を揺らし、真新しい草のにおいを感じさせた。

昨日となつて変わって閑散とした様子のマツマ平原では、15分ほど歩くとディーンのスキルを持つてしてすぐにモンスターを見つけることが出来た。さっそく弓に矢を番え、チャージを発動させる。

弦を引き絞つて標的たる赤鬼をぐっと睨みすえると、次第に視界が狭まっていき、ついに赤鬼以外は目に入らなくなる。現実世界で極度に射に集中する時と同じ現象だ。懐かしいその現象に歓喜が湧き上がるが、弓を引くために訓練された彼の精神は揺らがない。夜空にぽつんと浮かぶ満月をイメージして波立つ心を落ち着かせると、だんだんと周囲の音が聞こえなくなっていく。

彼の世界から音が消え、そこに赤鬼しかいなくなつてから数瞬「中の」という未来図を完全に思い描けた瞬間、矢は弦を離れて音の速さを超えて飛んでいった。

少しだけ山なりの軌道を描き、音速を超えるスピードで赤鬼に矢が迫る。すさまじい勢いで疾る矢はたちまち1kmの距離を飛び、赤鬼の頭を抉り抜いた。脳漿と血が飛び散り、赤鬼は倒れる。

赤鬼が倒れたことを確認して、ディーンはそのことを2人に伝えた。すると2人は自分達にも戦わせろ、と文句を言つてくる。

戦闘への期待からかあらぶつている2人をなだめ、それならばと手当たり次第に目についたモンスターに弓を射かけ、こちらへ誘導する。

ちなみに、3・4kmも先のモンスターが矢がいられた方角を正確に理解できるわけは、僕が使う矢の素材にある。僕は和弓の矢を生産する際にはかならず神木・魔力樹の類を使うので、それらを用いた矢は空中に魔力の残滓を残すのだ。モンスターはそれを頼りに、たとえどんなに遠くから矢をいられてもこちらを追跡することが出来るらしい。

そして、そのことを「ディーン」が思い出したときにはもう遅かつた。以前はエリアを区切る光の壁の為に長い射程を活かしきれていなかつたディーンだが、今はもう光の壁は無いので最大6kmの射程を充分に生かして矢を射ることが多い。そして、その最大射程を生かして矢を射れば、当然平原にまっすぐ6kmの魔力線が出来上がるわけで。ディーンたちは、複数張り巡らされたバカみたいに長い魔力線にぶつかったモンスターたちは、ディーンたちのところへといつせいにやつてくる。

逃げようにも、「ディーン」が360°八方に矢を射てしまつたため、何処へも逃げられない。

かくして、物語は冒頭へとつながり、「ディーン」たちは次々に襲つてくる魔物の群れに辟易することになるのであった。

5話（前書き）

iPhoneで書いたら指がつりました。アイタタタ

無限に沸き続けるかのように思ったモンスターたちは6時間あまりに戦い続けるととうとう沸かなくなり、ディーンたちは疲れてその場に座り込んだ。

「ふう……まったく、大変な田にあつた」

モンスターの血で真っ赤に染まつた草原に座り込んだディーンがため息をついた。200本以上あつた矢は尽き、慣れない剣を握つて戦っていた彼はとても疲れていた。

「楽しかったけど、さすがにこれはキツいわあ……」

ダークエルフ特有の白髪を返り血で真っ赤にしたドリストが言った。彼自身も戦闘中に何度も敵の刃を受け、回復アイテムで全快してはいるものの全身はすっかり真っ赤だつた。

「しかし、これだけ疲れてもすぐに動けるんだからす」「よな……」

刀にこびりついた血を落としていたアキヤマがふと呟いた。確かに、アキヤマの言うとおり6時間もの間戦い続けたにもかかわらず彼らはそろそろ立ち上がりそうなくらいに体力を回復させていた。

ディーンが周囲に人もモンスターもいないことを確認すると、彼らはおもむろに服を脱ぎ、無限巾着から着替えを取り出した。タオルに水代わりの回復薬をしみこませ、全身を拭く。全身にこびりついた血をすべて拭き終わることには、各自10枚以上のハンドタオルを真っ赤に染め上げていた。

「それにしても、前とはずいぶん違う戦い方ができるようになったよな。自由度はあがつたし、急所を斬れば前よりもあっけなく死ぬし」

着替えながらドリストが言った。彼の言うとおり以前はドリストの攻撃がクリティカルヒットしても死ななかつたようなモンスターでも、喉を切り裂かれると出血や窒息であっけなく死んだ。

「もう少し人数をそろえれば美味しく狩れたな。3人じゃキツすぎると、壁が1人と魔法使いが1人増えればちょうどよさそうだ」

アキヤマがそう言つと、ディニンとドリストは頷いた。回避重視のドリストはともかく、攻撃特化のアキヤマは壁役がないと少々つらそうだった。補助魔法や回復魔法があれば殲滅速度はもっと上がるだろ? し、次はちゃんと人数をそろえて狩りう、とディニンは考えた。

新しい装備に着替え終わり、3人はマジマエへと急いだ。ディニンとドリストは使い魔を出し、アキヤマはディニンのナイトメアと一緒に乗ることにした。

巨大な黒い女豹にまたがりながら、ドリストが提案した。

「この後 色街 に行こうと思うんだが、お前らはどうする?」

長時間の戦いの後で、ドリストは昂ぶっていたのだ。アキヤマも同じだったらしく、だらしのない顔をしてドリストに賛同した。

「うーん、僕はいいや。もともとそういうのは淡白だし」

ディーンは誘いを断つた。病気が怖かつたし、そもそも彼は初対面の女性とは満足に口が聞けないタイプである。昨日ともに狩りをしたミーナに関しては以前から何度か顔を合わせていたから打ち解けることができたが、商売女というのはどうも怖そつだと彼は思っていた。童貞を捨てたがるくせにはじめては恋人とがいいという、童貞特有のくだらない執着もある。

ディーンが断つても2人はさほど氣を悪くしなかつたので、ディーンはほっとした。

すでに日は沈み始めている。3人は使い魔を走らせ、夕焼けに赤く染まつた空の下、マツマエへと急いだ。

マツマエの門を通りたところで2人と別れ、ディーンはNPCの商店が立ち並ぶ通りへと足を運んでいた。

以前よりも活気にあふれ、商人たちの灯す明かりで煌々と輝く商店街で、ディーンは買い求めた焼き鳥を食べながら露天店をひやかしていた。石畳の路地にはところせましと露天が立ち並び、道の両脇には立派な店がいくつも立ち並んでいる。武器屋や薬屋、魔術用品屋などさまざまなお店の客引きが声をからして口上を叫び、懸命に客を引こうとしている。

途中で見かけた素材店に入り、矢の素材となる神木を買い求める。明日の午前中にリリヤの工房の一角を借りて矢を作る予定なので、

市販の矢尻や矢羽の材料もいくつか買い求めた。矢尻の生産には鍛冶スキルが必要になるし、市販のものでもリリヤにルーンを刻んでもらえば一流の鍛冶プレイヤーによる矢尻と遜色ないステータスに仕上がるのだ。彼女は異変が起きてからずっとルーンの研究にかかりきりで依頼を受けていないので、実験材料として矢尻を提供してルーンを施してもらうつもりだ。

値引き交渉の結果以前よりも安価で素材を買うことに成功したディーンは、上機嫌で商店街を歩いていた。すると、前方から男女の言い争う声が聞こえ、一般市民たちが輪を作っていた。なにごとかと思って千里眼で確認すると、どうやら2人の男性プレイヤーが2人の女性プレイヤーを強引にナンパしようとしているらしい。

女性プレイヤー2人は、よく見るとリリヤとミーナだった。リリヤはいつも快活さはどこへやら、見ているだけで背筋が寒くなるような冷たい目を男性プレイヤーに向いている。ミーナはそんなリヤを守るかのように、リリヤの前でサーベルに手をかけていた。こちらは抜き身の刀のようなぎらぎらとした鋭い殺気を放つており、男性プレイヤー2人はそんな彼女たちに気おされているかのように見えた。

ミーナがいるならリリヤに危険は及ばないだろうと考えて、ディーンは近くの商店の屋根に上って事の成り行きを眺めることにした。万が一に備えていつでも弓を構えることができるようにしておくが、おそらく自分の出番はないだろうと彼は予測した。

ミーナのジョブである ルーンフェンサー はPvPにおいてなら全ジョブ中最強であるといわれている。魔法と剣とを同時に操るのだから、当然といえば当然である。ミーナの実力の高さは先日の

狩りでいやというほど知っていたし、相手も廃人とはいえ負けることはないだろうとディーンは踏んでいた。

「ディーンが売り子から買った焼きどつもひこしをかじったその時、無責任でお祭り好きなNPCが叫んだ。

「おい野郎ども、嬢ちゃん2人になにびびってんだ！」

その台詞を聞いたリリヤの顔がいよいよ無表情になり、ディーンは頭を抱えた。リリヤの事情は聞いたことがないが、彼女はどうも「女として扱われること」に異様なまでの拒否感を示すのだ。彼女に面と向かって「かわいい」「きれい」といった男たちの末路は何度も見てきたので、リリヤたちに絡んでいる2人の男性プレイヤーは最悪死ぬかもしれない、とディーンは思った。もちろん街中で人死にを出すのはさすがに不味いので、男たちが命の危険に晒されたと感じたらすぐにでも争いを止められるよう、ディーンは弓と矢をそばに置いた。

「仕方ねえな。こうなじや、腕づくりにきてもらつぜ」

2人の男のうち、片手半剣を持つた男が言った。剣を抜き、脅すように刃先をゆらす。

もう片方の男も曲刀を抜いて、下卑た笑みを浮かべてミーナに剣を突きつけた。

ミーナがサーベルを抜くと、2人の男は左右から同時に踊りかかった。その動きを見て、ディーンは安堵した。男たちの実力はマツマエでも最底辺なのだと一目見てわかったのだ。

ミーナは右手に握ったサーベルで片手半剣を弾き、同時に軍服の左腕に仕込んだ細鎖で曲刀を受け止め、これまた鎖に裏打ちされた手袋で曲刀の男を殴りつける。

ミーナが軍服や手袋に仕込んだ鎖にはリリヤが持てる技術をすべて注いで作り上げたルーンが刻まれており、その性能は一流の鍛冶プレイヤーが作った全身鎧などよりもよほど高い。事実、鋭い切れ味の曲刀を受けても鎖には傷ひとつつかなかった。

ステータスでは男にはるかに劣るはずのミーナが操るサーベルは、通常の剣術スキルにはありえない動きで片手半剣を弾き続ける。その剣筋を見た男たちは、信じられないものを見た顔をして言つた。

「エクストラソードスキル、だと……？」

エクストラソードスキルとは、通常の剣術スキルの熟練度を一定以上までに上げるとおきるイベントクエストによって得られる、とてつもなく強力な剣術だ。求められる剣術スキルの熟練度はそこまで高いわけではないが、クエストの成功率が1%を下回るため、エクストラソードスキルを持つプレイヤーはMWOでも20人ほどしかいない。

「そう。エクストラソードスキル、サーペントだ」

屋根の上に上ったディニンが、そう呟く。

ミーナの操るサーベルが、襲い掛かる2本の剣を弾き続ける。

「クソッ！ まるで剣筋が読めねえ！」

曲刀の男が毒づく。2対1で攻めているにもかかわらず、パラメータが劣るルーンフェンサーに男たちは押されていた。ミーナに魔法を使う様子がないことから手加減されていることがわかるが、しかし男たちはいまや攻めあぐねている。

サーベルは、それ 자체がまるで一匹の生き物であるかのように変幻自在に動いていた。じつと見つめていると、サーベルが伸びたり縮んだりしているような錯覚に襲われるほどその剣筋は幻想的だつた。しかも、直線的な軌道の男たちの剣より、曲線的でクセのある動きのサーベルのほうが圧倒的に早いのである。

まったく読めない剣筋に幻惑され、片手半剣の男は右から攻撃が来ると感じてとっさに剣を右に構えた。が、サーベルは男をあざ笑うかのように男の左から襲いかかり、片手半剣を握った手首を斬り飛ばした。片手半剣が地に落ち、男は悲鳴を上げる。

ミーナが初めて攻撃に出た隙を突こうと、残った男がミーナの真横から曲刀を突き出す。

しかし、曲刀は目にも止まぬ動きでサーベルに弾かれ、体制を崩した男の手首をミーナが斬り落とす。曲刀が石畳の上に落ち、男は血の噴き出る手首を呆然と眺めた。

ミーナが懐から布を取り出してサーベルについた血を拭き取ると、リリヤが冷たい目をしたまま剣を握って進み出た。

「リリヤっ！」

ミーナが鋭い声を上げてリリヤを制止するが、それを予期していたリリヤは小声で唱えていた呪文を発動させ、地面から影の手が伸びてミーナの動きを封じる。

絡み付く影と格闘するミーナに一言謝つてから、リリヤは剣を握って曲刀の男の前に立つた。その目を見たディーンはリリヤが男たちを殺すつもりだと悟り、あわてて口を開く構え鎗矢を番える。

「待ってくれ、助けてくれ」

血の噴き出る手首をだらんとぶらさげたまま、男は必死に命乞いをした。しかし、リリヤはそんな男に冷たい視線を向け、剣を振り上げる。

男が殺されると思って絶叫し、4人を囲んでいたNPCたちが息を呑んだ瞬間 リリヤが振り上げた剣を、飛来した矢が弾き飛ばした。

リリヤが矢の飛んできた方角に目をやると、屋根から飛び降りたディーンが急いで駆けつけてきた。

「邪魔をするつもり?」

絶対零度の目をディーンにむけ、リリヤは静かな声で尋ねた。静かな声ではあったが、ディーンはその裏に押さえがたい憤激と悲しみを感じ取った。まるで引き絞られた口のようだ、とディーンは感じた。

「どういう事情があるにせよ、街中で人殺しは賢明なこととは言え

ないな。もうすぐ役人も来るだろ？。少しばかり着け

これまでにも何度かリリヤが怒ったときの顔は見たことがあったが、作り物のアバターが浮かべる怒りの表情などとはかけ離れたリリヤの冷たい顔に、ディーンは気圧される反面強く惹きつけられた。場違いなことだが、まるで三日月のような美しさだとディーンは思った。

リリヤは邪魔をするディーンを捕らえようと、呪文を口にするが、呪文が完成する前にディーンがリリヤの口に手を当てて黙らせた。

田を白黒させるリリヤの首根っこをつかみ、呪縛から開放されたミーナに引き渡す。

「ありがとう、リリヤをとめてくれて」

「どういたしまして」

ディーンは礼を言つてミーナに言葉を返し、見世物は終わりだと言わんばかりに周りのNPCたちを追い払う。NPCたちも飽きたのか、すぐに散つていった。ついでに2人の男を病院へと運んでもらう。

「落ち着きなさい、リリヤ」

NPCたちが去ると、ミーナはそつ言つてリリヤの田を覗き込んだ。

「……」「めん、ちゅうと頭に血が上った」

男たちが運ばれていったことで冷静になつたのか、すまなせやうな顔をしてリリヤが謝つた。

「事情はわかつてゐし、気持ちはわかるけどさ……やつぱり、殺すのだけは不味いと思つんだ」

ミーナが言つと、リリヤは言葉に詰まつた。

「とつあえず、家に帰らつ

ミーナが提案し、リリヤは黙つて頷く。

「迷惑かけて」「めんね。何かお詫びをしようと思つたんだけど……」

リリヤが申し訳なさそうな顔でティーンに言つた。ふざけて下ネタを振るつたとも考えたが、空氣を読んでティーンはまじめに振舞うことにしてしまつた。ここで申し出を断つてもリリヤは氣まずいだろうと考え、彼にとつても利益になる提案をしてみる。

「それじゃあ、『』に新しいルーンを刻んでくれ

ティーンはニヤリと笑つて言つた。

ティーンが今使つている『』には、既にシステム的限界までルーンが刻んである。しかし、異変後は刻む場所さえあればいくらでもルーンを刻み込めるようになつたとリリヤから聞いていたので、ティーンは追加の加工を頼んだのだ。どの武器もルーンを刻み込める数は3つまでと以前は決まつてたが、8尺5寸の大弓にはその気に

なれば20はルーンを刻めるのではないか、トリリヤは言っていた。

「わかった。全力でやらせてもらひよ」

リリヤはティーンの笑みを見て、職人としての欲求を刺激されてニヤリと笑つた。ミーナの鎌にはすでに限界までルーンを刻み込んだが、武器に刻み込むのはまだだつたのだ。

快活さを取り戻したリリヤにミーナは安堵し、3人はリリヤの家へと歩き出した。

リリヤの家に着いた3人は以前のように晚餐を楽しみ、酔いつぶれたミーナを寝室に運んだ。

ミーナを寝かしたリリヤとティーンは、地下の工房で加工に関する相談を始めた。

「強化の方向性としては、射程を延ばして威力を強めればいいんだつけ?」

リリヤの問いにティーンは頷いた。

「こつちで新しく発見したルーンとしては 貫通強化 と 抵抗減少 が使えそうだけど、どうする?」

「貫通強化 は欲しいな。 抵抗減少 って言つのはどひいう効

果なんだ？」

「空気抵抗を少なくして、よつまつすぐに飛ぶよつになる」

「ならそれも追加で」

追加するルーンを紙に書き出すリリヤと話し合いながら新たに刻む20のルーンを検討するティーンは、いつしか時の流れを忘れて話し合いで熱中していた。

「じゃあ、貫通強化を3つと抵抗減少を4つ、命中強化を5つに加速を5つ、衝撃強化を3つの計20でいいかい？」

一時間あまりも話し合いで、結論が出た。

「うん、それで頼む」

「じゃあ、今から作業するから明日の朝にできると思つよ。しかし、これだけ大量にルーンを刻んだらどんな怪物』ができるんだろうね」

「確かにね。出来上がり次第使おうと思つたが、今日はもう寝いから帰るよ」

「いや、部屋は余つてゐから泊まつていいくとい。ついてきて、案内するから」

リリヤは断る隙をとらずにティーンの手を引いて土房から出で、

空こむる部屋まで案内した。思いがけないタイミングで手を握られ、ティーンは一瞬どきりとする。が、どちらもリリヤには特別な意図はないようだと思つてすぐに落ち着いた。

部屋について、一通り設備の説明を受けてからティーンはまたもや手を引かれて風呂に案内された。

「基本的に日本のお風呂と使い方は同じだよ。メイドさんがここに客用のタオルを用意してあるから、使ひ終わったらそこのかごに放り込んでおいて」

「わかった」

リリヤの邸宅の風呂は、大理石でできた洋風の風呂だった。金色のライオンの口からお湯が出ていて、ティーンの頬がぴくぴくと引き攣る。あまつにもお約束過ぎて、笑うべきかどうか真剣に悩んだのだ。

「じゃあ、入るから出でてくれる?」

家の持ち主に出てたところの妙なものだと思つながら、ティーンは言つた。すると、リリヤが真顔でとんでもなことを言つてのけた。

「いや、背中流すから一緒に入るよ。」

ティーンはあわてとじて皿を見開き、リリヤの顔を見る。

「やだなあ、冗談だつてば。じゃ、卜房に戻るから」

悪戯っぽくクスリと笑つて、リリヤは脱衣所から出て行つた。デイニンはからかわれたことを悟つて赤くなり、少し乱暴な手つきで服を脱いで風呂に入ったのだった。

5話（後書き）

リリヤさんを魅力的に書きたいけど書けてる気がしない

「起きたーーー！」

気持ちはよく寝ていたディーンは、リリヤの叫び声によつて起られた。

「おはよー！おはよー！」

「ん、おはよー！」

肩をつかまれて首を揺られ、ディーンは覚醒した。目を開けると得意げな顔をしたリリヤと田が合つたので、朝の挨拶を交わす。

「はー、加工終わったよー！」

ディーンは比較的朝は強いほうだ。ベッドから起き上ると、リリヤが自分の弓を掲げているのを見て昨日のことと思い出した。

やたらとルンションの高いリリヤから弓を受け取り、全体をなめてみる。

隅々まで刻まれたルーンから、なんともいえない力の波動を感じる。どうやら、加工は上手くいったようだと彼は安堵した。刻まれたルーンが薄い水色の光を発しており、その光が弓全体を覆つっていた。

「朝食はできるから、着替えて降りてきてね」

リリヤはそつとあぐいをしながら部屋を出て行った。

重厚な木製の家具とシルクのカーテンが特徴的な洋風の部屋で、ディニンは寝巻きを脱いで 無限巾着にしまい、着替えをクローゼットから取り出した。昨日の晩にメイドが洗濯して乾かしてくれたらしく、装備はまるで新品であるかのように手入れが行き届いている。この短時間でどうやって皮製の装備を乾かせたのかと気になつたが、おそらくは魔法を使つたのだろうとディニンは推測した。宿でも生活には細々とした魔法が使われていたし、洗濯・乾燥の魔法があつてもおかしくはない、と彼は考えた。

白い大理石で造られた洗面所で顔を洗いながら、ディニンはそういえばエルフはひげが生えないらしい、と気づいた。異世界に着てから鏡を見る機会はそれなりにあつたが、一回もひげをあたつていなにも関わらず顎はつるつるなのだ。細面の美青年顔にもすっかり慣れてしまったことを実感しつつ、洗面所を出た。

渡された弓を巾着にしまい、ディニンは朝食を取るためにリビングへと向かう。洋館の床には赤い絨毯が敷かれており、天井から吊り下げられたシャンデリアもあいまつて豪奢な雰囲気をかもし出していた。

「おはよう、ミーナ」

「おはよう、ディニン」

ディニンは青い顔をしてミーナに挨拶した。どうやら、またしても一日酔いらしいとディニンは見た。一日酔るとわかつても酔いつぶれるまで飲むあたり、小柄で少年じみた外見に似合はず酒が大好きなのだろうと彼は考えた。

3人がテーブルに着くと、モノクルの老執事がワゴンに朝食を載せて運んできた。こんがりと焼けたトーストのなんともいえない香りが漂つてくる。リリヤはコーヒーが嫌いなので、朝食には紅茶が添えられていた。

「そういうば、今日はどうするの？」

朝食を食べながら、リリヤが聞いてきた。

「昨日の狩りで矢を使い切っちゃったからね。どこかで矢を作ろうと思つ」

「それならうちの工房使う？ 徹夜明けだからこれ食べ終わったら寝るし、好きに使っていいよ」

「それなら使わせてもらひう」と云う

リリヤから工房の使用許可をもらつたディーンは、朝食を食べ終わると地下の工房へと向かつた。

一刻も早く弓を試したい気持ちはあるが、先のことを見据えて1000本は矢を作つておきたい、と彼は考えていた。素材は十分に買い込んだから、今は手を動かすのみである。

巾着から素材となる木と矢羽、矢尻を取り出して彼は作業を始めた。

1分に5本のペースで、彼は持ち前の集中力を發揮して矢を作り続ける。

たまち彼の周囲に木の削りぐずが山をなす。時折山を崩しながら、彼はあぐらをかいて作業を続けた。

作業を始めてから3時間ほどたつと、後ろから声をかけられた。

「ここにちは、ディーンさん」

やわらかいソブランの主を探してディーンが振り向くと、そこには立っていたのは先日ともに狩をしたハイエルフのグスタフだった。

「やあ、グスタフ。リリヤに用か?」

「ええ、確かに彼女にも用がありますけど、あなたにも用はあるんです」

ディーンは作業の手を止めてグスタフを見た。すると、美少年のアストロマンサーは真剣な顔で語り始めた。

「実は、防衛クエストが2週間後に迫っているのですが、ディーンさんは防衛軍の士官をやりたいんですね」

「いろいろと突っ込みましたが、できれば丁寧に最初から話してくれ」

唐突によくわからなことを口走ったグスタフに、ディーンは突つ込んだ。

「ああ、すみません。実は僕、その後マジマホの藩主と会見して、

次の侵攻の際にプレイヤーをまとめて防衛軍を組織することを提案しましてね。藩主の許可はもらえたので、いくつかの大手ギルドに声をかけて防衛軍の中核を組織したんです。15の大手ギルドのギルマスによる投票で サウザンナイツ のマスターが将軍に就任して、今朝から街で志願兵を募っています。僕は一応参謀をやってます

「ずいぶんと手際がいいな、おい」

ディーンは目の前の少年の政治的手腕に舌を巻いた。異世界に着てから一週間もたたないうちに組織を起こして地位に着くとは高校生とは思えないな、と感嘆する。

「いえいえ、僕などはまだ未熟ですよ。それで、部隊編成と大まかな戦術だけは決定したので、適性のありそうな知り合いを片端からあたって士官候補を探しているんです。ディーンさんには『兵隊の指揮をとつてもらおうと考えてます』

少年の言葉に、ディーンは考え込む。グフタフはディーンをせずのことなく、黙つて立っている。

「……それって、もちろん一時的な役職だよな？」

「どうとも言えませんね。僕の思惑としては防衛軍を組織してプレイヤーたちに連帯感を持たせて、防衛が終わった後にプレイヤーをまとめる組織を作るつもりですから。防衛軍自体は一時的なものですが、防衛軍の組織を前身として自治組織を発足させるつもりです。なので、必ずしも軍で指揮官をやつたからといって自治組織の運営にかかるわけではないと思いますが」

「君はそれなりの地位にいるんだろう？ なら、君が僕の辞める権利を保障してくれるなら士官はやぶさかではないよ」

「わかりました。では、お願ひします」

右手を差し出したグスタフに、ディニンは立ち上がってその手を握り返す。

「ところで、弓兵隊といつてもほとんどが洋弓使いだろ？ 僕が指揮官で大丈夫なのか？」

「むしろ、同じ洋弓使いに指図されるのはプライドの高いプレイヤーは嫌うでしょう。なので、弓のことがわかっていてなおかつ洋弓使いでないディニンさんが適役だと考えています」

「いや、和弓使いだって他にも何人かはいるだろうが」

ディニンが訊くと、グスタフはやれやれとかぶりを振った。

「和弓使いでカンストしてるプレイヤーはこの世界には両の手で数えられるほどしかいませんし、その人たちも 速射 スキル保持者ですから、純粹な和弓使いとは言いがたいです。現在、この世界でチャージ 持ちのカンスト和弓使いはあなたしかいないんですよ」

「MWのプレイヤーから考へるとその理屈はおかしいぞ」

突込みを受けたグスタフは、何も知らないんですね、と言つて呆れたような顔をした。

「知らないんですか？ あなたの和弓フェチっぷりが過去に何度もか

掲示板で取り上げられて、そのせいで和弓使いが増えないんです。元々マイナーな武器やビルドを選ぶプレイヤーはその道の第一人者になりましたがってマイナーな選択をすることがほとんどですが、和弓使いとしてのあなたがあまりにも廃神なので、わざわざ同じ和弓を使い選ぶ物好きはいないんですよ。昔は和弓使いもそれなりにいたようですが、あなたの和弓スキルが400を越えた辺りから皆洋弓に鞍替えしたんですね

「なんか嘘くさいんだが」

「1日のうち15時間ログインして弓を引き続ける生活を7年続けた廃人が居たらしいんですけど、僕としてはそんな人がいること自体が嘘くさいです」

なるほど、そんなものかとディーンは感心した。

「元々マイナージャンルでトップになろうとする人たちはメジャージャンルでトップを狙う人たちよりは時間が取れない人がほとんどですから、そんな人たちが超弩級の廃人と同じ武器で競おうとは思はずがないでしよう。普通はVRMMOの武器に愛着を抱いたりなんかしませんしね」

誰かさんはそうでもないみたいですが、とディーンに生暖かい目を向けるグスタフ。ディーンはぽりぽりと頭をかいて話題をそらした。

「ところで、防衛軍とやらはどれくらい人数をそろえるつもりなんだい？」

「今のところ軍の参加人数は700人ほどで、目標人数は2500

人です。マジマエ市内のプレイヤー人口については調査中ですが、おそらく3000人前後かと。すべてのサーバーのプレイヤーがこの世界に来ているようなので、結構人数が多いようです」

「よくもまあ、これだけの時間でそんなとこ今まで把握してるな」

「誰かがやらなければいけないなら、僕がやろうとこつまでです。大手ギルドのマスターとはいっても、頼りにならない日和見主義者ばかりですから」

皮肉気に唇の端をゆがめて、グスタッフは言った。

「政治手腕も情報収集能力もないクセに、見栄ばかり張りたがる。15人のうち半分以上はそんなくだらない人間でしたよ。あんな人間に自治組織を任せることにはいきません」

「ずいぶんと辛口な評価だ」

苦々しげに愚痴るグスタッフに、ディニンは言った。まあ、こういう義憤に燃える若者が政治に関わっているのは好ましいことかもしれない、とディニンは思った。なにしろ22世紀に入つてから代議士の平均年齢は70歳を越え、そのせいで日本は刻々と変化する国際情勢についていけないのだ。ディニンは、少なくとも若くて頼りがいのある施政者というのはどこか安心感を与えてくれると思っていた。

「元々皮肉が多い性格なんですよ。せっかく異世界に来たから治そうとは思つたんですが、無理なようです。まあ、そういうわけで近く連絡をします。泊まってる宿は調べてあるので、そっちの方に尋ねますよ」

「そんなこと、いつ調べたんだ？」

聞き捨てならない」と言つたグスタフに、ディーンは質問した。

「あなたもそうですが、プレイヤーの皆さんはもう少し」」が異世界であるということを良く考えた方がいいと思いますよ。では」

最後に謎めいた忠告をして、皮肉屋のハイエルフは工房を出て行つた。

ディーンは肩をすくめて、矢を作る作業を再開した。彼よりも一回り年下の少年は、彼などは及びもしないほどに優秀らしいとディーンは思った。だから彼のなぞめいた忠告に関しても、考えるだけ無駄だらうと思考を放棄する。

作業を再開してから3時間30分ほどが経つと、ようやく100本目の矢が完成した。

本来ならばリリヤにローンを刻んでもらう予定だったが、しかし思ひがけず弓を加工してもらえたので矢の加工は遠慮することにしたのだ。それに、一刻も早く』の性能を試したいということもある。

一部の削りくずを暖炉に放り込み、それでも処理しきれなかつた分は巾着に収納した。捨てる場所は無かつたし、いづれ何かの役に立つだらうと思つたからだ。

リビングに戻り、時計を確認するとすでに時刻は午後の3時だつ

た。リリヤはまだ寝ているらしく、ミーナが酒の抜けきらない顔をして紅茶とマフィンを楽しんでいる。ティニンは老執事から昼食代わりにマフィンを3つもらい、紅茶を啜った。

心地よい沈黙。ミーナはどこかボンヤリとした顔で紅茶を啜り、ティニンは黙つてマフィンを食している。不思議と気まずさは無く、くつひげるどティニンは感じた。ぶどうのフレーバーティーの芳醇な香りがリビングに広がり、安らいだ気分になる。マフィンはひとつやら作りたてらしく、中はほんのりと温かかった。

「そういうえば、昨日のことには訊かないの？」

ティニンがマフィンを食べ終わると、ミーナが尋ねた。

「リリヤが怒つたこと？ 興味がないといえば嘘になるけど、他人の事情を詮索する趣味は無いな」

ティニンが答えるとミーナは一言、そう、と呟いた。

「リリヤがあなたのことを信用できると思えば、そのうち彼女は自分から話すと思うわ。あの娘も色々事情があるから、できれば支えてあげて欲しいのだけど」

ミーナは心配そうな顔をしてそういった。その顔を見て、リリヤはいい友人に恵まれたな、とティニンは思った。

「長い間友人をやつてきたんだ、そう簡単に見捨てたりはしないさ。色々と世話になってるのも確かだし、メンタルケアのお手伝いくらいならお安い御用だ」

結構な大きさの義侠心と少しばかりの虚榮心から、ティニンは深

く考えずに講合つた。ミーナは顔を上げ、嬉しそうな顔をする。

「あつがとわ。ヒルヒル、今日せじの後ビリするのへ。」

ミーナが尋ねると、ティーンは楽しそうな顔をして答えた。

「『』を試してみる。どのくらい強力になつたか把握しておきたいんだ」

「なら、一緒に狩りに行かない？ そろそろコリヤも起きたと思うし、私の剣もルーンを刻んでもらつたから」

ミーナの提案に、それは都合がいいとティーンは頷いた。その次の瞬間、リビングの重厚な木の扉が開いてリリヤがやってきた。

「おはよー、ミーナ、ティーン」

リリヤは水色を基調とした丈の長い魔術師風のローブを着ていた。杖は巾着に収納してあるらしく、持っていない。淡いプラチナブロンドの髪は水色のローブに不思議に似合つていて、なんとも幻想的な美しさだとティーンは思った。

「おはよー、リリヤ」
「おはよー、リリヤ」

期せずしてティーンとミーナの声が重なり、3人は顔を見合させて笑つた。

「ヒルヒルでコリヤ、これから狩りに行こうと思つんだけど、ビリするへ。」

ひとしきり笑つた後、ミーナがリリヤに尋ねた。

「ああ、いわちもぢょうじ行こうと思つてたところなんだ。ディーンのルーンを刻むついでに新技術でアイテムを創つてみたから、それを試そうと思つ」

そう言つて、リリヤは懐から一枚の金属板を取り出した。トランプカードと同じくらいの大きさのそれには細部にまでルーンが刻まれており、薄水色の淡い光を放つていた。

「水属性付」のルーンを刻むと武器から高圧の水が吹き出るようになるけど、今回のはその応用だね。空間拡張と転送、噴射の3つを組み合わせて、この金属板の中に仕込んだ武器を勢いよく射出できるようにしたんだ。とりあえず今の所は実験だから鉄球を仕込んであるけど、研究が進んだら剣や槍も試してみようと思つ」

リリヤが何を言つているのか、ディーンとミーナにはさっぱりわからなかつた。2人が顔を見合させて困惑していると、焦れたりリヤが解説する。

「つまり、既存のルーンを構成するいくつかのパーツを分解して、それぞれがどういう働きをしているのかを調べたんだ。それでもって、効果のわかつたいくつかのパツツを組み合わせて新しいルーンを作つたんだよ。わかりやすくて」とすると、漢字の篇と旁を分解して新しい漢字を作つたつてこと

リリヤの説明に、なんとなくわかつたような気分になつて頷く2人。

「この技術を応用すればいくらでも新しいルーンは作れそうだけど、くれぐれも他のプレイヤーには言わないように。技術は独占したいし、昨日の2人みたいな下衆には武器を渡したくないから、信頼できるプレイヤーだけに秘密で売ることにするよ」

声をひそめてリリヤは言った。

「ところが、しばらくは研究に専念したいから密はとらないことにする。だから、君達は存分に稼いで貢いでくれたまえ」

〔冗談めかしてそんなことを言つリリヤに、2人はクスリと笑つた。〕

6話（後書き）

評価・感想などいただけないと嬉しいです。

良い点を指摘してくれると嬉しいです。

悪い点を指摘してくれるともっと嬉しいです。

良い点と悪い点の二つを指摘してくれると一番嬉しいです。

「それじゃあ、行こうか」

ディニンたちは戦闘用の装備に着替え、リリヤの家を出発した。ディニンの装備はリリヤの家のメイドが昨日のうちに洗濯してくれたので新品のように綺麗になっている。

リリヤは水色のローブに木製の杖を携えていた。その横を歩くミーナは、いつもの白い軍服を着て腰にサーベルを吊っている。ブーツの鉢が石畳をたたく硬質な音が耳に心地よい、とディニンは思つた。

マツマ工の街は昨日に比べて大分静かになっている。一晩経つて頭を冷やしたプレイヤーが多いというのも一つの要因ではあるだろうが、おそらく最大の要因はいたるところに立てられた高札によるものだろ、とディニンは推測した。「マツマ工防衛軍」の署名で立てられた高札によつて、先ほどディニンが聞いた情報の一部が発表されている。高札は 防衛クエスト が迫つてることを告知し、防衛軍に参加したいものは 防衛軍 の本部が設置されている中央街の洋館まで足を運ぶように、と書いてあつた。そのほかにも様々な情報が載つており、プレイヤーたちに冷静になるように呼びかける文がひときわ大きな文字で載つている。人間というのは情報が手に入れば存外に落ち着く生き物で、高札を見たプレイヤーたちは情報が手に入ったことによつて目に見えて落ち着いたようだつた。

ディニンたちが途中ですれ違つたプレイヤーは皆、小声でひそひそと話し合いながら集団で防衛軍の本部へと向つていた。彼らは皆防衛クエスト が失敗すればどうなるかを考え、最悪の事態を防

ぐために防衛軍への参加を決意したのだ。モンスターが街に侵入すれば抵抗する力のないNPCは虐殺されるだけで、マツマエのプレイヤーたちは唯一の拠点を失うことになる。しかもギルドホールに設置されている 移動門 を通つて高レベルのモンスターが他の都市へ侵入するようなことがあれば、エドやキヨートといった低レベルプレイヤーたちの街は壊滅しかねない。高札にはその場合の被害予想が生々しく書かれており、小心者の廃人は顔を蒼くして防衛軍本部へと向つていた。

ディニンとリリヤ、ミーナの3人は 防衛クエスト の成否について意見を交換していた。

「クエストの仕様が前と同じだとすれば、今マツマエにいるプレイヤーの3割が参加すればほぼ確実に勝てるはず。ただ、6時間もの間集中力が持つかどうかということ、誰かが死んでしまった時に戦線が崩れてしまわないかということ、この2つが不安要素かな」

ローブの袖にルーンが刻まれたカードを仕込みながら、リリヤが推測を述べた。

「プレイヤーの戦力が未知数なのがなんともいえないな。スキルやステータスの仕様は変わつてないみたいだけど、応用の幅は恐ろしく広がつたし、リアルになつた分フルに力を振るえないプレイヤーもいるだらうから」

ディニンが言つた。何回かの狩りを通じて戦い方の幅が広がつたことを嫌というほど実感している上、彼自身もこれからはどうに戦えばいいか大分戸惑つているのだ。矢を放つたびに敵を引き寄せてしまつのでは、効率はいいかもしれないが安全面に不安が残る。

以前はフィールドでは魔術師による魔法が大々的に使用されたために、直接狙撃したモンスターに追跡されることはあってもそれ以外のモンスターをひきつけてしまうことはほとんど無かつた。が、フィールドが広くなつてモンスターの沸きが減つた今、ディーンの長距離狙撃はどうしてもモンスターをひきつけてしまうのだ。強化した弓の威力によってはこれまでのスタイルを大幅に変えなければいけないとティーンは考えていた。

「AGI剣士は戦い方の幅が広がつたけど、壁職やSTR型はそうでもないみたいね。私個人は、これまでよりずっとやりやすくなつたよ」

ミーナが思つたことを口に出した。モンスターが急所を斬れば以前より楽に倒せるようになつたお陰でミーナやドリスト、アキヤマのようなスキル熟練度・AGI重視のプレイヤーたちは戦いが楽になつたと実感している。

「まあ、人数をそろえればどうとでもなると思うよ。回復職と壁職を集めて慎重にやればそつそう死人は出ないだらうけど、指揮官の手際次第だらうね」

リリヤがそういうと、2人は確かに、と頷いた。結局の所、わからぬことが多いと多すぎて判断のしようがないのだ。

3人は他愛のない話題に興じながら、冬特有の澄んだ空気に心地よさを感じつつマツマエを歩く。今日のマツマエの空は雲ひとつない晴天で、冷たく乾いた風が石畳の上の枯れ葉を巻き上げている。

マツマエの門に着いたディニンは、やはり廃人というのは救いようがない人種だな、とかぶりを振った。ディニンたち3人が門番に通行許可証を見せようと瞬間、背後から声をかけられ、振り向くとそこにはアキヤマとドリストがいたのだ。話を聞くにこの2人は昨晩行つた風俗ですっかり金を巻き上げられ、装備一式とわずかな回復アイテムを除いては無一文らしい。昨日みたいな効率がいい狩りをして今晚も風俗に行きたいからぜひともパーティを組んでくれと、2人はディニンに頼み込んだ。ディニンとしてはミーナの絶対零度の視線が痛いので断りたかったが、彼らのあまりの必死さに負けてパーティを組むことになった。

無言でかかとを踏んでくるミーナに辟易してリリヤに助けを求めるも、リリヤはクスクスと笑うだけで助け舟を出す様子はない。年頃の女の子の眼前で風俗通いの金がほしいなどと言つてのけた2人の友人を恨めしげに睨んでから、ディニンは一行の先頭を歩き出した。

昨日とは違ひマツマエ平原にはちらほらとプレイヤーの姿が見られる。防衛クエストに向けて訓練しているのか、それとも生活費を捻り出るために狩りをしているのかはわからないが、戦闘経験を積むのは悪い傾向ではないとディニンは思った。異変が起きてから戦闘は若干様変わりしているので、慣れておくなら早い方がいいと考えたからだ。

歩くこと20分、半径5km以内に人がいないことを確認したディニンはおもむろに弓を取り出して矢を番えた。

青く光る刻印を刻まれた弓から、ディニンは名状しがたい力の波動を感じている。

弦を引き絞り、はるか遠くに視認した赤鬼の背に狙いをつけるとこれまでに無く強烈に「中る」という予感がした。いますくにでも矢を放ちたかったが、チャージを発動させて赤鬼を凝視し続ける。

5秒、10秒、20秒　赤鬼がふとディニンのほうを向いた瞬間、ディニンは矢を放った。

矢が放たれたと思つた次の瞬間、4kmほど離れたところに居た鬼は上半身を抉り取られ、衝撃で数多の肉片となつて飛び散つた。千里眼を限界まで強化してディニンが見てみると、体長2mはあつた鬼は原形をとどめていなかつた。鬼が居た辺りは矢による衝撃波でクレーターができるおり、中央には大きめの肉片と血溜まりができている。

「これは、ひどい」

ディニンは呆然として呟いた。以前ならばせいぜい胸を貫いてりんご大の風穴を開けられればいい方だったのに、ルーンで強化した弓は鬼どころか地面まで抉つている。

「どう、使い心地はいい?」

遠方を視認する術を持たないリリヤは、のんきな顔で「ディーンに尋ねた。

「なんじゅ」「じゅ」

ディーン以外のパーティの中で唯一 千里眼 を使えるドリストが、破壊の現場を一目見て言った。口をあんぐりと開け、目を見開いている。

「バランスブレイクってレベルじゃないな、おい」

思わず思考を停止していたディーンは、ドリストの言葉で意識を取り戻して言った。

「これ、僕の知ってる『』と違ひ……」

左手に持った長弓をまじまじと眺めてみると、ドリストから状況を聞いた一行は信じられないようなものを見る限りで「ディーンの弓」を凝視した。

「とりあえず、確認の為にもう一射だけ試す。今度はちゃんと見えるように、視認できる距離で射てみるか？」

「うそ、お願い」

既に、魔力線を辿つて一匹の青鬼がこちらへ向つてきていた。今度はチャージを発動せず、「ディーンはただ矢を番えて鬼が来るのを待つ。

3分が経ち一行が青鬼を視認したことを確認すると、ティーンは矢を射た。

今回もまた矢が放たれたと思った瞬間に青鬼に矢が命中し、強固な筋肉に覆われた腹にバスケットボール大の風穴を開け、矢が貫通すると同時に衝撃波が鬼を襲う。すると鬼の上半身と下半身をつなぎとめていたわずかばかりの肉が吹き飛び、青鬼は肉片となつて飛び散つた。首と足だけがかるうじて原形をとどめて転がつている。

矢は青鬼の腹を貫通し、青鬼の数十メートル後方に突き刺さつていた。衝撃で地面の一部が弾き飛ばされ、芝生に覆い隠されていた土が露出している。

「なるほど、これはすごい」

リリヤが感嘆の声を上げた。その横ではミーナが驚きに目を見張つている。

「めりやくめりやだなあ、『れ……』

アキヤマが呆れた顔でそう言った。

「まあ、異変以来ゲームバランスなんてあつてないようなものだけど……さすがにこれはひどい」

リリヤはそつと口をついてため息をついた。

「『』の分だと、ミーナのサーベルもす『』ことになつてるかな。ローンはまだ7個しか刻んでないけど、ティーンの『』を見る限り 加

速 4つと 斬撃強化 3つでも充分鬼スペックだよね

そう言われたミーナはサーベルを抜いてまじまじと刀身を眺め、複雑そうな顔をした。身を削るような努力をしてエクストラソードスキルを手に入れた彼女にとって、全く努力をせずに力を手に入れるのは納得がいかないのだろう、とディーンは推測した。ディーン自身は強い弓が手に入るなら儲けものだと素直に喜ぶが、廢人というのは往々にして面倒くさいこだわりをもつてているものだとディーンは長年のプレイ経験から理解していた。

「まあ、時間も勿体無いし狩りを始めようぜ。ディーン、昨日みたいに魔力線ばらまいてくれよ」

ドリストが提案すると、一行は皆賛同した。

「それじゃあ、行くよ 」

ディーンが手当たり次第に何本か矢を飛ばす。前回と同じように囲まれるのは危険が伴うので、前方に扇状に広がるようにイメージして矢を射た。

次々と襲い掛かってくるモンスターを、3人の剣士が切り刻んでいく。

「疾風剣、飛燕の型！」

「トワイライト・エッジ！」

「ソード・オブ・ザ・ダウン！」

アキヤマ、ドリスト、ミーナの3人は戦いの高揚感からか、恥かしげも無く技の名前を叫びながら剣を振るつていて。ディニントリヤは手持ち無沙汰にしながら遠方からやつてくる敵を攻撃したり、回復を飛ばしたりしている。3人の剣士の殲滅速度が速すぎて、援護の必要がほとんどないのだ。

戦闘開始から既に3時間が経っているが、3人はろくに傷らしい傷も負っていない。ドリストは突出したAGIの高さで、アキヤマは剣術スキル熟練度の高さで、ミーナはエクストラソードスキルとAGIを上げるエンチャントを用いて、それぞれ敵の攻撃を捌ききっている。正確には、敵が攻撃する前に斬つて斃してしまっている。

アキヤマの振るう長刀は美しい弧を描き、鬼の獲物を掻い潜つてその首を切り飛ばす。アキヤマは相手の攻撃にあわせてカウンターで致命傷を与えるスタイルが性にあつていてるらしく、次々に襲い掛かってくる鬼の攻撃を避け、全ての鬼を一太刀で仕留めていく。

ドリストの偃月刀が左右から襲ってきた2匹の鬼の武器を受け流し、ダークエルフは優雅なステップを踏み込んで両の鬼の胸に偃月刀を突き刺す。最後の力を振り絞つて抵抗しようとした鬼たちを蹴り飛ばし、ドリストは偃月刀を鬼の胸から引き抜いてよろめいた2匹の喉を切り裂いた。鮮血が飛び、鬼の巨体が地面に倒れる。彼は熟達した受け流しと素早い身のこなしを用いて、2本の偃月刀で手

数を稼ぐ戦法を得意としていた。

ミーナの操るサーベルは縦横無尽に動き回り、獲物に襲い掛かる蛇のじとく緩急のついた動きで次から次へと命を刈り取っていく。ルーンの加護によって強化されたサーベルは目に見えないほどの速さで動き、その斬撃は鋼のような筋肉に覆われた鬼の肉体を、溶けたバターを切るかのようにやすやすと切り裂く。エクストラソードスキルによる独特的の歩方によつて、それほど早く動いていないにもかかわらず鬼の攻撃を紙一重でかわしている。彼女は他の者には真似できない剣術と体捌きでモンスターを翻弄していた。

最初のうちは熱くなつて戦いに熱中するアキヤマとドリストを覚めた目で眺めていたミーナだが、アキヤマに挑発されたことで冷靜さを投げ捨ててすさまじい勢いで剣を振るつている。

時折背後から沸いてくるモンスターは新魔法の実験台にするからとリリヤが全て倒してしまって、ディーンは暇を持て余していた。弓を射ようにも高速で動き回る3人が障害となるのでそれは不可能だ。

モンスターの沸きはまだまだ収まるところを知らない。3人の剣士の殲滅速度よりも少しだけ遅いかといつぐらのペースで、わらわらとやってくる。

モンスターの死体が邪魔なので一行は少しづつ移動しながら戦っている。モンスターの死体から流れ出る血液で小さな川が出来てしまつほど、あたりには死体が散乱していた。定期的にリリヤが消臭の魔法を使つていなければ臭さに鼻が曲がつているだろう、とディーンは考える。以前は実装されていなかつた魔法だが、家のメイド

に教えてもらつたのだとリリヤは言つていた。

ディニンが周りを見回すと緑一色だった平原はディニンたち一行の周囲だけ赤く染まつてゐる。モンスターの血は芝生の栄養になるんだろうか、などとディニンはぐだらないと考へた。

3人の剣士のうち、ディニンが見たところ殲滅速度が一番速いのはミーナだつた。右手でサーベルを操りながら左手で魔法を使い、すさまじい速さでモンスターを屠つてゐる。全身に返り血がべつたりとついており、唯一そのサーベルだけが青い光を放つてゐた。どうやら水をはじく加工がしてあるらしく、サーベルには血が付着していない。

返り血を浴びながら笑いを浮かべている3人の剣士を見て、ディニンとリリヤは顔を見合わせてため息をついた。

「ミーナつたら、柄にも無く熱くなっちゃつて……」

「なんといつうか、あそこまで負けず嫌いだとは思わなかつたよ」

リリヤの呟きにディニンが答える。ミーナと友人づきあいを始めてからまだ一週間も経つてないが、ディニンは意外な一面を見た気分だつた。ディニンの知るミーナは内輪では年頃の女の子らしい一面を見せるが、外では冷静な軍人を連想させるような人間だつたのだ。それほど親しくないプレイヤーに挑発されて熱くなるというのは、彼にしてみれば少々意外なことだつたのだ。

日が暮れてからもモンスターの沸きはとどまる」とを知らず、やむなくリリヤの魔法で草原に火をつけてあたりを照らしながら狩りを続けた。火が消えないようにと、暇を持て余したティーンがモンスターの死体を焼いている。モンスターの死体は生物にしては良くな燃えるので、日が暮れてから一時間ほども経つと小山のように積まれた死体で巨大なキャンプファイアが出来ていた。

剣士たちもさすがに疲れたらしく、今は3人は焚き火の傍で休んでいた。襲い掛かってくるモンスターたちはディーンの矢とリリヤの新魔法によつて斃されていく。

さりに1時間ほどが経つと、ようやくモンスターの沸きは止まつた。

「ああ、確かにきついけどこれは儲かるね」

鬼の角を剥ぎ取りながらリリヤが言った。以前とは違い、斃してから何時間経つても死体が消えないで剥ぎ取れる素材の量が尋常ではないのだ。100匹以上の死体を火にくべたとはいえ、今回の狩りでは下手をすれば1000匹以上のモンスターを狩っているのだ。一行は松明をかかげ、散乱する死体からめぼしい素材を剥ぎ取つていった。帰る時間が遅くなると美容に悪いというミーナの主張によつて、時間短縮のため高価な素材だけを剥ぎ取ることにしたのだ。

「ふつ、さすがにキリが無いからこれくらいにしておこう」

30分ほども剥ぎ取り作業を続けてから、リリヤが呟いた。ミーナが賛成し、他の面々も口々に賛同する。

「それにしても、よくもまあこれだけ狩れたよね。ティーンちゃんまだよ、まつたく」

ミーナがそう言つと、他の面々がいつせいに頷いた。異変が起きてから狩りの効率が悪くなつていては戦闘メインのプレイヤーなら誰もが知つていることで、それだけにこれほどの効率を叩きだせるティーンの『』に彼らは感謝しているのだ。

「じゃ、帰るっか」

リリヤがそう言つと一行は煌々と輝く冬の星空の下、マツマツの街へと夜の草原を歩き始めたのだった。

7話（後書き）

そういえば拍手設置しました。

少し中途半端になりました。早朝に次話を投稿しようと思こまや。

「おかしいな、引けないぞ」

細部にまでルーンが刻み込まれた『ディーンの弓』を握つて、ドリストが困惑した様子で言つた。

狩りからの帰り道、ドリストが『ディーンの弓』を試してみたいと言つたことがきっかけでその翌朝に弓の修練場でドリストに弓を貸すことになったのだ。

「少し貸してみてくれる?」

首を傾げるドリストから弓を受け取り、『ディーンは自分の弓』を構えた。そのまま練習用の矢を番え、的に狙いをつけて射る。

ろくに引き絞らずに射た矢は壁にかけられた的にめり込み、轟音が響き渡つた。

「引けるじゃないか。もういいかい試してみたら?」

弓に不具合がないことを確認し、『ディーンはドリストに弓を手渡した。

ドリストは渡された弓を握り、矢を番えて弦を引こうとするが、どれほど力を入れても弦が引けない。不可思議な事態に2人は混乱したが、少し経つてからドリストは原因を察した。

「そうか、熟練度制限が上がったのか」

強力な装備は、いくつか条件をクリアしなければ装備できないのがMWOの仕様だった。ルーンによって強力になつた長弓は装備制限が上がつたのだろうとドリストは考えたのだ。

「洋弓スキルでも和弓は装備できたはずだ。だとしたら……ドリスト、スキル熟練度いくつ？」

「異変前は121だった。だから、少なく見積もつてもそれ以上の熟練度が要求されるんだろうな」

ディーンの問い合わせにドリストが答えた。

「ディーンの和弓スキル熟練度は623だった。ということはこの弓の要求熟練度は122以上623以下ということになる、とディーンは結論を出した。

「鍛冶屋の鑑定スキルで武器情報は閲覧できたはずだ。異変後も鑑定スキルは普通に使えるらしいから、そこらへんの鍛冶屋に持ち込んで見てもらつのが手っ取り早いだらうな」

ディーンはドリストの言葉につなづき、弓を背負つて修練場を出た。ドリストはこの後剣の修練場に行くといつっていたので、ディーンとはここで別れることになる。

修練場を出たディーンは、防衛軍の本部へと向かう。今朝になつてからグスタフから手紙が届いて、本日の午後から本部にて会議を行うので来られたし、ということで呼び出されたのだ。手紙にはディーンの宿から本部までの詳細な道のりが記された地図が添付

されており、それを頼りにディニンはマシマホの街を歩いていた。

和洋の建築物が混在した独特的の街並みを歩いていると、ディニンは街角でプレイヤーがビル配りをしているの見つけた。彼がビルを一枚もらつて読んでみるとどうやら防衛軍が発行したものらしく、昨日見かけた高札に書かれていたことがより詳細に書かれている。裏面の編集者一覧というコーナーにグスタフの名前を見つけて、ディニンはあの若者のワーカーホリックぶりに呆れ返った。

今日のマシマホは陰氣な曇り空だ。今にも雨が降りだしそうな天気だからか、NPCも外出を控えている。ディニンは露天で唐傘を買つて巾着にしまい、急ぎ足で防衛軍本部へと向かつた。

防衛軍本部はリリヤの邸宅の3倍ほどの大きさの洋館だった。3階建ての豪奢なつくりで、門の前では選挙ボランティアよろしく2人のプレイヤーがビラを配っていた。ディニンが巾着から招待状を取り出して2人に見せると、守衛の役目もかねていたらしい彼らは恭しく礼をして、ディニンを中へと通した。

『』とコートを巾着にしまい、NPCに案内されて会議室へと歩く。高い天井からは洒落たデザインのシャンデリアが吊るされており、品のいい模様の絨毯は適度に柔らかい。廊下の各所には花が生けられた花瓶が置かれており、かぐわしい芳香がディニンを楽しませた。

NPCが会議室の重々しい扉を開けると、中から長身で体格のい

い男が進み出てきた。おそらく人間種族でアバターの設定年齢は40前後だろうとディーンは当たりをつけた。NPCが一礼して立ち去り、男は口を開いた。

「私はギルド サウザンナイツ のマスター、ヴォルテールだ。僭越ながら防衛軍の将軍を務めさせてもらつてる。名前を伺つてもいいかな？」

苦み走つた男前な顔から誠実そうな雰囲気がにじみ出でているその男は、礼儀正しく名乗つてからディーンに名前を尋ねた。ディーンは無愛想ながらもいやみなところがないヴォルテールに好感を持ち、礼儀正しく名乗り返した。

「『』兵隊長を務めさせていただくことになつた、ディーンと申します」

ヴォルテールはディーンの名前を聞くと小さくうなづき、言った。

「なるほど、君がディーン君か。話はグスタフから聞いている、入つてくれたまえ」

ヴォルテールが右手を差し出して、ディーンが握手に応じる。歴戦の戦士を思わせるがつちりとしたその手を握り、ディーンはヴォルテールを頼りがいのある男だと直感した。

「会議まではあと20分ほどある。親睦会の意味合いもかねて立食パーティの形式にしたので、ぜひ交友を広げてくれ。私は少し仕事があるので失礼させてもらう」

そう言つて、ヴォルテールは部屋から出て行つた。

部屋の中には50人ほどのプレイヤーがいて、それぞれが食事や会話を楽しんでいる様子だった。男性プレイヤーの数が圧倒的に多いが、中には女性プレイヤーもいる。ディニンは給仕からワインをもらい、カウンターに用意された料理からいくつかの中華料理をさらに載せて知り合いがないか探し始めた。

「ディニンさん、いらっしゃい！」

グラスと取り皿を片手にきょろきょろしていると、右後ろからディニンを呼ぶ声がした。彼が振り返ると、グスタフが手招きをしているのを見た。

「やあ、グスタフ」

ディニンが挨拶をして近づくと、グスタフと同じテーブルで談笑していた2人の男性プレイヤーがディニンに気づき、グラスと皿をテーブルに置いて挨拶してきた。

「ここにちは、ネクロマンサーのヒルトルです。ギルドナイツ・オブ・アーツのマスターをやっています」

「どうも、ギルド無所属のディニンと言います」

ヒルトル氏は瘦身のエルフで、学者然とした細面のプレイヤーだった。ふちなの眼鏡をかけており、知的な雰囲気を漂わせている。

「おや、君は確か……」

同じテーブルのもう一人の男性プレイヤーが、そう呟いて驚いた

ような顔でディーンを見た。ディーンが彼の方に顔を向けると、なんとその男性プレイヤーは以前街中でぶつかった紳士だった。その節は「迷惑をおかけしました」とディーンが謝ると、あの時は私もきつい口調でとがめて申し訳なった、と紳士は頭を下げた。

「ああ、自己紹介がまだだつたね。私は無所属の アルケミストでオストワルトという」

「僕は無所属の レンジャー で、ディーンと言います」

2人が握手を交わして微笑みあうと、グスタフが言った。

「先ほどどうかがつたことですが、ヒルトルさんとオストワルトさんは医者と化学者だったそうですよ、ディーンさん。お一人にはその知識と経験を生かして特別な仕事をしてもらおうと思っています」

「医者とはいっても、ストに参加してクビになつた解剖医だけどね」

私のギルドは一緒にストに参加した同僚や友人たちと立ち上げたんだ、とヒルトルは付け加えた。

「ストつていうと、8年前のあれですか？」

ディーンが聞き返した。

「ああ、僕は一応スト連合の役員だつたからね。訴訟に勝つたはいもののクビになつて、どこも雇つてくれないから高等遊民として過ごしていたんだ。幸い訴訟で何億円も手に入れたから、同僚と一緒に

緒にMWOを始めたのさ」

「ディーンたちが言つてるのは、ディーンがまだ高校生だつたころに起つた医師・看護師による大規模なストライキのことだ。とある大学病院で立て続けに7人も医師・看護師が過労死し、それをきっかけに全国規模で法律の改正を求めるストライキが展開され、世間を大いに賑わせた大事件である。過酷過ぎる労働環境におかれ医療従事者に同情する意見とストライキによつて十数人の患者が死亡したこと憤る意見とで国民が真つ二つにわかれ、マスクで連日のように議論が行われていたことをディーンは今でも覚えてゐる。

「ちなみに、今は魔法と医療技術を組み合わせて新しい治療法を研究しているよ。ここ数日はネカマ・ネナベの声が中の人準拠になつてゐるのを、声帯を手術して治す方法を研究しているね。ネクロマンサーの魔法で新鮮な死体を用意して、もともと外科医だった友人がオペの勘を取り戻している最中さ」

「この調子でいけば日本の医療水準なんてあつといつ間に追い抜けるだらうね、とうれしそうな顔で話すヒルトル。

「なるほど、やはり魔法使いの皆さんは早速応用を始めていますか」

「グスタフが呟くと、オストワルトが答える。

「私は 錬金 の魔法で化学物質や金属の生産を研究している最中ですな。周期表と元素記号を用いれば簡単に貴金属・宝石等が作れますぞ」

そう言つて、オストワルトは巾着から金属の塊を取り出し、テー

ブルの上に置いた。

「……やつて鉄の塊に呪文を唱え、原子核の構造をイメージしながら魔法を使うと……ほら、このとおり」

指揮棒型の杖を鉄の塊に突きつけ、オストワルトは呪文を唱えた。すると、金属は白く発光し始め、やがて一瞬だけカメラのフラッシュの「じ」と強く輝き……先ほどまでそこに鎮座していた金属は、金塊に変わっていた。

「純度99.9%の純金に変わるわけです。まさに鍊金術ですね」

突然の発光の原因が気になつたプレイヤーたちが、オストワルトが得意げに掲げた金塊へと目を向け、驚きに目を見張つている。

「鍊金の魔法は使えなくなつたはずでは……」

ディーンの隣では、ヒルトルが呆然とした顔でオストワルトの掲げる純金を眺めていた。

「鍊金が使えなくなつたというアルケミストたちは、おそらく化学をともに勉強してこなかつたのでしょう。金属の化学式と構造が理解できていれば、以前よりMP消費を抑えて鍊金が可能ですぞ」

咳払いをしてオストワルトが言うと、プレイヤーたちは興奮した面持ちで近くのものたちと話し始めた。グスタフははじめから知っていたようで、平然とした顔でワインに口をつけていた。

「これも、君の計画のうちなのか?」

ワイングラスを揺らして香りを嗅いでいるハイエルフの美少年に、
ディニンは尋ねた。

「ええ、人材のスカウトは組織作りには欠かせませんから」

「コリともせずに言い放ち、グスタフはワインを一気に飲み干した。

「ずいぶんとまた不味いワインだ。それはともかく、僕はそろそろ用事があるので失礼します。まもなく会議が始まるので、今のうちに食べたいものを食べておくといいですよ」

ワインに関してはグスタフに全面的に同意だつた。少なくともこれは客人に出していくものではないとディニンは考え、味わうことをせずにワインを飲み干した。彼はワインに詳しいわけではないが、それでもこの異様に口当たりの悪いワインは10人が飲めば10人とも不味いと断言するだろう、と顔をしかめた。

絡み付くような後味の悪さをごまかすために中華料理をかき込んでいると、やがて会議室の壁際に設置されていた舞台に、ヴォルテールが立ち、力強いバリトンで演説を始めた。

「諸君、今日は集まってくれてありがとう。私は防衛軍將軍の、ヴォルテールという。今回の集会は、われわれ防衛軍の人事の最終決定について、諸君に伝達し、賛成を得るためのものである」

部屋に集まつたプレイヤーたちは料理とグラスをテーブルに置き、静かにヴォルテールの話に聞き入つている。

「部隊編成及び防衛計画については、参謀のグスタフ君が発表する
グスタフ君、よろしく頼む」

ヴォルテールはそれだけ言って、演台から降りた。入れ替わりに赤いローブをまとったハイエルフの美少年が演台に立ち、話し始めた。

「はじめまして、防衛軍参謀のグスタフと申します。今回は防衛軍の部隊編成及び人事の決定案について皆さんにお知らせします」

グスタフのソプラノにはヴォルテールのような力強さはない。しかし彼の抑揚には不思議と人を惹きつけるものがあり、会議室に集まつた人々は物音ひとつ立てずにグスタフの話を聞こうとしていた。

「現在の防衛軍の参加人数は約1300人。防衛クエスト時の人数は最低でも1500人には届くでしょうから、1500人という人數をクエストに参加する人数だと仮定して話を進めます」

グスタフは資料の一つも持たず、会議室にいるプレイヤーたちの目を順々に見据えながら話し続ける。

「1500人のプレイヤー。これは、防衛クエストをクリアするには十分な人数でしょう。しかし、それは昔の話です。現在、プレイヤーは死んだら復活できませんし、モンスターの沸きは非常に不規則でつかみ所がありません。1500人をそろえれば勝てるなどというのは、非常に甘い見通しです」

静かな声で、しかし説得力に満ち溢れた声で、グスタフは説明を続ける。

「大前提として、マツマエの街にモンスターを侵入させないこととプレイヤーの死亡を避けること。この二つを目標に、大まかな方針を立てました。まず、モンスターの殲滅は魔法職と弓職が行います。仕様が大幅に変化したため、近接戦闘職がモンスターと接触した場合、思わぬ事故が起こる確率が非常に高いので、事故死を避けるためには仕方のないことです。これによりゲーム時代より殲滅速度は大幅に下がりますが、同時にプレイヤーの死亡率も大幅に下がります」

近接戦闘職は戦わないと聞いて一瞬だけ会議室はざわめきに包まれたが、グスタフが話し始めるとすぐにざわめきは収まり、再び会議室は静寂に包まれる。

「クエストの仕様が以前と同じだとすれば、モンスターたちは北から攻めてくるはずです。マツマエの4つの門のうち北門だけは開放し、街を囲む防壁の上と門のすぐ内側に魔法職と弓職を配置してモンスターを殲滅します。ほかの門には壁職と回復職を回し、モンスターの殲滅は行わずにひたすら門を守っていただきます。モンスターは朝に現れて日が暮れれば撤退しますから、壁職の方は3交代制で門の守護を行つてもらいます」

「クエストが朝から夕暮れまでなのはゲーム時代と同じだが、なぜその情報が正しいといえるんだ?」

グスタフがいつたん言葉を切ると、ティーンからはだいぶ離れた

テーブルの男性プレイヤーが質問した。

「藩主の許可を得て過去の資料を漁つていたときに見つけた情報です。街の住人にも確認を取りましたから確かな情報です」

納得しましたか、とグスタフが聞き、男は頷いた。

「基本的な戦略に関しては以上です。詳しいことはそれぞれの舞台の責任者と話し合つて詳細を決定します。ちなみに魔法職と弓職に関するですが、最も懸念されているのは矢やMP回復薬の枯渇です。そこで兵站に関するも新たに部隊を設置し、全体のアイテムの調整を行わせます」

「いいだろ？ それでは、人事の発表に移ってくれたまえ」

ヴォルテールが満足げに頷いて、話の続きを催促する。グスタフはヴォルテールに会釈し、再び聴衆に向き直つて話を始めた。

「設置する部隊は全部で八つ。防護部隊、遊撃部隊、攻撃魔法部隊、補助魔法部隊、回復魔法部隊、弓兵部隊、兵站部隊、参謀部隊です。それぞれ隊長はラインハルト氏、ナナマカド氏、くまばん氏、レイアーク氏、ローウェル氏、ディニン氏、リリヤ氏、そして僕です。副隊長については後に各部隊長に伝達するので、各部隊長からお聞きください」

リリヤの名前が呼ばれたことにディニンが驚くと、後ろから背中

をつつかれる。彼が驚いて振り向くと、案の定そこにはいたずらつぽい笑みを浮かべたリリヤが立っていた。

「いたなら言ひてくれればいいのに」

「さつきグスタフに聞いたばかりだからね。驚かそうと思つたんだ」

口を手に当てて顔だけで笑うリリヤにて、ディーンは肩をすくめた。

「では、それぞれの部隊についてまとめた資料をお配りします。わからないところがあれば僕に質問してください。それでは、隊長と副隊長は僕から話すことがあるので、奥の部屋へきていただけますか？ほかの皆さんには将軍からお話があるので、そのままでお待ちください」

そう言って、グスタフは演台を降りて奥の部屋へと入っていった。同時に、何人かのプレイヤーが資料を配り始める。

リリヤとともにグラスと皿を片付け、その途中で資料を受け取つてから、ディーンは奥の部屋へと入つていった。

拍手してくれたかたがた、ありがとうございます。暖かいメッセージに執筆意欲がわいてきます。

9話（前書き）

字数の調整のため少々短くなりました。すいません。

会議室より少々手狭なその部屋では、重厚な木製の円卓に16人のプレイヤーが集っていた。

ディーンはリリヤの隣の椅子にかけ、出されたコーヒーに口をつけた。コーヒーを飲まずに手持無沙汰にしているリリヤを見て、そういうえばコーヒーは駄目だと黙つていたな、と思い出す。

皆と同じように椅子に掛けたグスタフが紙の束をぱらぱらとめくつて話し始めた。

「では、ここに集まつた16人のプレイヤーのみなさんには今後3週間にわたつて防衛軍の中核となつていただきます。まずははじめに現在の兵力を具体的にまとめた資料を配るので、各自田を通じておいてください。言つまでもないことですが、この資料は極秘扱いでお願ひします」

グスタフが立ちあがり、一人一人に紙の束を渡していく。ディーンが資料を受け取つてちらりと田を通してみると、どうやら当田の配置と現在の兵数が書かれているようだつた。

「3週間の間に、それぞれの部隊で何度も顔合わせと訓練を行つておいてください。訓練の場所や方式についてもいくつか案をまとめておいたので、のちほど資料でご確認をお願いします」

「訓練つていうけど、どうやって段取りをつけるの？　何百人ものプレイヤーを集めるのは大変だと思うけど」

グスタフがいつたん言葉を切ると、すかさずリリヤが質問した。

「訓練の3日前に僕に知らせていただければなんとかできます。マツマエの街にも郵便システムはあるようなので、それを使います」

グスタフが説明し、リリヤは納得した顔になつて着席する。

「次に、部隊間での連携や連絡手段に関して説明をします。まず、…」

…

グスタフによる説明会は1時間あまりも続いた。彼の話術は見事で、配った資料をもとにテンポよく話を進めていき、頭の回転が速いほうではないディニンでも理解できるようなわかりやすい話し方だった。

「それでは、これで本日の説明を終わります。最後に各自に自己紹介をしてもらつて、締めくくろうと思います。ではディニンさんから時計回りで自己紹介をお願いします。名前、ジョブ、ギルド、ステ振りを教えてください」

グスタフがディニンに自己紹介を促し、ディニンは立ち上がりつた。大勢の前といふことで緊張したが、グスタフが説明の合間ににはさんだ小粋なジョークで場の空気はやわらかくなつっていたので滞りなく自己紹介をすませることができた。

自己紹介を終えたディニンがため息をついて着席すると、左隣のハーフ・オーガの男性プレイヤーが立ち上がり自己紹介始めた。

「ディーンは配られた羽ペンで資料の余白にプロフィールをメモしながら自己紹介に聞き入る。

ちょうど真向かいに座った男が立ち上がったとき、ディーンはなんともいえない不快感を感じた。目の前の男が自分に向ける視線がどうにも挑戦的な光を帶びており、どこか人を不快にさせるものがあつたからだ。吊り目で瘦身の男性エルフはなんとも聞き心地の悪い声で話し始めた。

「ギルド・ナイツオブラウンド の筆頭 アーチャー、ロッショ」といつ。傭兵隊の副隊長を務めることになったので、よろしく」

防衛軍將軍のヴォルテールと似た口調だったが、ディーンは彼の口上を聞いていよいよ嫌悪感を募らせた。ヴォルテールから感じた男らしさや貴祿がまったくといっていいほど感じられないでの、ただ不遜な態度をとつて大物ぶつてるようにしか見えないと彼は心中で目の前の男をこき下ろした。

その後も自己紹介は続いたが、その間ディーンは目の前の男からいやな視線を感じていた。粘着質で嫌味なその男へ目を向けると白々しく目をそらされたので、いつそう不快感が増す。リリヤは面食がるような目でディーンを眺めながらカップを口につけ、噴き出した。「ヒーだということを忘れていたのだ。

それを見て気分が和み、ディーンは少しリラックスして手元の資料に目を落とした。

「自己紹介ありがとうございました。これにて、本日の会議は終了

とおせでいただきまく

グスタフが言つと円卓に集つた面々は儀礼的に拍手し、立ち上がりうとした。しかし、ティーンの目の前の男、ロッショウの一言にぎょつとして座りなおす。

「参謀だかなんだか知らないけどよ、俺が副でビリの馬の骨とも知れねえそいつが隊長つてのは納得いかねえぞ」

あんまりといえはあんまりなロッショウの台詞に、ティーンは眉をひそめた。少なくとも『』に関してなら和洋を問わず自分が一番だとティーンは思つているし、目の前の男の雰囲気も気に入らなかつた。

「しかし、人選に関しては将軍と僕とで相談して決めたんです。いまさら文句を言われましても……」

「おーおい、どうこいつ基準で選んだんだ？　俺は大手ギルドの筆頭アーチャー、『イツは聞けば無所属だつていうじやねえか。フン！』

証明するグスタフがいつもの鋭い舌鋒をどこへやらしまいこみ、弱気な少年を装つていた。弱弱しいその様子に、部屋にいた者たちは同情の目を向ける。彼らはグスタフの頭の良さを認めていたが、その容姿や声変わり前のものと思われる高いソプラノからグスタフの年齢をかなり低く見積もつていたのだ。何人かのプレイヤーは口々シコに非難のまなざしを向けるが、ロッショウはそれに気づかずに因縁をつける。

「スキル熟練度や戦闘経験、プレイ年数なども考慮した結果なので……」

「熟練度お？ ハン、悪いが俺は5年も『』を使い続けてるんだ、熟練度で負けるつもりはないぜ。おいお前、熟練度いくつか言ってみろよ。俺は389だぜ」

つばを吐き散らしながらグスタフに言いがかりをつけていたその男は、その矛先をティニンに変えたようだつた。何が男をそこまで駆り立てるのかは知らないが、ティニンも相当腹が立つていたので大人気なく言い返す。

「『』スキルの熟練度？ 623だけど、何か？」

ティニンが皮肉っぽく言つと、男は『冗談だと思つたらしく、醜くゆがんだ顔をティニンに近づけてつばを吐きながら嫌味を言つてきた。

「わっしゃくにじゅうせん？ おいおい、見榮つ張りも大概にしろよ。いいから本当のことと言えつて」

「水を差すようで悪いけど、彼の熟練度は確かに623であつて よ。保証しよつ」

ティニンが男を殴りつけることを検討し始めたとき、横からリリヤの澄んだ声がした。

「お~お~い~ねーちゃん、アンタさつきから『マイシ』と仲良くなしてたみたいだけひょつとして『キテんのか？ それに、客観的な証拠つてやつがねんだから、アンタが何を言おうが説得力はないわけだ。もう少し頭使おうぜ、美人なんだからよ」

ロッ・シユの下卑た笑いに、リリヤの顔から表情が消える。この瞬間、部屋にロッ・シユの味方は誰もいなくなつた。

先ほどの澄んだ声とは似ても似つかない冷たい声で、リリヤは言い放つ。

「君みたいな下衆、なんでここにいるの？ 生きてるだけで迷惑だから死ねばいいよ、社会の底辺。言葉の端々から低学歴がにじみ出てるんだよ、ばーか。それとディーン、例の弓を出してみてこいつに引かせてみな。思つて、それで問題は解決する」

リリヤの毒舌に顔を引きつらせながら、ディーンは彼女の意図を理解して巾着から弓を取り出す。

つまり通常ではありえないほど強化されたこの弓は、ロッ・シユ程度の熟練度では扱えないだろうと彼らは踏んだのだ。リリヤは何度か行った実験の結果から、ディーンは一流の弓士としての直感からそのことを確信していた。

「おお……」

ディーンが巾着から青く光る弓を取り出すと、部屋のプレイヤーたちが思わず声を漏らす。それほどまでに弓は美しく、幻想的だった。

ロッ・シユはディーンが取り出した弓の美しさに一瞬だけほつけたよつの顔をしたが、次の瞬間弓を指差して笑い出した。

「おいおい、言うに事欠いて和弓かよ。そんな使えない武器で何ができるつてんだ」

ディーンは今からリリヤと結託していくの男を殺すことを真剣に考

え始めたが、グスタフが向けてくる強い視線が気になり、とりあえずロッショウに弓を引かせることにした。こんな男になど弓を触らせたくないが、ロッショウの悔しがる顔につばを吐きかける妄想をしながらディーンは弓を手渡そうとする。

「試算では、その『』を使うには約600の熟練度がいるはず。とりあえず引いてみろよ、引けなかつたら負けを認めて土下座しろ」

リリヤがそう言つと、ロッショウは馬鹿にした様子で鼻を鳴らした。

「ケツ、ハツタリかまそつたつて無駄だぜ。せいぜい吠え面かきな」

ディーンの手から弓をひつたぐるようにして奪い取り、ロッショウは乱暴な手つきで矢を取り出し、番えようとする。

が、大方の予想通り弦はぴくりともしなかった。ロッショウは真っ赤になつて力を込めるも、やはり弓を引くことはできない。息を切らした彼は癪癩を起こして弓を投げ捨て、ディーンに殴りかかる。ロッショウの拳が頬に当たると思った瞬間、リリヤが唱えた魔法によつてロッショウは体勢を崩した。その隙を逃さずディーンは全力でロッショウを殴り、和弓をひくために鍛えられていたSTRが遺憾なく発揮され、ロッショウは壁にたたきつけられ苦痛に呻いた。ずるずると床に伸びたロッショウにディーンがつばを吐きかけると、何人かのプレイヤーがまねをしてロッショウにつばを吐いた。その様に眉をひそめるプレイヤーもいたが、彼らとしてもロッショウの行動は弁護できるものではないので特に何も言わなかつた。

「ハツ、大口たたいてそれかよ。無様だな」

ディーンがそう吐き捨て、リリヤが唱えた呪文でロッショウは拘束された。

「どうやら、人選にミスがあつたようです。『兵隊の副隊長に関しては選考』をやり直すので、今日はこれにて解散してください」

すかさずグスタフが言い放った一言に、場は騒然となる。が、彼が身振りで退出を促すと肅々と部屋を出て行く。この短い時間でグスタフはそこまで信頼されるよつになつていた。

「ディーンさん、副隊長については後日宿に手紙を送ります。迷惑かけてどうもすいません」

地面に横たわって氣絶していたロッショウの顔を踏みつけたディーンは、グスタフの声に振り返つて答えた。部屋からはすでにリヤ以外は退出している。リリヤはロッショウの顔にインクでなにやら書いているらしく、復讐の悦びに官能的な笑みを浮かべていた。

「この男はどうするんだ?」

「実は軍の一部に試験的に治安維持を任せよつと思つていたところなので、この男は囚人一号といふことで用意した牢獄に入つてもらいます。罪状は適当にでつち上げられますし、治安維持部隊の設立は必須事項だつたんでいいカモが手に入りました。この男はあとで僕に暴力を振るつたことにしておくので、口裏を合わせてくださいね」

有無を言わせない笑顔でグスタフは言った。ディーンは面倒」とにかかわりあう気はなかつたので口裏を合わせる約束をして、満足

した様子のリリヤとともに部屋から出る。ロッシュの顔には黒インクでさまざまな放送禁止用語が書かれており、リリヤによるとそのインクはローンに用いるもので絶対に消えないのだとか。すつきりした2人はさわやかな笑顔で笑い合い、廊下でハイタッチした。

1-0話（前書き）

ついでたーはじめました。
m/#!/baenre_72 http://twitter.co

「ところで、このあと生産に使う素材なんかを買いにいくんだけど一緒にどう? 今日は外で夕食を食べるって言つてあるんだけど、どうにもひとりで外食というのはなれなくて……」

「ああ、僕でいいなら喜んで」

防衛軍の本部を出てから、リリヤが誘つてきた。ディニンとしても時間をもてあましめていたので喜んで賛同する。

刻印術士　はインクに魔力を込めて使うことが多いが、ルーンの種類によつては魔物の血を使うこともあるし、金属や木材に刻み込む際は専用の道具をそろえなければならない。リリヤによると道具はそろつているらしいが、どうにもサイズが合わないから買い換えるのだそうだ。

石畳の道をリリヤとディニンは肩を並べて歩く。2人とも身長は175cmに設定してあったので、頭の位置はぴったりとそろつていた。太陽は沈みつつあるが、しかしこまだ日暮れまで時間はある。2人はのんびりとした歩調で市場まで歩き、以前は入れなかつた店をひやかしながら買い物を楽しんだ。

ハイエルフはエルフの中でも貴族階級にある者ことを指すらしく、ディニンたちはマツマエの住人に貴族の姫様とその従者という扱いをされた。ディニンとしてはそういう扱いは新鮮で悪くなかつたし、リリヤはお姫様扱いされてまんざらでもない様子だ。

リリヤがインクや画材、彫刻刀などを大量に買い込み、ディニンは矢の生産素材を大量に購入する。防衛クエストではかなりの矢を消費するだろうと見込んで、リリヤに矢を強化してもらうことにし

たのだ。幸い、リリヤは快くディーンの頼みを引き受けてくれた。ミーナの装備の調整が優先だからあまり期待しないこと釘を刺されたが、ディーンは満足だった。

素材を買い終わったところで、リリヤが服を買わなければいけなかつたことを思い出した。ママ工の商店は夜遅くまでやっているので、服屋に入つて服を物色し始める。ディーンがアンダーウェアと革のコート、ズボンと上衣を買い終えても、リリヤの買い物は続いていた。女性の買い物に付き合つたことのないディーンは、うんざりする「ことなく新鮮な気分でリリヤの買い物を眺めていた。

リリヤはなかなかファッショニこだわるらしく、膨大な数の服を見てもなかなか満足できるものを見つけられないようだつた。戦闘に用いる魔術師のローブは水色のものを数点購入していたが、私服の選考にはだいぶ難航している様子だ。スカート類・ドレス類はすべて断り、女性用ズボンの中でもぴったりしたものは断つっていた。

店員と額をつき合わせて議論しながら服を選ぶ彼女の顔は、武具に刻むルーンを考えているときと同じ職人の顔だつた。何着も試着してはつき返し、あれこれと注文をつけてほかの品を漁る。女性の店員も気難しい密の要望にこたえるべく、いやな顔ひとつせずにリリヤと議論を交わしている。女店員はリリヤのような美人をコーディネートするのが好きらしく、ディーンの皿にはむしろリリヤと同じくらい楽しんでいるように見えた。

ようやく彼女らが服を選び終えたころには8時を過ぎていた。店の奥で店主と雑談していたディーンはリリヤに呼ばれて店を出て、食事の場所を探し始める。

「アキヤマが話していたけど、この先を少し行ったところに牛なべ屋があるらしい。行ってみない？」

「牛なべ屋？　いいね、そこに行こう」

ディーンの提案にリリヤが食いつき、2人はそのまま牛なべ屋へと向かった。夜のマツマエは昼とは比べ物にならないほど冷え込むので、何か温かいものを食べたかったのだ。

10分ほど歩くと、アキヤマの言っていた牛なべ屋が見つかった。2階建てのこじんまりとした建物に入り、コートを預けて中に入る。リリヤがハイエルフであることに気づいた女将によつて2階の座敷に通され、しんしんと雪の降り始めたマツマエを眺めながら牛を煮込み始めた。

「いやあ、仙台牛を食べながら雪景色を眺めるなんて、ちょっと前まではできない贅沢だね。やつぱりこっちに来てよかつたよ」

わりしたの染み込んだ霜降りを美味しそうに味わい、リリヤが言った。座敷は程よく暖まっており、雪景色を見ながら呑む酒は最高だとディーンは思った。

どれくらい時間がたつただろうか。すでに2人は満腹だったが、マツマエの雪景色を肴に一升瓶を2本も空にしていた。それでも酔いつぶれる様子がないのは、人間種族ではないからだろうか。2人ともほんのりと顔を赤くしているだけではろ酔い加減だ。

ディーンとリリヤは雪景色を眺めながら、ときおり一言一言の言

葉を交わす。このすばらしい夜景を前にしてペラペラと喋るほど彼らは無粋ではなかつたし、互いにそんな空気が心地よいと感じていた。

3本目の一升瓶を空にして、さすがに2人は立ち上がった。そろそろ口付が変わるし、いつまでも店に居座るのも悪いかと考えたのだ。

恭しく頭を下げる女将に金貨を十数枚渡し、目を丸くした女将を笑いながらリリヤは外へ出る。こんなに受け取れませんと恐縮する女将に、ならば傘を貸してくれと頼んでディニンは傘を借りた。雪はまだ降り続いており、石畳の上には雪が降り積もっていた。

ほかの客が借りていつたのか、牛なべ屋には傘は一本しかないようだつた。やむなく唐傘を一本だけ借りて、リリヤとディニンは肩が触れ合つほど近寄つて同じ傘の下マツマツ歩く。普段ならこんなことはしなかつただろうが、酔いが回つた2人はクスクスと笑い合つていた。

彼女の洋館までリリヤを送り、ディニンは唐傘を握り締めて自分の宿に向かう。とまらないかとも誘われたが、彼は宿の露天風呂に入つて降りしきる雪を眺めるのも風流だつと思い宿へと帰ることにしたのだ。

彼が宿へ帰ると女将はすでに寝たよつだつた。巾着から鍵を取り出し、部屋に入つて浴衣に着替える。足の長いエルフの体格に浴衣は似合わないが、ディニンはそんなことを気にする性格ではなかつ

た。彼は部屋の魔法式貯蔵庫に入っていた秘蔵の日本酒を取り出し、露天風呂に入りながら呑もうと考える。そういうサービスもこの宿ではやつているのだ。

ディーンは脱衣所で浴衣を脱ぎ、お盆に一式を載せて風呂に入る。彼が一通り体を洗つてから雪の積もった露天風呂に出ると、時間が遅いからか誰もいなかつた。

宿はマツマエの中でも小高い丘の上に位置していて、露天風呂からは街の全貌が見える。いい気分になりながら日本酒に口をつけ、気持ちのいいほてりを感じながら雪景色を楽しむ。半身を風呂から出しているおかげで、風呂に入りながら酒を飲んでもそれほど火照らないのだ。

30分ほど露天風呂からの景色を楽しむと、さすがにのぼせてきたのかディーンは風呂から上がった。面倒くさくなつて適当に浴衣を着て部屋まで戻り、彼は布団に倒れこんでそのまま寝付いたのだった。

翌朝、ディーンは女将が扉越しに呼ぶ声で目を覚ました。

「ディーン様、お客様がお見えですよー」

彼は寝覚めはいいほうだ。しかし、昨晩少し飲みすぎたせいでもかほんやりとしていた。のろのろとした仕草で浴衣を脱ぎ捨て、新しく購入した服を着る。

「どうしますー？ お密さん通していいですかー？」

「ああ、通していくだわー」

どうせ、こんな朝っぱらからたずねてくるのはアキヤマかドリストだらう。彼はそう思つて、顔も洗わずにぼけっとした顔で布団に寝そべつていた。もつとも、専用のツールによつて作られたエルフの外見によつて、ぼうつとしていても美男子だつたりするのだが、彼にはビリでもいい話である。

「おはようございます、あなたが弓兵隊長のトイーンさんでよろしいですか？」

彼の予想を裏切つて、後ろから聞こえてきたのは女性のものらしい、柔らかな声だつた。トイーンがぎょっとして振り向くと、そこには妙齡の女性が一人立つていた。尻尾が生えているわけでもなく、また耳も普通なので、どうやら人間種族らしい、と彼は推測した。あわてて身だしなみを整えて立ち上がり、トイーンは自己紹介をする。

「え、えっと、はい、僕が弓兵隊長のトイーンです。ビリも

「ユニークーション能力の低さと女性経験の無さが遺憾なく発揮され、トイーンは田の前の女性から田をそむけてどもりながら挨拶

をした 少なくとも、彼の目の前にいるプレイヤーは彼が親しくしていいるリリヤやミーナと違い、非常に女性的な体つきをしていたのである。どちらかといえば中世的で整った顔立ちのリリヤや子供らしいながらも凜とした顔立ちのミーナとは違い、この女性プレイヤーは可愛らしい顔をしているのだ。胸部に備えた巨大な母性の象徴もあいまつて、ディーンは彼女を直視できずにいた。

あまりにも初心な反応を見せたディーンにくべすりと笑い、そのプレイヤーは自己紹介をした。

「はじめまして、『兵隊の副隊長になる』ことになったカロリーヌです。挨拶に伺いました、師匠！」

「……師匠？」

ディーンは怪訝そうな顔で問い返した。彼はこのプレイヤーとあつた覚えは無かつたし、そもそも師匠と呼ばれるような心当たりは無かつた。

「いえ、昔いちどだけ野良パーティで一緒にさせていただいたことがあって、そのときからディーンさんを尊敬してるんです！ ゼひとも師匠と呼ばせてください！」

「えつ、えつと……」

突然の事態にディーンの思考は停止する。野良パーティを組んだ回数が多くて目の前の女性のことなど覚えていなかつたし、そもそも彼はこういう元気な女性が苦手なのだ。リリヤもミーナもどちらかといえば饒舌なほうだが、しかし彼女たちは黙るべきときには黙れるだけの分別がある。ディーンは目の前の女性にはどうやらそ

の分別がなさそつだと直感していた。

「照れなくていいんですって、師匠。あつそつだ、部屋片付けてね！ 隊長の生活の管理も副隊長の仕事のうちですから！」

どうやら田の前の女は僕に嫌がらせをしにきたようだ、とティーンは結論付けた。しかし彼の兎しい対人スキルでは角が立たないようく彼女を追い払う方法など思いつくわけもないし、ただ黙り込んで経過を眺めることしか彼にはできなかつた。

カロリーヌはお世辞にも手際がいいとはいえたかった。なにもない平坦な畠の上で転んだり、どこに何をしまえばいいのかわからずにおたおたと部屋中を駆け回ったり、その合間にやけになれなれしくティーンに話しかけてきたり……リリヤならもっと手際よくやるだろうな、というのが彼の感想だつた。

朝のさわやかな空気を静かに味わうのがここ数日のお楽しみだつたのに、と彼は恨めしく思いながら部屋の隅に立ち尽くす。彼の迷惑そうな表情に気づかないのか、いきなり押しかけてきた副隊長は部屋の片付けに精を出していた。善意からの行動のようだが、甲高い声が寝起きのティーンにはひどく不快だつた。

「……朝ごはん食べてくる」

ぱつりとつぶやいて、ため息をつきながらティーンは部屋を出た。カロリーヌはティーンが低血圧だとでも思ったのか、不機嫌さを隠そうともしない彼に向かつて甲高い声でいつてらっしゃいです、と

言つてのけた。彼女に背を向けたティーンは疲れた表情で首を振り、
気落ちしながら座敷へと向かつた。昨日の夜は最高だったのに田覚
めが最悪だなんてついてない、と嘆きながら。とぼとぼと廊下を歩
く彼の背中には、異変後で最大級の哀愁が漂つていた。

食事を終えて幾分か機嫌がよくなつた彼が部屋に戻ると、部屋は
酒浸しだった。

「なにこれ」

ティーンがあきれて言葉も出ない、といった様子でカロリーヌに
たずねた。カロリーヌは泣いていたらしく、田を拭いて俯きながら
答える。

「その、そこの貯蔵庫を掃除しようと頃つてお酒をどかしたら瓶が
割れちゃいまして……」

割れた瓶は沂川、金貨100枚以上はある貯蔵庫の中でもト
ップクラスに高価日本酒だつた。わざがにティーンも堪忍袋の底が
切れ、カロリーヌに言つた。

「君、僕に恨みでもあるの？ もうここから早く出でなよ」

怒つてこぬとこつせのぞれつこぬと形容したほうが的確
だらうその語調に、カロリーヌはとうとう泣き出しちまった。そ
の様子を見てティーンはこよこよ醒めた顔になる。

「すこません、悪氣は無かつたんですね……」

悪気がなければいいといつ問題じやないよね、といいたいのを「
うそでティーン」にめかみに青筋を立てた。

「……悪意が無いのはわかつたるから。片付けは僕がやつておくから、もう帰つていじよ」

ティーンがやつてくとカロローヌは涙を拭いて立ち上がり、無言で部屋を去り立とした。が。

「本当にすこしません！　お詫びし、明日の午前中、トートをかへ
ださこー。」

びつしてやうなる　ティーンがそこおつとした瞬間、すでに
カロリースは部屋から出た後だった。あまりにも唐突でわけのわ
らない展開にティーンは頭を抱え、呟いたのだった。

「どうしてうつた……」

1-0話（後書き）

波乱の予感

部屋を片付け、女将に頭を下げて掃除を頼んだディニンはアキヤマが住んでいるという地区に行くことにした。昨晩、リリヤからアキヤマに渡してくれと加工済みの刀を預かっていたことを思い出したのだ。長刀を巾着にしまい、身だしなみを整えてから彼は宿を出た。

アキヤマが住んでいる家屋はディニンの宿から歩いて30分ほどのところにある。橋をひとつ渡り、川沿いに歩いていれば見つかるそうだ。ディニンは地図を片手に、乾いた風の吹くマツマエの街を歩いている。

ここどころ、すれ違う住人たちが剣呑な目つきをしていると彼は感じていた。宿の女将は顔にこそ出さないものの、どこかプレイヤーたちに対して含みのある目を向けている。彼自身は身に覚えの無いことだが、おそらく同胞が何かやらかしたのだろうと彼は予想した。グスタフが治安維持部隊を設立するというようなことを言っていたのは何か事件があったからなのかもしれない、と彼は考えた。もつとも彼にとつてはどうでもいい話だし、大多数のプレイヤーにとってもNPCの態度が冷たくなるうが知つたことではなかつた。

すれ違うプレイヤーたちはほとんどが戦闘用の装備に身を固めており、パーティを組んで狩りに向かうようだった。注意深く狩れば死ぬことは無いとわかつた今、マツマエのプレイヤーたちは同胞に差をつけられまいと必死なのだ。レベルシステムやスキルシステムがどうなっているのかはわからないものの、技術の応用によつてプレイヤー間の差はますます開きやすくなつた。廃人にとってほかのプレイヤーにおいていかれることほど屈辱はないので、みな新し

い技術や戦闘方法を模索しているようだつた。

また、少数だがマツマエを旅立つて関東や関西を目指し始めたプレイヤーもいるらしい。命を賭けてまで遊びたくないという者たちだ。彼らのほとんどは10人以上のパーティを組み、より安全な地方を目指している。が、あくまでじく一部の慎重派に過ぎず、大半のプレイヤーは狩りや生産に精を出していくようだつた。

ディニンが街を歩いていると、橋を渡つて少し歩いたところにプレイヤーたちの行列ができるのが目に入った。興味を引かれて近づいてみると、どうやら先日ヒルトルが話していた研究が成功したらしく、「声帶手術 引き受けます おひとり様金貨150枚から」と書かれた看板が立つていた。ヒルトルたちのギルドが購入した大き目の武家屋敷の前にはこれでもかといふくらい美少女たちが並んでおり、そのすべてが低い男の声で会話をしていた。ちらほらと男性アバターも見かけるが、並んでいるプレイヤーのほとんどは美女・美少女たちだつた。MMOのダークサイドをまざまざと見せ付けられたディニンは、肩をすくめて苦笑いしながらアキヤマの家屋をめざして再び歩きはじめた。

川沿いを10分ほど歩くと、いかにも江戸時代の城下町ですといった風情の地区に着いた。マツマエの街では唯一洋風の建物がなく、木造の古びた建物が立ち並んでいる。伝統を受け継ぐ職人たちは、自分たちの街によそ者が移り住むことを嫌つたのだ。

地図を片手にアキヤマの家にたどり着き、引き戸をノックする。エルフの容貌が目立つか住人たちから視線を感じたが、ディニン

は視線を黙殺した。直ぐ対応できる自信など皆無だったからだ。

「はいはい、アキヤマでござる」

引き戸を開け、アキヤマが家屋から顔を出した。時代がかつた口調にディニンがぎょっとした顔をすると、アキヤマも驚いたようディニンの腕をつかんで家の中に引きずり込んだ。

「いつたいどうしたんだ、急に」

一階建ての木造の家屋は狭かつたが、アキヤマが少しばかり物を片付けると2人が向かい合って座つても狭苦しくない程度のスペースはできた。先ほどとはうつてかわって砕けた口調でアキヤマが問うと、ディニンは巾着から長刀を取り出して彼に手渡した。

「リリヤから頼まれてね、これを渡しに来たんだ」

「おお、かたじけない」

アキヤマはうれしそうな顔をして刀を受け取り、すつと鞘から抜き放った。

ルーンは刀の波紋に沿つように刻み込まれており、薄緑色の光を放っていた。アキヤマはため息をついて刀を撫でてから、名残惜しそうに鞘に刀を収めた。

「いや、ここの最近NPCの態度が冷たいでござるからなあ。かねてより浪人剣客といつものに憧れていたこともあって、NPCと話す

ときは浪人剣客のロールプレイをしていくのでござる」

なるほど、トーティーンは納得した。

「ところで、そこにある大量のつちわはなんなんだ？」

「ああ、これもロールプレイの一種で、浪々の身で生きていくためにつちわ貼りの内職をしているという設定なのでござるよ。生産スキルの関係で扇が作れるので、その応用でござる」

どうにも不自然な感の否めない話し方だが、アキヤマは大真面目である。トーティーンがおとなしく話を聞いてくれたことに嬉しくなったのか、彼は立て板に水と自分のこだわりを語り始めた。

「そもそも、浪人剣客というのは普段は口入れ屋なんかに出入りするものであって、実力を隠しながら生きるのが常道。やたらと腕を見せびらかしてやれ秘剣だの奥義だと御託を並べるような最近の時代小説は全然なってないでござる。こう、長屋のほかの住人に胡散臭い目で見られながら、怪しい爺さんの用心棒をしたり、あるいは賭場の用心棒を引き受けたり、そういうのが味わい深くていいんじござるよ。だいたい、浪人でありながら名剣を使うなどなにもわかつてない。父祖の代から受け継いできた無銘の業物、これがいいんだあつて……」

1時間あまりも蘊蓄を垂れ流した後、アキヤマはふと思いついたかのように言った。

「せうせう、今夜はドリスト殿とともに猪鍋を食べに行くで、」
よしければ「ディーン殿も」一緒にいかがか

「猪鍋？　いいな、ぜひとも食べてみたい」

「あいわかった、では7時にこの北にある橋の袂に集合で、」
「わざわざ

アキヤマと会食の約束をして、ディーンはいつたん自分の宿に戻ることにした。話を聞かれ続けて疲れていたし、昼食を食べたくなってきたのだ。

アキヤマの家を出て、橋を渡つて商店街を田指す。あそこには露店が立ち並んでいたので、何か軽いものを食べるつもりだ。

商店街の入り口で焼き芋を3つほど買い求め、息を吹きかけながら食べる。贅を尽くした高級な料理もいいものだが、こういう素朴な味わいもまたいいものだ、と彼は思った。

宿に戻り、露店で買い求めた版画をペラペラとめくついていたら、つ之間にから時をすぎていた。ディーンはあわてて身支度をして、

用心のために腰に直剣を吊るして外に出る。アキヤマから聞いた話では、どうやらプレイヤーがNPCを殺害する事件が起こつたらしくNPCたちは不信感を抱いているとのことだ。優秀な剣士であるドリストやアキヤマと合流すれば怖いものはないが、一人で外を歩くときは用心しなければならないだろうと彼は考えた。

買い求めた浮世絵眺めていた影響か色街に行きたい気持ちが強くなつてきただが、彼は童貞特有の「初めては恋人と」という夢を捨てきれず、まだ風俗に行く気はなれなかつた。アキヤマの話によれば魔法によつて性病は完全に予防されているらしいが、ディニンは初めてが商売女というのはなんとなく嫌だつたのだ。ドリストやアキヤマによればかなりの数のプレイヤーが通いつめているらしいが、ディニンはどうしても行く気にはなれなかつた。

狩りから帰つてきたらしいプレイヤーの集団と何度かすれ違ひながら、ディニンは待ち合わせ場所である橋を目指す。彼らのほとんどは既存のスキルや魔法の応用について熱心に議論しており、ディニンは大変そうだな、と同情の念を抱いた。マイナーな道を突き進んだ彼にとつて競争など無縁のものだが、メジャーなビルドや武器を選択した廃人たちは常に激しい競争に晒されているのだ。メジャージャンルのトップ層はMWが開始した10年前から毎日ログインし続けているような連中であり、そのプレイ時間がディニンの1・5倍に達するような猛者もいると彼は聞いたことがあつた。

防衛軍將軍のヴォルテールもそうした一人らしく、彼はエクストラソードスキル持ちでありしかも片手半剣のスキル熟練度は700を超えているらしい。その話をリリヤから聞いたときはまさに「魔神」と呼ばれるにふさわしい人間であるとディニンは感嘆したものだ。

しばらく歩き続けると橋の袂にドリストが立っているのが見えた。彼の黒い肌と白い髪は、個性的な風貌のものが多いプレイヤーたちの中でもとくに目立つのだ。ダークエルフはステータスの伸びこそいいものの、その容貌とNPC好感度の低さから不人気な種族だ。NPCからの好感度が低いおかげで受注できないクエストが多いので、廃人にはとくに受けが悪い。

「やあ、アキヤマはまだかい？」

「多分そろそろ来るだろ。それより南街での話、聞いたか？」

「ああ、NPC殺害の話か」

ディニンがドリストに声をかけると、彼は深刻な様子でたずねてきた。ディニンと向き直りながらも、警戒するかのような様子でちらちらと周りを見ている。

「警備隊の知り合いからまたまた聞いた話なんだけどな、どうやら下手人は捕縛されたみたいだ。けどそいつの共犯者のギルメンがまだ逃げるらしくて、NPCの役人とプレイヤーの警備隊が血眼になつて探し回つてるってうわさだ」

警備隊とは、グスタフが新たに設立した治安維持部隊の名称だ。発足してわずかな期間で成果を挙げるとは相当に優秀なようだ、とディニンは思った。

「そのギルドの名前はなんていうんだ？」

「ディーンが問うと、ドリストは答えた。

「ギルドは ラウンドテーブル っていう名前だ。どこかの鯖の大手ギルドだったみたいだが、以前から評判はよくなかったらしい。確か、ジョブごとに 筆頭 つていう制度を作つてたと聞いたな」

ディーンはドリストの言葉に引っ掛けを覚えたが、 ラウンドテーブル なるギルドの名前ははじめて聞くのでとくに気にしなかつた。

「まあ、むしろ今までやつこいつことが起きなかつたのが不思議だよな……」

ディーンが呟くと、ドリストは頷いた。VRMMOでは前時代的なMMORPGよりもマナーがよくなつてているという話は有名だが、しかしマナーが悪いプレイヤーがいなくなつたわけではなかつたのだ。VR技術が若者の倫理観を狂わせるという主張は十数年前から存在したが、どうやらその見解は正しかつたようだ、と2人は考えていた。現に2人はモンスターを殺すことに対する何の拒否感も感じていないし、快樂のためにNPCを殺害するようなプレイヤーたちだつて現れたのだ。

「おう、2人とも来てたのか」

ディーンとドリストが世間話を続けていると、ほどなくしてアキヤマが駆けてきた。紺色の着物に長刀と脇差を差し、笠をかぶっている。何も知らないプレイヤーに見せれば間違いなくNPCだと思つてしまつとうなその姿に、ディーンとドリストは小さく笑つた。

猪鍋屋に着くとアキヤマが仲居に金貨を握らせ、特等の座敷に案内してもらつた。今日は雪は降っていないようだが、座敷は落ち着いた雰囲気で心地よかつた。運ばれてきた猪鍋も非常に美味で、ディニンたちはいつもより饒舌になつていた。

3人は脂の乗つた猪肉を白米にのせ、息を吹きかけながら食べる。ところとやわらかい肉にだし汁が染み込んでおり、白米と一緒にほおばるとなんとも口かつた。肉の脂は濃厚でありながらしつこさがない、いぐりでも食べることができた。

「ところで、お前やん『』兵隊の隊長なんだろ？ どうなんだ、防衛軍は？」

酔いが回ってきたのか、アキヤマが酔っ払い特有の粘着質な態度で絡んできた。ディニンは酒癖の悪い友人に辟易としていたが、さらによいことを思い出して顔をしかめる。

「うーん、將軍とかほかの隊長さんたちはいい人なんだけれどなんていうか、自分のところの副隊長が微妙かもしれない」

ディニンが言つと、アキヤマとドリストは興味を持つたようだつた。

「ほほう、部下が微妙とな。詳しく聞かせてもらおうか

アキヤマが手元の焼酎を飲み干し、ディニンに顔を近づけてきた。酒臭いアキヤマを手で押しのけて、ディニンは愚痴り始める。

「まあ確かに可愛くはあるんだけどさ、なんというか全体的にどう
くさいしドジなんだよね。いちいち癪に障るし、空気読めないし、
だいたい僕は巨乳は嫌いなんだ。あの馬鹿でかい脂肪の塊を見る
と胸がむかむかする」

ディニンが心底いやそうな顔で語ると、アキヤマが口をむいて反論してきた。

「巨乳の魅力がわからないとはディニン、お前は人生の半分を損じてるぞ。だいたい、可愛い女の子が部下だなんてうらやましい話じゃないか。いちどりむか苦しい野郎と血なまぐさい毎日なんだ、爆発しろ」

ドリストがやれやれと頭を振つてため息をつく。彼はディニンに同情的なようで、何も言わずにディニンの肩をたたいた。

「おまけに迷惑かけたお詫びドリートしてあげるなんて言い出すし、なんでグスタフが彼女を選んだのか不思議でならないよ」

「巨乳ドジッ娘とデートの約束取り付けておいて不幸とは、ふてえ野郎だ。出合え、出合え！」

「によいよ本格的に酔いが回ってきたアキヤマをドリストが殴りつけ、横倒しになつたアキヤマはいびきをかいて寝始めた。

「まあ、一度会つただけじゃいろいろ勘違いしてるのかもしれない。とつあえず、一回だけデートしてみたらどうだ？ 駄目そうだったらグスタフ君に言つて変えてもらえばいいんだし、話を聞くくらこはしてあげてもいいんじゃないかな」

ドリストの言葉に、ディーンはあごに手を当てて考え込んだ。どうみち何か予定があるわけでもなかつたし、それも一興かもしれないと考える。アキヤマやドリストと楽しい時間をすごしたせいか、彼はだいぶ穏やかな気持ちになつていた。

「……まあ、とりあえずそうしてみるかな

ドリストは無言で頷いて酒盃を傾けた。ディーンも辛氣臭い話題は打ち切ることにして、近くにあるらしい賭博場の話を振る。眞面目なようで、ここで賭け事に目がないドリストはディーンの予想通り賭場のことは聞いていたようで、実際に行ってみてどうだったかを語り始める。すでに日付は変わっていたがその後も1時間、2人の語らいは続いたのだった。

11話（後書き）

感想返しがキツくなってきたので感想への返信が不定期になります。

1-2話（前書き）

忙しくて文章を書かなかつたら予想以上に筆が進まなくなつたでござる。

マツマHの空は暗い色の雲で覆われていた。カラスの泣き声で目を覚ましたティニンは、目を覚ますと同時に顔をしかめた。冬の乾いた空気はどこへやら、どうにもねつとりとして湿った空気だったからだ。

友人の助言に従つてカロリーヌとデートすることを決めたものの、彼は現在進行形で悩んでいる。デートしているところを知り合いで見られれば誤解されることは確実だし、ティニンとしてはカロリーヌと付き合っていると思われるのには迷惑でこそあれ得になるようなことは何もないのだ。

顔を洗つて普段着に着替え、座敷に朝食をとりに行く。やはりといふかなんというか、女将はプレイヤーに対しても何か含みのある目を向けていた。もっともティニンと同じ宿に泊まっているプレイヤーは基本的にマナーがいいプレイヤーたちだったので、彼女の警戒は日々薄まりつつあるように見えた。

『兵隊の訓練日程についての打ち合わせができるのが唯一の救いだつた。グスタフにもらつたスケジュール表を元にいくつか案を立てていてるので、それをチョックしてもらおう、』ティニンは考えている。先日の騒動を振り返るに彼女は優秀とは言いがたい人材なのだろうが、しかし彼の副官である事実は変わらない。グスタフに泣きついて副隊長を変えてもらつまでの間は丁寧に扱わないと不味い、と彼は思つてゐる。

朝食を終え、楊枝で歯を磨いてから部屋で「」の手入れをする。居留守を使って約束をすっぽかすことを夢想しながら、彼は作業を続ける。

「ちょひど」「」の手入れが終わつたころ、女将がディニンを呼ぶ声が聞こえた。

「お客さんが来てますよー」

「はい、こま行きまーす」

盛大にため息をついて、ディニンは立ち上がつた。用心のため腰に剣をくくりつけ、薄緑色のマントを羽織る。

彼がブーツを履いて宿の外に出ると、なぜだか妙に機嫌のよさそうなカロリーヌがいた。目障りな脂肪の塊に心の中で舌打ちし、彼は不機嫌な表情でたずねた。

「ところで」「兵隊の顔合わせと訓練の日程についてだけど、とりあえず4日後に全体集会を開こうと思つ」

挨拶の言葉もなしに仕事の話を始めた彼に、カロリーヌはぎょっとした顔をした。

「どのみち仕事の上で顔をあわせなければならぬなら、手短に済ませてしまおう」というのが彼の思惑だった。

「は、はい！　いいと思います！」

「訓練の場所、矢の補給、当田の配置等についてはすべて僕が決めるから君は口を出さないでくれ。それじゃ、訓練の場所に案内するから付いてきて」

実際には、グスタフから配られた資料にそれらのことばすべて書いてあった。彼がそんなことを言つたのは、無愛想に振舞つてあわよくばカロリーヌを遠ざけようとする一心からである。

「補給部隊の隊長とは親しいから、そつちの交渉も全部僕がやる。
いつにしても君は口を出さないでくれ」

「あの、それじゃあ私は何をすれば……」

「自分の仕事くらい自分で見つけてくれ

田を合わせらず、早足で田的めへと向かいながら冷たい口調で答える。

ディニンが田指しているのは街の防壁だ。グスタフによれば田は防壁の上に弓兵を配置するので、訓練もそこで行つてくれとのことだつた。

すれ違つてPFCたちに敵意を向けられているような気がして、ディニンは居心地の悪さを感じていた。頭上の暗雲や現在の状況もあいまつて、鬱屈とした気分になる。

マツマトの住民たちは決してディニンと田を合わせようとせず、それでいてなにやら含むものがあるような様子だった。彼らの煮え切らない態度に、ディニンはますます不快な気分になる。

ディニンの冷たい言葉に戸惑つているらしく、カロリーヌは黙つて彼の後ろを歩いていた。そんな彼女のことを頭から追いやり、ディニンはせかせかと歩く。今日は訓練の予定地を視察して解散するつもりだったし、矢の補給について話し合うためにリリヤをたずね

る必要があったからだ。

ディニンは、なぜ自分がこんなにも苛立っているのかうすうす分かりかけていた。リリヤやミーナと比較して、カロリーヌは外見も性格も彼の好みではないのだ。

そもそも、弓を引こうというのになぜ巨乳なのか、と彼は疑問に思っていた。脂肪の塊なんて、弓を引くのなら邪魔にしかならないではないか。

はっきり言つてしまえば、彼は巨乳は嫌いである。また、コミュニケーション能力の低さゆえか、積極的に押してくるタイプの女性も苦手だ。カロリーヌはいわば、ディニンのもつとも嫌いなタイプの女性なのである。

ただでさえディニンは苛立っているのに、いつの間に立ち直ったのかカロリーヌは執拗に話しかけてくる。仕事の話ならまだしも、どうでもいいようなプライベートの話ばかりだ。このまま宿に帰ってしまいたい衝動に駆られながらカロリーヌを黙殺し、巾着から資料を取り出して、それに没頭するふりを続けた。

もはや何がなんだか分からない、というのが今の彼の心情だ。わけのわからない理由で苦手な人間に付きまとわれ、しかも仕事上の関係のはずなのに仕事の話がほとんどでない。彼にとつては初対面なのに、あたかも以前からの知り合いであるかのようになれなれしくしてくる。野良パーティで一度一緒になったプレイヤーをいちいち覚えてるなど、彼にしてみれば気持ちが悪いとしか言いようがない。

必死に話題を振り続けるカロリーヌと、必死でそれを無視するデ

イーン。傍から見るとなんとも奇妙な図だが、2人は互いにあせつっていた。ディーンは早くこの苦行を終わらせようと、いつそう早足で歩き始める。

北門につくと、ディーンは衛兵に頼んで防壁の上に登らせてもらえるよう交渉した。口下手な彼の口上よりも数枚の金貨のほうがよほど効果があつたようだが、彼にとつては不愉快だった。

防壁の上にはちょっとしたスペースがあり、弓兵や魔法使いを配置できるようになっている。高さも十分にあるので、モンスターの矢や魔法はほとんど届かないだろう。グスタフの資料によれば、十数名の壁職を弓兵の盾代わりに配置するらしい。

高所恐怖症の人間がいなければいいが、と思いながら眼下の平原を見下ろすディーン。

弓兵隊の役目は、どちらかといえば面攻撃によるモンスターの殲滅が主だ。弓兵だけでは火力が心もとないが、魔法職が加われば物量も火力も十分だ。ディーン自身は敵方の魔術師や僧侶の狙撃に専念して、同時に指揮も取る。

もともと、防衛クエストに割く戦力としては十分すぎるのだ。近接のダメージディーラーが参加できないのは痛いが、こういったクエストでは面攻撃のできるアーチャーやレンジャー、魔法職の数が重要なのだ。12のサーバーのほとんどの廃人が集結していれば、たかが防衛クエストなんて楽勝だろう、といつのがディーンの見解である。

「じゃあ、用は済んだから今日はもう解散ね。用があれば連絡するから、宿にはあまり来ないでくれ

防壁の視察を済ませた後、ディーンは言った。相変わらず、カロリースと田をあわせよつとしない。

「あの、よろしければこの後いつしょに食事しませんか？」

「いや、僕はほかの人と約束があるから」

そういうて、ディーンはさつと背を向けて歩き出す。呆然とするカロリースを尻目に、彼は先ほどとは打って変わって軽やかな足取りで歩き始めた。

住民の中でも比較的裕福な者が住む通りを歩きながら、ディーンは珍しく考え方をしていた。

グスタフの口車に乗せられて『兵隊の隊長を引き受けたのはいいものの、やはり自分が人の上に立てる人間だとは思えない。早いところ副官を変えてもらわなければならない、と彼は思った。

腰にくぐりつけた剣は予想していた以上に重く、いつもより彼の歩みは遅い。剣を巾着にしまうことも考えたが、いまのマツマエの状況では丸腰で街を歩くのは不安だった。高いステータスのおかげで剣術の心得がなくても街の住民程度なら何とかなるが、厄介ごとはじめんである。

マツマエの住民たちはどうやら商人と職人が主なようで、農作物はマツマエ以南の村々から買い取っているようだった。ディーンにとっては関心がない話だが、グスタフの資料の中にそんなことが書かれていた。

ふと空を見ると、今にも雨が降り出しそうだった。

プレイヤーたちがこの世界に来てからは、まだ一度も雨は降っていない。そのせいか、ティーンはこの世界でも雨が降るところを忘れていた。

雨に降られてはかなわないと、ティーンは急ぎ足でリリヤの洋館へと向かった。

リリヤの屋敷に着くとこつものよつて老執事がどこからともなく現れ、門を開けた。

「ただいま、」担当者さまに取り次いできます。しばしお待ちください

老執事の言葉に頷き、ティーンは門をくぐったところ立ち止まつた。

腰の剣を巾着にしまつ。友人の家を訪れるのに剣を帯びるというのも失礼な気がしたし、そもそもティーンは剣を帯びるのは好きではなかつた。歩きづらいことこの上ないし、彼の剣術スキルではどんな名剣でも鈍器としか扱えないのだ。

しばらぐすると、老執事が戻ってきた。

「JR井川さんは地下の工房にいらっしゃいます。作業中のことで

工房を離れられないようですが、ぜひともお会いしたことがあります」

穎敏な態度でそつといった執事に軽く会釈して、ディーンは工房へ降りた。

地下への階段を降り、鋼鉄製の大きな扉を開ける。工房の中ではリリヤが机に向かってなにやら書き物をしているようだつた。扉から入ってきたディーンに背を向け、一心不乱に羽ペンを動かしている。

「やあ、よく来てくれた。けよひど話したいことがあつたんだ」

ディーンが扉を開ける音を聞いて、リリヤが椅子から立ち上がり、こちらを向いた。

彼女の心地のいい声を聞いて、ディーンは苛立ちや不安が解けていくを感じた。

リリヤの細く白い指先はインクに汚れている。机の上にはさまざま大きな金属板やカードが置いてあり、そのどれもがルーンを書き込まっているようだつた。魔力を封じ込めているのか、かすかに発光している。

机の上においてあつた布で指を拭きながら、リリヤは言った。

「ミーナの剣も加工が終わつたからね、物騒だから護身用にいくつか作つてみたんだ」

机の上においてあつたカードをリリヤは手にとつてディーンに見せた。薄い金属板にルーンを刻んだものらしく、大きさは一般的な

トランプとほぼ同じだ。

「それで、今日は何の用事だい？」

リリヤがたずねた。

「いや、『J』兵隊の矢の補給について聞いておいたつと思つてね。グスタフの資料では3万本ほど用意する予定だと書いてあつたけど、実際どうなの？」

「ああ、そのことね。知り合いの職人に聞いてみたけど、この納期なら余裕らしきよ。店売りの矢も使えるなら、10万でもいけると思つ」

リリヤは即答した。

「なるほど……」

どうやらリリヤは僕よりもよほど仕事をしてこるようだ、とディーンは思った。

「それで、君の用事はそれだけかい？」

リリヤが問いかけると、ディーンは頷く。いちいち家を訪ねてまで聞くことではなかつたかもしれないが、ディーンはなんとなクリヤの顔を見たかったのだ。

「それって、次の会議か何かでも聞けたんじゃないかな？　まあいいや、とにかく一つ頼みがあるんだけどきいてくれる？」

「実は、ミーナが所要で明日の夜まで帰つてこないんだ。いまはいろいろひと物騒だから、今日はうちに泊まつてもらいたいんだけど」
ディニンは迷惑に思われたのかと冷や汗をかいだが、リリヤはそんなディニンの心情に気づかずに続けた。

「実は、ミーナが所要で明日の夜まで帰つてこないんだ。いまはいろいろひと物騒だから、今日はうちに泊まつてもらいたいんだけど」「え？」
軽い口調でリリヤは言った。ディニンは彼女の頼み事の内容に驚き、戸惑いを隠せない表情で質問した。

「えっと、なんどよりもよって僕なんだ？ 女性プレイヤーはないの？」

「君のことは信用してるし、ほかの女性プレイヤーの知り合いとは連絡が取れないんだ。まさか屋敷が襲われるようなことはないだろうけど、用心はしなきゃいけないしね」

あくまで軽い調子でそういうのけたリリヤに、ディニンは複雑な心境だった。信頼してくれるのは嬉しいが、自分がそういう対象として見られていないのかと落ち込み、そして自分が落ち込んだことに驚く。

混乱しているディニンを見て、リリヤは楽しげな笑みを浮かべた。

「じゃあ、そういうことによじへ。この作業を終わらせたらお茶にするから、少し待つてくれ」

そう言つて、リリヤは再び机に向かつて作業に打ち始めた。

12話（後書き）

素人の趣味小説に「書くだけ無駄ですね」とか感想付けてる人がいて大爆笑した。

「そうは言つても、私は一介の知事に過ぎん。幕府との折衝など、とても……」

「ならば中央から担当者を呼んでください。できない」とではないでしょ?」「

のりりくらりと言い逃れようとするマツマエ知事に、グスタフは苛立ちを感じながら要求した。あくまで柔軟な表情を保ちながらも、心中で舌打ちする。好好爺然とした雰囲気を漂わせながらも、目の前の老人はなかなかに油断できない人物であるとグスタフは感じていた。かれこれ4時間も交渉を続けているが、思ったより譲歩を引き出せずにはいる。

マツマエの中央街、その中心にある藩庁の知事室で2人は話している。秘書が出したお茶はすっかり冷めていたが、談合はまだまだ終わりそうになかった。

「ともかく、街の防衛に当たってはそれなりの報酬を用意してもらわなければ困ります。モンスターとの戦いは慈善事業ではないのです」

「いままでは報酬を要求してきたことなどなかつたではないか。前例のないことを要求されても、すぐに対応はできかねる。それに、君の提示した金額はあまりにも大きすぎる。マツマエの財政はぎりぎりなんだ、慮ってくれ」

「ですから、先ほども申し上げた通り中央に連絡を取つて援助してもらえばいいだけの話ではないですか。それに、正当な報酬もないでは防衛軍の士気は下がります。下手をすれば、人数が揃わずに街への侵入を許すかもしれないのです」

士気が下がる、というのはグスタフのでまかせだ。倒したモンスターから剥ぎ取れる素材だけでも十分に採算は取れるし、プレイヤーたちのほとんどは一生遊んで暮らせるだけの財産を持つている。報酬がない程度で参加を取りやめるプレイヤーはいないだろうというのに、グスタフと将軍であるヴォルテールとの共通の見解だった。

それでも、グスタフの計画する統治機構の設置とその先の計画のために少しでも資産があつたほうがいい。ヴォルテールと彼のギルドメンバー、それに一部の防衛軍幹部からは計画についての支持と協力の約束は取り付けてある。人的資源が揃いつつある今、グスタフに必要なのは計画の実行のための資産だった。

「その気になれば、僕たちのほうで中央に接触することもできるのです。あなたの立場を慮つてこうして頼んでいるのですが、どうにも理解を得られないようですね」

正面から押しても効果はないようだと踏んだグスタフは、思い切って軽く脅迫してみることにした。対等な立場での交渉なら脅迫というのではなく、ほんの前回の知事よりは有利な立場にある。知事からの報酬というのはあくまでも資産集めの手段の一つでしかなく、ほかの手段も用意できないことはない。だが、知事としては街を守るにはグスタフに頼るしか道はないのだ。グスタフに頼らざるを得ない以上、知事はどうしてもグスタフの要求を跳ね除けることができずについ。

グスタフ以外の冒険者と接触しようにも、すでにプレイヤーの半は、防衛軍に参加している。いまとなつてはほかの冒険者集団に防衛を頼むことはできないし、そんなことをしたのが露見すればグスタフに悪い印象を与えることは確実だ。知事としてはできるだけ藩庁の予算は使いたくないが、政府に頼れば中央での己の評価が下がることは目に見えている。知事は好好爺然とした笑みを浮かべながらも、どうにかして厄介な要求をはぐらかす方法を考えていた。

知事が黙り込むと、グスタフは大げさにため息をついて壁の時計を確認した。今日一日は知事との交渉のために予定は入れていない。少しでも相手にプレッシャーを与えるための演技である。

仮に知事が逆上して藩庁を追い出されたとしても、防衛軍を握っているのはグスタフなのだ。資金が集まるのが早いに越したことはないが、かといって今すぐに集めなければいけないわけでもない。今回の交渉に失敗したとしても、彼が防衛軍を握っている以上マツマエ知事との交渉の機会はいくらもある。黙り込んだ知事の額には脂汗が浮かんでいるが、グスタフは苛立ちを隠しながらも涼しい顔をして座っている。

先に沈黙を破ったのは知事だった。フロックコートのポケットから取り出したハンカチで額の汗をぬぐい、苦々しい声でグスタフに告げる。

「わかった、中央に掛け合つてみよう。ただ、金額のほうはもう少しなんとかならないかね？」

知事の言葉を聞き、グスタフは頷いた。

「では、いのくらいで手を打ちましょう。」

巾着からペンと紙を取り出し、当初の要求金額より一割ほどまた数字を紙に書いて知事に見せる。

「……わかつた、中央との交渉次第だが、鋭意努力しよう。」

「お願いします。では、今田はこれにてお暇させていただきます。」

椅子から立ちあがり、一礼して知事室から出る。背後では知事が大きくため息をついていたが、グスタフは特に気にせず部屋を出た。

知事室を出て、藩庁の中を歩く。正面玄関へ行く途中、2階から1階へと降りる階段の踊り場で職員が声をかけてきた。

「グスタフさん、例の資料ですがようやく用意できました。今お渡しして大丈夫ですか？」

グスタフに声をかけてきたのは藩庁の勘定方の男で、名は中村といふ。瘦せ型で顔色が悪く、少々神経質すぎるきらいはあるものの優秀な官僚だ。

「ああ、もう揃えたんですか、流石です。見せてもらえますか？」

グスタフは中村をねぎらいながら、周囲に目を配りつつ中村から巻物を受け取った。中村がそんなミスを犯すとは思えないが、藩庁の人間に見られては面倒だ。

中村が差し出した巻物は、いわゆる裏帳簿というやつである。グスタフは中央に隠して藩庁の金庫に溜め込んでいる金貨の数を把握

することで知事の弱みを握り、さらに金貨を筆り取るつもりなのだ。この世界の公文書がどういうもののかはわからないが、少なくとも活字に田が慣れたグスタフにとって草書体で書かれた巻物は読みづらいことこの上なかつた。

この場に長居するのは禁物なのですばやく巻物を巾着にしまい、中村に十数枚の金貨を渡してその場を離れた。中村も心得たもので、金貨を受け取ると何事もなかつたかのような顔で職場へと戻つていつた。

グスタフの計画にはプレイヤーの知識だけでは補えない箇所がいくつも存在する。下町の職人たちの抱きこみも進めているが、中村のような優秀な官吏の引き抜きも彼の課題だつた。

現在マツマエにいるプレイヤーたちは、そのほとんどがフリーランサーである。会社や役所に勤めながら最前線までこられるほど甘いゲームではなかつたため、それなりに優秀な人材を集めた防衛軍の幹部でさえ管理職としての仕事はひどい有様だ。グスタフの要求水準を満たす仕事をしているのはリリヤとヒルトル、オストワルトの3人しかいない。ヴォルテールは持ち前のカリスマ性と指揮能力をいかし調査団を率いてモンスターの生態調査を行つてゐるが、書類仕事の出来は田も当たれない。昨日の夜にマツマエに帰つてきたようなので生態調査について報告書を書いてもらう予定だが、いつたいどれだけかかることだろうか、ヒグスタフはため息をついた。彼に言わせれば、マツマエのプレイヤーたちは事務処理や文書作成が遅すぎてまるで話にならない。

藩庁を出ると、マツマエの空は暗い色の雲に覆われていた。空気が湿り気をおびており、ハイエルフ特有の淡い色の髪が額にはりつく。グスタフは時間を見つけて髪を切りにいくことを心に決め、防

衛軍の本部に帰るため歩きだした。

伝手をたどって調べたところ、現在マジマエにはおよそ4000人前後のプレイヤーがいるようだ。そのうち、今の段階で防衛軍に参加しているプレイヤーはおよそ1400人ほど。この調子で参加者が増え続けば防衛クエストは楽勝だとほとんどのプレイヤーが思っているようだが、グスタフは油断する気にはなれなかつた。

なにせ、この世界では一度死ねば蘇生することはかなわない。蘇生呪文は存在するが有効かどうかは検証されておらず、そのためには事故死の可能性が高いAGI型の近接ダメージディーラーは防衛に参加させるわけには行かない。本人の意志の問題ではなく、防衛クエストで死人が出てしまえば防衛軍の信用は大きく揺らぐし、そうなればグスタフの計画に支障をきたす。だが、従来の防衛クエストでは魔法職と近接ダメージディーラーが殲滅速度を保っていたのも事実だ。全サーバーのプレイヤーが同じ世界に転移したことで魔法職の数が増えたとはいえ、近接戦闘職不在で防衛をこなすのはかなり厳しいだろうとグスタフは予想していた。

本部に帰ると、じつと疲れが湧き出してきた。目の奥がじくりと痛み、視界が霞む。ここ数日はほとんど寝てないので、身体能力の高いハイエルフの体にも相当な疲れが蓄積している。いくつかの懸案事項を整理したらまとまつた睡眠をとることにして、グスタフは目を揉みほぐしながら本部の自室へと足を運んだ。

本部内ですれ違うプレイヤーたちは、ほとんどが防衛軍幹部の所属するギルドから引き抜いてきた人材だ。グスタフはギルドに所属せずにつれていったので、幹部の中でも特に顔の広い面々に頼ん

で人材を集めている。

グスタフの部屋は將軍であるボルテールの部屋の隣にある。本棚には本と巻物がならんでおり、重厚な木の机の上には書類が乱雑に積まれていた。グスタフは常日頃から書類を整頓しておくようにしているので、机の上に乱暴に積まれているのは彼が出かけている間にほかの職員が運んできた書類だらう。

中村から受け取った巻物を鍵付きの引き出しにしまい、机の上に積まれた30ほどの中村から書類を手早く整理していく。椅子に腰掛け優先順位の高いものから書類を読み始め、手元の資料と照合したり帳面にメモを取つたりしながら書類にサインする。広報やビラの原稿も書いているため、まだペンだこができるいいのが不思議だつた。

食糧事情についての書類を読んで、サインをしてから決済済みの書類箱に入れておく。あと一時間ほどもすれば職員の誰かがやってきて、決済済みの書類を担当者へと返却する手はずになつてゐる。コピー機がないため、書類の要旨を自分でまとめなければいけないのが面倒だつた。

ネクロマンサーの魔法の応用範囲についての詳細なレポート珍しく書類としての形式が整つていて、文章も読みやすい。執筆者がヒルトルであることを確認して、グスタフは流石に元医者は仕事が違うと嘆息した。に目を通していると、開け放つていて扉からヴォルテールが入ってきた。相変わらず生真面目な顔をしているが、どこか眠たげだ。

「やあ、將軍じゃないですか。この書類を片付けたら起こそうと思つていたところです、ちょうど良かつた」

そう言つて、グスタフは書類にしおりを挟んで脇に寄せた。書類の要旨をまとめていたものとは別の帳面を取り出し、インクに羽ペンを浸す。

「ああ、すまなかつた。できれば帰還してからすぐには報告すべきだつたのだろうが、あまりにも疲れていたのでな」

ヴォルテールは申しわけなさそうな口調でそう言つと、来客用の椅子に腰掛けた。椅子はマツマエの生産系プレイヤーが作ったもので、華奢な外見ながら結構な頑丈さを備えている。実際、大柄なヴォルテールが腰掛けても軋みすらしなかつた。

「モンスターと戦つていて最初に思つたのは、コツさえつかめば以前より簡単に倒せるということだ。たとえば、人型のモンスターなら剣で心臓を突き刺すか首をはねるかすれば簡単に倒せる」

ヴォルテールは深みのある声で語り始めた。

「ほとんどのプレイヤーは平氣だつたが、中には耐性がないやつがいて、だいたいは食べたものを戻していたな。まあ、何回か戦つたら慣れたみたいだから問題はないだろう。防衛クエストでは遠距離攻撃が中心になるようだし、本番でも問題はないと思われる」

「死体の処理は？ 以前は死体が残らなかつたから問題なかつたようですが、以前と同じペースの沸き立つた場合は死体の処理が大変なことになるのでは？」

ヴォルテールの話を帳面に書き込みながら、グスタフが質問した。

「放つておけば消えないが、ネクロマンサーの魔法で操作すれば有効活用できるようだつたし、彼らが使い終われば以前と同じように溶けて消えた。まだ実験が必要だが、それほど厄介な問題ではないだろう」「うう

ヴォルテールの言葉を聞くと、グスタフは領いてから帳面にペンを走らせた。

「次にモンスターの沸きについてだが、やはり以前よりは少なくなつていいようだ……」

ヴォルテールが口頭での報告を終えて部屋から出て行くと、グスタフは帳面を机の引き出しにしました。

仕事を再開しようと書類に手を伸ばした瞬間、扉がノックされた。

「開いてます、どうぞお入りください」

書類に伸ばしかけた手を引つ込め、グスタフは来客に声をかけた。どうせ書類を回収しに来た職員だろうと思い、決済済みの書類箱を手元に引き寄せた彼は、部屋に入ってきた人物を見て目を丸くした。

「やあ、少し時間を取れるかい？」

気さくに声をかけてきたのは、グスタフ自らがその頭脳と人脈を

買つて兵站部隊の隊長に任命した女性プレイヤー、リリヤだった。

リリヤはいつものみに快活な笑いを浮かべながら、田は笑っていない。どうやら彼女が怒つていいるらしいと看破したグスタフは、彼女を怒らせた元凶であるうる兵隊の人事についてのいざこざを思い出し、面倒くさいことになつたと小さくため息をついた。

1-3話（後書き）

主人公の性格がブレているのではないかという指摘を多数いただきましたが、それはあれです。コミュ障は相手によつて激しく態度を変えるんです。その辺の描写が不足していたことは確かなので、順次修正しようと思います。

グスタフの執務室に入ってきたリリヤは後ろ手に扉を閉めた。

「これは驚きました。僕ほどではないにせよ、あなたもなかなかに忙しい身だと思っていたのですが」

兵站部隊の長であるリリヤは、防衛軍の物資の補給について取りまとめる立場にある。当然のことながらやるべきことは多く、わざわざ本部に来てまでグスタフと会うことなど、通常ではありえない。彼女の担当する職務についてグスタフは全権を委任しているし、仕事の話なら書簡をやり取りすれば済むことだ。グスタフに言わせればほとんどの防衛軍幹部は無能だが、彼女は唯一といつていいほどの例外だ。グスタフはその有能さを警戒して計画の存在を彼女に教えていないが、見破られている可能性も十分にあると踏んでいた。

「すべての仕事を自分で行う必要はないし、ありがたいことに親切な友人たちが仕事を助けてくれる。そのおかげで、こうして君と直談判できるというわけさ」

口元に薄い笑みを浮かべて、リリヤが言った。皮肉な笑みでなく一見人当たりのいい笑顔に見えるが、彼女の水色の瞳は笑っていないかった。

「ミーナさん、でしたっけ？ エクストラソードスキル 使いでしたよね、確か」

「手伝ってくれるのは彼女だけじゃないし、君の『友人』と同じような伝手を持っているのさ」

リリヤは友人、といつ言葉を強調した。その言葉がグスタフ独自の情報網のことを探るらしいと察し、思わず彼は顔色を変えそうになつた。

「なるほど、どうやらあなたの友人と僕の友人はかなり似ているようですね。たとえば、耳が早くて懐の暖かい相手が好きななところなどは、ずいぶんと似通つてゐるようです」

この言葉はかなり危険な賭けだつた。おそらく、リリヤはグスタフがマツマエの市民や役人に金をつかませて情報を集めていることを知つてゐる。そして、彼女も同じよつにして情報を集めているのだろう、とグスタフは考えた。この世界の住人を金づくで使つてゐるプレイヤーがほかにもいるということは前々から聞いていたし、彼女もそうだつたのだろう。グスタフの問いを否定したところで、彼がその気になれば真実を確かめることはたやすい。リリヤはそのことを理解していたし、グスタフの問ひに正直に答えざるを得ないことも理解した。すぐにばれる嘘をつけば、自分の立場を悪くするだけだ。

「ああ、確かにそうかもね」

素つ氣なく肯定すると、リリヤはそれきり口を閉じた。グスタフのような油断ならない人間の前では、軽い気持ちで言つた一言が命取りになることは珍しくない。自然と、口数は少なくなる。

二人の視線が交錯し、互いに探るような目つきになつた。

「……ですか。ところで、そろそろおかげになつてはいかがですか？ 必要なら屋敷のものを呼んで、コートも預かりますよ」

「いや、遠慮しておいで」

グスタフは今、執務室の椅子に座っている。対するリリヤはグスタフの机の前に立つており、彼を見下ろしている。話し合いの際に相手に見下されることはプレッシャーを受けるといつことは有名な話だが、そのことを知つてか知らずか、リリヤは座る気はないようだつた。

「ともかく、こんなところまでわざわざいらっしゃるとはよほど大事な用事があるようです。まずは、忙しいにもかかわらず僕のようなきな臭い人間に会いに来た理由を伺いましょう」

グスタフは目の前の女性プレイヤーについてのひとつあたりの情報を頭の中で点検し、整理した。トップクラスの熟練度を誇る 刻印術士 であること、ギルドに所属していないにもかかわらず高レベルの生産職プレイヤーに顔が広いこと、基本的に浅く広い付き合いを好むこと、プレイヤーの中でも特に美しい容姿でありながら浮いた話がまったくないことや、リアルでの彼女が抱える深刻な問題についてのいくつかの推測。さまざまな情報が一瞬にして整理され、グスタフはリリヤに視線を向けた。

「君の言うとおり、重大な用件があつてやつてきた。時間をとるのは容易ではなかつたけど、そんなことは問題にならないくらい、重要な用件だ」

真剣な表情でリリヤは言い切つた。

「あなたにとつて、彼はよほど大切な人物らしい」

グスタフが言った。

リリヤとグスタフの視線が交わる。静寂が流れた。

「否定はしないさ」

沈黙を破つたのはリリヤだった。落ち着いているかのように見えるが、声にはかすかな動搖があらわれていた。

「僕の見る限り、それほど魅力的な人間ではないようですが」

「彼の人間性に欠点があるのは分かつていて。でも、だからこそ彼の見せる一途な情熱に惹かれるのかもしねない」

リリヤの声からは、先ほどの動搖は消え去っていた。

「噂で聞いたに過ぎませんが、今までそういう感情とは無縁の人間だったとか。彼とは長い付き合いでしょうし、さまざまな情報を集約すると、きっかけはそのアバターが自分になつたこと。合つてますか?」

グスタフは自らの推測を裏付けるため、リリヤに尋ねた。

「それを聞いてどうするんだ。君には関係ないし、個人的なことだ。詮索されたくは、ない」

リリヤの目が泳いだ。どうやら凶星らしい、とグスタフは思った。グスタフの推測が正しければ、彼女はおそらく何らかの障礙があつて恋愛など考えられない状況だつたのだろう。収集した情報と照らし合わせれば、そう考えざるを得ない。そして、彼女が最近になつてそういう感情を抱き始めたということは、その障碍は克服され

たと見ていい。それだけの情報でも、グスタフにとっては大きな価値がある。

「これは失礼しました。それで、用件は弓兵隊の人事について、ですか？」

湧き上がる笑みを押し殺しながら、彼は至極真面目な顔でリリヤに問いかけた。

「明らかに適切ではない人事だ。射手としての技能は随一だけど、巔原田に見てもリーダーに向いた人間だとは思えない。いったい、何を考えているんだ？」

「あなたに話したことはありませんでしたね。他言しないでくれるなら、彼について悪いようにはしないと誓いましょう」

「うまく立ち回れば、リリヤを仲間に引き込めるかもしれないといふことにグスタフは気づいた。彼女に計画について話す危険と、彼女を味方に引き込める利益を秤にかける。

「つまり、どうこうこと？」

「僕が防衛軍を組織した本来の目的と、現在進行形で推進している計画について話すことです」

「わかった。他言はしない、聞かせてくれ」

リリヤの探るような目つきは変わらない。だが、彼女の目の奥に一瞬だけ好奇心が輝いたのを、グスタフは見逃さなかつた。

「彼が隊長に向かないのは分かった上での人事です。ほかの部隊には適任者が見つかりましたが、弓兵隊だけは適任者が見つからなかつた。そこで、僕の計画のためにそれを利用することにしたのです」

落ち着いた口調で、グスタフは語り始めた。リリヤは黙つている。

「われわれ防衛軍は参加者の人数だけを見れば、充分な戦力を確保できています」

「実質的な戦力は回復職と魔法職、アーチャーだけじゃないか。本当に大丈夫なのか？」

「近接ダメージディーラーを出さないというのは重要な条件ですが、しかしクエストの達成が危うくなれば彼らを導入することもあります。將軍の、ヴォルテールと話しあったところ、市民の命を最優先にするべきだ、といふことになりましたから。これについては次の会合で話し合います」

誠実な表情でグスタフは答えた。リリヤは黙つて頷き、話の続きを促す。

「そもそも、以前から防衛クエストは各人が好き勝手に暴れるだけでした。クエスト中はデスペナも緩和されていましたし、パーティ単位で行動するプレイヤーすら稀だつたんです。つまり、人数が充分に確保できていれば本来は指揮官など必要ないということです。防衛軍の幹部は、クエストの開始や現状を告知する、本来は運営のものであるはずの役目を担つていて、と僕は考えています」

「なるほど、運営のアナウンスがないこの世界ではクエストが始まつてもそれを察知できないプレイヤーのほうが多いということか」

リリヤが得心顔で頷いた。

「そういうことです。しかし、考えてみてください。各人が好き勝手に暴れるだけで殲滅が完了するなら、優秀な指揮官がプレイヤーたちをまとめあげれば殲滅速度は従来よりはるかに早くなるのではありますか？」

グスタッフが問いかけた。

「確かにそうかもしない。つまり、君がやううとしているのは……」

「ええ、多分あなたの考へてている通りです。僕は『ティーン』さんが隊長として上手く働けないとこのことを利用して、最終的には『兵隊』の指揮権を剥奪し、僕が指揮を行おうと考えています」

なんでもないことのように、グスタッフは言った。

「なるほど、君ならば彼よりは上手く指揮ができるだらうな。しかし、彼の立場とか世間体のことは考へてないのか？」

「彼の面子が僕にとつてなんだというのですか？」

リリヤの質問に、グスタッフは問い合わせ返した。

「まあ、それについてはあなたの協力次第では考へてみますよ。とりあえず、この件については後で話しましょう。まず、僕の計画について話さなければならぬでしようから」

リリヤが黙つてゐるのを見て、グスタフは続けた。

「僕の目的は、大雑把に言えば『建国』です。最終目標としては、エゾの地を魔物から奪還し、そこにプレイヤーを中心とした国を作ります」

グスタフは言い切つた。リリヤは驚いた顔をして、グスタフに質問する。

「あまりにも大きすぎる話だ。だいたい、エゾ島にどんなモンスターがいるのかすらわからないんだから、無謀に過ぎる」

「ええ、これはあくまで最終目標でしかありませんから。当面の僕の目標は、自治組織の設立と中央政府との交渉です。マツマエの街をプレイヤーの治める街として幕府に認めてもらいつもりです」

「防衛クエストでプレイヤーの力を測ると同時に非プレイヤーに力を見せつけ、彼らと交渉するつもりなのか。しかし、自治組織の設立はそう上手くいくのか？」

「ええ、組織の設立については既にプレイヤーたちの間でも噂になつてゐるはずです。防衛軍幹部の中でも、大手のギルドのリーダーには既に計画について賛同を得ています。それと防衛軍の広報を通じてそれとなく宣伝を行つていたりもするので、今の所は順調です」

グスタフは一息に話した。

「防衛クエスト終了後、防衛軍が主催するという形で2回の『選挙』

を行います。自治組織の設立に賛成するかどうかを問う選挙と、自治組織の議員を選ぶための選挙です。僕と大手ギルドのマスターがこれに立候補し、最初の議会を作るつもりです

「そんな計画が上手くいくのか？　あまりにも都合が良すぎるように戸惑ひけど」

リリヤが尋ねると、グスタフは薄く微笑んで答えた。

「上手くいくという確信はありませんが、あなたの協力が得られれば上手くいく確率は上がります」

「どういって？」

「現在のマツマツのプレイヤーたちは、心の奥では不安を抱えています」

グスタフは話出した。

「今の生活を楽しんでいるプレイヤーも多いでしょうが、今までと全く違う環境に放り込まれて不安にならない人間などいるはずがないません。それに、現実世界と違つて警察機構も統治機構も、マスクミスら存在しないというのは現代人にとつてかなりストレスを感じる環境でしょう。所属欲求という言葉がありますが、現在のマツマツのプレイヤーはそれを感じているでしょう」

グスタフの長広舌はなおも続く。

「現実世界では日本という国に所属し、家族の一員であり、職場の一員であつたかもしません。しかし、この世界では彼らは何処に

も所属せず、所属していたとしてもギルドという小数の集まりでしかありません。防衛軍の参加者は日に日に増えていますが、これはどこかに所属していたいと考えるプレイヤーが大勢いるためだと考えています。防衛軍に参加する1500人以上の人間が皆、市民を助けたいというお人よしであるはずはありませんから」

リリヤは時々頷きながら、興味深げな顔でグスタフの話を聞いていた。

「さらに、決まった土地に住んでいるプレイヤーもかなり少なはずです。自分の家を持つていらないというのは、案外大きなストレスになるものです。現在のマツマエには、自分の居場所を見つけられないプレイヤーが大勢いるものだと僕は確信しています」

「なるほど、『どこかに所属したい』というプレイヤーたちが大多数なら、プレイヤーたちを纏め上げる組織の設立は歓迎されるはずだと、そういうことか」

「理解が早くて助かります」

グスタフは肯定した。

「君の話はよくわかつたけど、協力というのは具体的に何をすればいいんだ？」

「ディーンさんの面子を尊重した措置をとる代わりに、あなたにはいくつかの生産系ギルドの長から自治組織の設立について約束を取り付けてください。僕が出向きたいのですが、忙しくてなかなか機会が無いんです。それに、あなたは生産系プレイヤーの間ではかなり名前が通っているでしょうから」

グスタフが要求を述べると、リリヤは即答した。

「わかった。協力しよううじやないか」

リリヤが右手を差し出すと、グスタフは握手に応じた。

「では、ディーンさんの件はお任せ下さい」

「わかった。じゃあ、今日は失礼するよ」

リリヤはそう言って、グスタフの部屋を出て行った。扉を開けて部屋の外に出た彼女は、後ろ手に扉を閉めようと/or>

「ああ、扉は開けて置いてください。風通しは良くしたいので」

グスタフがそう言つと、リリヤは扉にかけていた手を離してその場から立ち去つた。

客人が立ち去つた部屋で、グスタフは書類仕事を再開しながらつぶやいた。

「あんな美人に慕われるなんて、つくづくディーンさんが羨ましいな。そもそも僕にも出会いがあつていいはずだ」

そう呟いてため息をつくと、グスタフは書類仕事を再開した。

リリヤがグスタフに直談判している頃、ディニンはアキヤマとドリストとともにマツマヒの街を歩いていた。アキヤマとドリストは街で借りた馬を引いている。

「しかし、本当に出るのか？ 湧きが少なくなってるし、今までどおりの時間に湧くかどうかはわからない」と思うんだけど

ディニンがそういふと、アキヤマは自信満々で答えた。

「大丈夫だつて。知り合いが何回か見かけたらしいし、同じ場所で粘つてれば見つかるだろ」

彼らは今、マツマ工平原に隣接する砂浜に出るという時間湧き^mo^bの討伐に向つてゐる。強いことは強いが、一体ずつしか出現しないといふのでかなり面倒^mo^bだ。ドロップする品もなかなかに高く売れるので、アキヤマが知り合いでから聞いた噂がきっかけに今晩の酒手の足しにするために狩ろうとこうことになったのだ。

門番に通交許可証を見せ、三人は街を出る。今日は雲ひとつない青空で、絶好の狩り日和だ。

「じゃあ、乗り物を準備しようか

ドリストがそう言つと、ディニンは使い魔のナイトメアを召喚した。アキヤマとドリストはそれぞれの用意した馬に乗り、具合を確

かめている。ゲームの中ではレンジャー以外のプレイヤーは生き物に乗ることは無かつたため、2人は不安げだ。

が、2人の不安は杞憂だつた。特殊な方法で訓練されたマツマエ商人の馬は、乗り手を最大限に気遣つて走るものだ。ディニンのナイトメアを先頭に馬たちが走り出すと、アキヤマとドリストは安堵のため息をついた。揺はあるが、馬は暴れることもなく大人しくナイトメアについていく。大人しい馬だ、と2人は思った。

平原には、ちらほらと他のプレイヤーたちの姿が見える。ソロで狩りをしているプレイヤーはいないうで、ほとんどが3～6人のグループで狩りをしていた。

10分ほど馬を駆ると、やがて海が見えてきた。

「砂浜では馬に乗れないみたいだから、ここから先は歩こう」

ディニンはそう言つてナイトメアから降りた。彼がナイトメアを送り返すと、2人の友人も馬を巾着にしまったところだった。どうやら、生物でも巾着にしまうことは出来るらしい。

3人が馬から降り、砂浜へと歩き出したそのとき ディニンの目にありえないものが映つた。

「おい、あれ 誰か知らないけど、襲われてないか」

ディニンが指差した先では、5人ほどのプレイヤーが複数の時間湧きまゝに追い詰められていた。

14話（後書き）

番外的な話を書き始めました。「全裸への一の巡る道」という作品です。よかつたら読んでください。

それと、設定に関しての質問などはツイッターで受け付けます。物語の根幹に関わる秘密でなければ気軽にお答えするので、質問などはそちらでお願いします。

マツマの多くのプレイヤーにとって、その時間過ぎmobには複数人で挑むのが常識だ。アシュラと呼ばれるそのmobは、六本の腕を使った連続攻撃を得意とする。魔法防御力が並外れて高く、また複数本の腕から繰り出される連続攻撃はひとりで捌くのは無理があるため、ステータスやスキル熟練度がどれほど高くてもパーティで戦わざるを得ないのだ。

通常は1体ずつしか出現しないはずが、何がどうなっているのか一度に4体ものアシュラが湧いている。いま海岸で追い詰められている4人パーティは一体のアシュラを倒すのには十分な戦力なのだろうが、しかし4体ものアシュラには防戦一方だ。

「よし、助けよう」

アキヤマが言った。腰に佩いた長刀に手を添えて、目を細めて敵を見据えている。

「じゃあ、俺たちは左から回り込もう。ディーンは弓で援護してくれ

ドリストがそう言つと、2人は頷いた。射線上を走られるとやりづらいし、ディーンとしてはありがたい提案だ。アシュラたちは海上に向かって4人のプレイヤーたちを追い詰めているため、左から回り込めばアシュラを挟み打ちする形になる。妥当な作戦だった。

右手からはさざ波の音が聞こえる。潮の匂いがディーンの鼻をくすぐつたが、弓を構えて矢を番えると脳裏から雑音は消えうせた。

時間の流れが異様に遅く感じられる中、射抜くべき敵の姿をきつと見据える。>チャージくのスキルが発動し、番えた矢が徐々に輝きを帯びていく。

4人パーティのリーダーは洋弓を手に持った男性のエルフで、何やら仲間に指示を出しながら自身も戦っている。今にも殺されそうな状況であるというのに随分と落ち着いた様子で、アシュラの体に矢をつきたっていた。

4人のうち2人が盾役として戦っているが、そのうちの1人は装備を見るに本来はダメージディーラーなのだろう。AGIの高さを生かしてアシュラの連続攻撃を必死にかわしているが、体のいたるところに刀傷があった。残りの1人が回復呪文を使っているようだが、それよりもアシュラの握った剣が前衛に傷をつけるペースのほうが早い。今は何とかしのいでいるが、このままではあと1分も持たないだろう。

>チャージくを始めてから30秒ほどが経った。甲冑と盾で攻撃をしのいでいた盾役がアシュラの連続攻撃によるめき、隙が生まれる。その瞬間、ディーンは番えた矢を放つた。青白く発光する矢がかろうじて目視できるほどの速さで飛び、アシュラの背中に突き刺さる。

「救援か、ありがたい！」

一体のアシュラが硬直し、追い詰められていたプレイヤーたちに余裕が生まれた。盾役が体勢を建て直し、タイミングよく僧侶の回復呪文がパーティ全体を癒す。

「私たちはこっちの一体を倒すから、他をよろしく頼む！」

「わかつた、任せろ」

リーダー格の男がそう言つと、アキヤマが答えた。アシュラの背後から回り込み、長刀を抜いて斬りかかる。ドリストはもう一体のアシュラに偃月刀で斬りつけ、振り向きざまの一撃を軽やかにかわした。

新たに一人の剣士が戦線に加わったが、戦況は厳しい。ディニンは新たに矢を番えながら、どの敵を狙うべきか悩んでいた。アキヤマたちは奇襲によつて優位に立つたが、四本腕の怪物にはすぐに劣勢に追い込まれるだろう。海岸を背にして戦つているプレイヤーたちもギリギリのところで戦つている。

転移後は大幅に現実味が増したことによつて若干のパワーバランスの変化が起こつたが、しかしMMOの本質である「効率のいい狩りには役割分担が必須」という点は以前と変わらない。

そのことを考えれば、真っ先に援護すべきは1人で敵と渡り合っているアキヤマかドリストなのだろうが……しかし、四人組の面々はこちらよりも相当疲れているようだ。ディニンには見える。

ディニンが悩んでいるうちにも、刻一刻と戦況は変化する。ドリストは両手の偃月刀でなんとかアシュラと渡り合つているが、アキヤマはアシュラの連続攻撃を捌ききれず、一歩後退した。長刀を巧みに操つてアシュラの棍棒を弾いてはいるが、力負けしている。A G Iを優先して鍛えているドリストは回避のモーションに余裕があるが、どちらかと言えばSTR型のビルドであるアキヤマは攻撃をよけるのは不得手である。パリイ スキルで何とかしのいでいるようだが、この分ではいつ攻撃があたつてもおかしくないとディニンは判断した。

プレイヤーとモンスターが入り乱れる混戦では、強力な射は味方を巻き込む恐れがある。ディニンはアキヤマを援護することにして、幾分か手加減して矢を放った。手加減されて放たれた矢はしかし、やはりとんでもないスピードで飛んで行き、怪物の片目に突き刺さる。体格とリーチの問題でアキヤマはアシュラの頭部を狙えないとめ、彼の邪魔にならないように援護をするには頭部を狙うのが一番だとディニンは考えたのだ。

ディニンは背負つた矢筒に手を伸ばし、新たに矢を番えながら戦況を観察する。

彼が見たところ、追い詰められていたパーティのリーダーはずいぶんと優秀なようだつた。盛んに指示を出しながら、自身も短弓でアシュラをけん制している。本来ならば4人でアシュラ2体を相手にするのは無謀とすら言える行為だが、パーティはよく戦つていた。連携が取れているということもあるが、やはりリーダーの男の指揮能力が傑出しているのだろう。防戦一方だった彼らは、いまやアシュラたちと互角に戦つている。

その様子を見て四人組のほうは大丈夫だろうと判断したディニンは、ドリストと戦っているアシュラに麻痺矢を放つた。矢はアシュラの頬に突き刺さり、アシュラは2本の腕で方目を押さえてしまうめた。すかさず、ドリストが残りの腕に斬りつける。

本来ならば、アーチャーおよびレンジャーの役割は遠距離攻撃でのタゲ取りと各種状態異常攻撃による援護である。現に四人組のリーダーである短弓使いはそういう戦い方をしているようだし、彼のビルドではその戦い方が最も効率が良いのだろう。ディニンのような、防御力を捨ててまで火力と射程にこだわる戦い方はVRMM

Oにはひどく不向きである。データ容量の関係上マップの広さは限られていたし、いくら和弓が火力に秀でているとはいえリリヤによる限界を超えた改造がなければここまで火力は得られなかつたはずだからだ。

チャージを使わなければ比較的速いペースで攻撃できるが、混戦での乱射はフレンドリーファイアにつながる。ディニンは慎重に矢を番え、アキヤマと戦つているアシュラに狙いをつけた。

アキヤマは長刀のリーチを活かし、アシュラの攻撃がぎりぎりで届かない位置を保ちながら戦つている。近づこうとするアシュラに対し、長刀を自在に翻して斬りつける。

アシュラが腕を深々と斬られた瞬間、アキヤマが飛び下がったのを見て、ディニンは矢を射た。先ほどの一射より少し強めに放った矢はアシュラの右ひざに突き刺さり、鎌が貫通した。体勢を崩したアシュラにアキヤマが斬りかかり、形勢が逆転する。

ディニンは矢筒から矢を取り出し、戦場に目を向けながら弓に番えた。

四人パーティは一体のアシュラを屠つたようで、残りの一体と戦っている最中だった。ディニンが眺めている間にも、アシュラの腕が一本落とされ、パーティはますます勢いづく。リーダーの的確な指示に感心し、ディニンはドリストと戦つているアシュラに矢を放つた。

スキル「影縫い」が発動し、ドリストと向き合つていた鬼はその場で拘束される。すかさず2本の偃月刀が下から跳ね上がり、アシュラの腕の付け根に斬り付けた。切れ味のいい刃に切り裂かれ、鈍

い音を立てて腕が地面に落ちる。ドリストはなおも攻撃の手を緩めず、両の偃月刀を閃かせて攻撃のペースをあげ始めた。

「グオオオオ！」

数秒後、アキヤマが相対していたアシュラは腹を深々と切り裂かれ、断末魔の叫びを上げた。地に膝を付いた怪物の喉を長刀が切り裂き、アシュラはばっさりと切り裂かれた喉を押さえて地面に倒れ伏した。

ほとんど同じタイミングで、ドリストが相手取っていたアシュラも崩れ落ちた。全身のいたるところを偃月刀に切り裂かれ、出血多量に陥つたのだろうとディニンは見て取った。本来の体色が分からなくなるくらいに血にまみれた怪物は、うめき声すら上げずに仰向けに倒れた。怪物の軀からはどろりとした赤黒い血が流れでて、砂浜を赤く染める。ドリストは懷から取り出した布で偃月刀をぬぐい、鞘に収めた。

「手伝いましょうか？」

ディニンは弓を背中に背負い、四人組に近づいて声をかけた。彼らと対峙するアシュラは今にも倒れそつだが、とりあえず声をかけてみたのだ。

「いえ、もう平氣です」

リーダー格の男が答えると、パーティの2人の前衛のうちの1人

が雄たけびを上げ、攻撃スキルを発動させた。

「サンダースラッシュ！」

無骨なバスターードソードに青白い電光が走り、大上段に構えられたそれはアシュラを袈裟懸けにたたききつた。肉の焦げる臭いがあたりに漂い、右肩から左のわき腹にかけてを叩き斬られたアシュラはそのまま息絶えた。

「ふう、助かった……」

四人組のうちの誰かが放心したかのように咳き、彼らは安堵してその場に座り込んだ。が、リーダー格の男はすぐに立ちあがってディーンたちに深々と頭を下げた。

「助けてくれて本当にありがとうございます。私は 反労働会 といつギルドのマスターをやっているタキガワという者でして、あつちの3人はギルメンです。本当にありがとうございます、私たちに出来ることがあればなんでも言つてください」

タキガワと名乗った男はディーンが恐縮してしまうくらい何度も頭を下げながら、丁寧な口調でそう言つた。装備の手入れを終えてかけつけてきたアキヤマとドリストにも深々と腰を追つて頭を下げ、丁寧に感謝の言葉を並べた。彼は中肉中背のヒューマン の男性アバターであり、その外見は珍しいことに普通の中年男性だ。誠実そうな雰囲気があり、仲間からも信頼されている様子である。ディーンは、早くも彼の人柄に好感を抱き始めていた。

タキガワが何度も頭を下げて礼を述べていると、彼のギルドメンバーたちも立ち上がり、「ディニンたちの近くへと走り寄り、タキガワと同じように頭を下げ始めた。

（妙に頭の下げる方が堂に入ってる……）これは、もしかして

四人の男性アバターにこれでもかと言つほどの感謝の言葉を聞かされ続けていたディニンは、彼らが頭を下げる様子が妙に様になつていると感じた。彼にはそう見えただけで、実際の社会人からすれば何の変哲もない頭の下げる方なのだが、長年家に閉じこもっていた彼にそんなことがわかるはずもなく。

「まあまあ、そんなに頭を下げないでください、困ったときはお互い様です……ところで、つかぬ事をお聞きしますが、もしかして社会人の方ですか？」

柄にもなく殊勝な言葉を吐いた彼にアキヤマたちが少し驚いたような顔をしたが、彼らが口を挟む前にタキガワが答えた。

「ええ、わけあって退職しましたが以前までは会社に勤めておりました」

その言葉を聞いて、ディニンは内心でガツツポーズを決めた。現在の副隊長に不満のある彼は、元社会人で会社勤めだったタキガワを代わりに副長に据える計画を思いついたのだ。いかにも社会経験の無い引き籠もりらしく、具体的な根拠など何もない計画ではあるが、少なくとも今の彼にとつてそれはすばらしい計画に思えた。先ほどの戦闘ではよく指揮を執っていたようにディニンには見えたし、実際にタキガワはそういった才能には（少なくともディニンよりはるかに）恵まれている。

「なるほど、なるほど……ところで、今日はもう帰るんですか？」

ディーンはタキガワに問いかけた。

「ええ、アシュラ狩りで幾分か資金を稼ぐ予定でしたが、今日はもう疲れました。帰つて休もうと思います」

これはいいチャンスだ、とディーンは思った。普段は使わない頭をフル回転させ、タキガワに申し出る。

「じゃあ、明日の朝9時ごろに北門に来てれますか？ 今日の戦利品は半分ずつにしましょう」

それでいいよな、とディーンは傍の友人たちに確認した。2人が頷いたのを見て、タキガワは驚いた顔をする。

「いやいや、私たちは助けてもらつた側ですか。この上戦利品も山分けなんて、申し訳ないですよ」

恐縮して辞退するタキガワに、ディーンは半ば命令するかのように言った。

「いえ、俺たちも戦利品田端で助けたわけじゃないんですから」

ディーンは、恐縮するタキガワに戦利品の分け前を押し付け、その際に自分の仕事を手伝ってくれないかと頼んでみるとおりだ。人のよさそうなタキガワのことだから、頼み込めば何とか引き受けてもらえるだろうと踏んでいる。

「あー、そこまで言われば断るわけにもいかないでしちゃうな。変わりに、明日のお昼は私がおごりますよ。美味しいとんぶり屋を見つけたんです」

タキガワは困ったように笑いながら、そうこつた。ディーンも慣れない微笑を返し、頷く。

「そろそろ限界なんど、今田はこの辺で失礼させていただきます。本当にありがとうございました」

ディーンが頷いたのを見て、タキガワは言った。最後にまた丁寧なお辞儀をして、三人組のプレイヤーはマツマエへと急ぎ足で帰っていく。たぶん、アイテムを切らしたからほかのモンスターに会いたくないのだろう、とディーンは考えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0401x/>

弓使いの辿る道

2011年11月24日23時54分発行